

371-R76-2ウ



1200500740589

371
0
+)



始



37/



岩波文庫

436—437

エミイル

第四篇

ルソオ著
平林初之輔譯



岩波書店



第四篇

人間の地上に於ける生活は、何と速く過ぎ去ることであらう！ 人生の最初の四分の一は、その用ひ方のわからない間に過ぎ去つてしまつた。そして最後の四分の一は、もはやそれを樂しむことができなくなつてから過ぎてゆくのだ。はじめには吾々は生きてゆくすべを少しも知らない。しかもすぐに生きることができなくなつてしまふのだ。そしてこの無用な兩端の間にはさまつてゐる、残された四分の三の期間を、吾々は、睡眠と勞働と悩みと束縛と凡ゆる種類の苦痛とのうちに費やしてしまふのだ。人生は短かい。といふのは人間の生きてゐる時間が短かいためではなくて、この短い時間の間に、ほんとうに人生を味ふ時間は殆んどないからだ。生れた時から死ぬまでの時間をどんなにひきのばして見たつて仕方がない。この間がほんとうに充實してゐなければ矢張り人生は短かいのだ。

吾々は、云はゞ、二度生れるのである。一度は生存するために生れ、もう一度は生活するために生れるのである。一度は人間として生れ、もう一度は男若しくは女として生れるのである。女を不完全な人間と見做す人は無論間違つてゐる。だが、外部だけを比較するとさう見えぬこともない。思春期までは男の子と女の子との間には一見區別される點がない。顔も姿も血色も聲もみんな同じだ。女の子も子供だし、男の子も子供だ。こんなによく似たものは同じ名前と呼ばば十分だ。發育を阻害された男性は一生涯この類似を保存してゐるし、女性は、この類似をいつまでも失はないので、多くの點で、いつまでも子供のまゝである。

しかし、男子は、一般には、いつまでも子供のまゝでゐるやうにはつくられてゐない。彼は自然から定められた時期に子供から脱する。そしてこの危機は、甚だ短い期間であるが、その影響は極めて長い。

嵐の起る時はずつと前から波が騒ぐやうに、この嵐のやうな革命は、生れ出でんとする情慾の囁やきによつて前觸れされる。重々しい發聲期が、危険の接近を豫告する。氣質の變化、激情の頻發、精神の不斷の昂奮等が子供を、殆んど訓練できなくする。前には彼を柔順にさせた聲がもはや彼の耳に入らなくなる。まるで熱病をわづらつてゐるライオンのやうになる。自己を指導するものが目に入らなくなり、監督されることを欲しなくなる。

氣質の變化をあらはす精神的徴候と共に、容貌にも明白な變化が生ずる。彼の外貌は發育して彼の性格を現はす。彼の頬の下部に生えてゐる柔い疎らな綿毛は、稍や黒く且つ硬くなる。彼の聲は皺喰れるか又は全く出なくなる。彼は子供でもなければ大人でもない、それで此の何方かのやうに話すことが出来ないのだ。今まで黙つてゐた彼の眼、魂の器官なる彼の眼は、言語と表情とをもつて来る。燃え出して来る情火によつて照らされる。日と共に生き生きして来る視線には未だ神聖な無邪氣さがあるが、最初の愚鈍な表情を失つて了ふ。彼は既に眼が十分に物を言へることを知つてゐる。彼は眼を伏せて顔を赤めることを覚え始める。彼は何を感ずるかを知る前に、自分の感ずる事に敏感になる。彼は何故といふことなしに何時も不安な氣持である。總て此等の特質は漸次に發生して、諸君に對して十分な時間を與へるかも知れない。然し若し彼の活潑が短氣となるならば、彼の熱心が憤怒となるならば、忽ち焦立ち忽ち感動するやうになるならば、原因がないのに泣くならば、彼にとつては危険となり始める對象、即ち婦人の前で彼の心臓

の鼓動が早くなり彼の眼が輝くならば、婦人の手が彼の手に觸れた時に彼が慄へるならば、さうして婦人の居る前で臆病になつたり狼狽したりするならば、ユリツスよ、あゝ賢明なるユリツスよ、用心しなさい。汝が非常に骨を折つて閉ぢて置いた風櫃が開かれたのである。風の手は解き放されたのである。一瞬たりとも舵を離すなかれ、さもないと萬事休してしまふ。

これが私の話した第二の誕生である。此の時に人が眞の生活を始めるのである。これより以後は如何なる人事でも彼に無關心なものはない。今日までの吾々の注意は兒童の遊戯に外ならなかつた。が今や吾々の注意は非常に重要なものとなる。普通の教育の終る此の時期こそ正に吾々の教育の始めらるべき時期である。然し此の新しい計畫を十分に説明するために、吾々がやめて置いた處から吾々の話を始めよう。

吾々の情慾は自己保存の主要な手段である。故に情慾を絶滅しようとするのは無用であると共に笑ふべきことでもある。これは自然を吟味することになり、神の細工を造り直すことになるのである。若し神が人間に其の與へた情慾を絶滅せよと云つたとすれば、神がそれを欲して而かも欲しなかつたといふことになる。神は自ら矛盾に陥入ることになる。神は決してそんな愚かな命令を與へない。斯くの如き事柄を、他の人間を借りて彼に話させるやうにはしない。神はそれを彼に自分自身で話す。神はそれを彼の心に書きつける。

さて、私は情慾の發生を防止しようとする人は、情慾を滅ぼさうとする人と同様に愚だと思ふ。さうしてこれが今まで私の目的であつたと考へてゐた人々は、正しく非常に大間違ひをして居たのである。

だが若し吾々が、情慾が人間に取つて自然だといふ事實からして、吾々自身の中に感じられる

凡ゆる情慾及び他人の中に感じられる凡ゆる情慾が皆自然だと結論したならば、吾々は正しく推理したことになつたであらうか？ 情慾の源泉は自然である。それは間違ひがない。けれどもその源泉は他の幾多の小流の爲めに擴大されて来たのだ、その流れは絶えず増大しつゝある大きな河である、此の河に於いては吾々はその本來の源泉そのままの水を殆んど數滴も見出すことが出来ないであらう。吾々の自然の情慾はごく制限されたものである。それは吾々の自由の手段であり、自己を保存せしめるものである。吾々を奴隷にし且つ吾々を滅亡に導くものは別なところから来る。自然は吾々にそれを與へはしなかつた。吾々は自然に逆らつてそれを獲得したのである。

吾々の情慾の源泉であり、凡ゆる爾餘の感情の起源且つ根本であり、人間と共に生まれ人間の生きてゐる間は決して彼を去らない唯一の情慾は自愛心である。此の感情は原始的で、本能的で、凡ゆる爾餘の感情に先立ち、凡ゆる爾餘の感情は或る意味に於いて自愛心の變形に過ぎない。此の意味に於いては、有らゆる情緒が總て自然だと言へる。然しこれ等の變形の大半は外界の原因から生ずるものであり、此の原因がなければ決して生じなかつたに違ひないものである。而かも此の變形したものは、吾々にとつては利益を與へるどころではなく有害である。それは本來の目的を變更し、その本質に逆らつて来る。此の時にこそ、人は自然の埒外に出て自分自身と闘争しはじめるのである。

自愛心は常に善であり、常に自然の秩序に従つてゐる。吾々自身の生命の保存はそれぞれ吾々の各人に委ねられてある以上、各人の第一の、そして最大の注意は、その生命を不斷に保護することであり又保護することではなければならぬ。然るに若し彼がそれに最大の興味を感じてゐな

かつたならば、何うして絶えずそれに注意してゐることが出来るであらうか？

自己を保存するためには、吾々が自分自身を愛することが必要である。吾々は何物よりも吾々自身を愛さなければならぬ。此の感情の直接の結果として、吾々の保存に役立つものを愛するやうになる。總ての子供は乳母が好きになる。ロミュリュスは彼に乳を飲ませた牝狼を愛したに相違ない。機械的である。人は自分の幸福に寄與するものに引き付けられ、害を及ぼすものをば反撥する。これは單なる盲目的本能に外ならない。此の本能を感情に變形し、執著を愛となし、嫌忌を憎惡とするものは吾々に害を與へるか或は吾々に益を與へるかといふことを明白に示す意向である。吾々は感情のないたゞ與へられた刺戟に従ふだけの事物には熱烈に愛著しはしない。だが吾々がその内的性向から、その意志からして利なり害なりを期待し得るもの、吾々に共鳴してなり吾々に反對してなり自由に行動するものは、彼等が吾々に對して示す感情と同じ種類の感情を吾々にも起させる。吾々に利益である事柄ならば吾々は追求する。が吾々に利益を與へようと欲する人々ならば吾々は愛する。吾々を害するものならば吾々は逃げる。が吾々を害しようとする人々ならば吾々は憎むのである。

子供の最初の感情は、自愛である。第二の感情は第一から派生したもので、自分の周囲の人々に對する愛である。蓋し子供のやうな虚弱な状態に在つては、彼は自分に與へられる注意又は援助によつての外は何人をも覺えてゐないからである。最初は、子供の乳母及び保母に對する愛著は唯だ習慣に過ぎない。彼は、これ等の人々が必要であるから又その人々が傍に居れば幸福であるからその人々を欲するのである。それは親切といふよりは寧ろ感謝である。これ等の人々は彼に有用であるのみならず、又彼の女たちの方でも有用でありたいと望んでゐるのだといふことを

理解するまでには、大分長い時間が必要。そして、その時に彼は彼の女たちを愛しはじめるのである。

そこで子供は、誰でも自分の周囲に居る者は自分を援けてくれるのだといふことを知つてゐるので、且つは此の経験からして彼は人類を愛好する感情の習慣を得るので、自然に親切な感情を抱く。然しながら、彼の関係、彼の必要、彼の能動的又は他動的な係累が擴大するにつれて、他人に對する彼の感情が目覺める。それが義務と好悪の感情へと導く。その時子供は横柄で、嫉妬深く、虚言吐きで、執念深くなる。若し吾々が彼に服従を強制して、而かも吾々が彼に命令する事柄が何の爲めになるのかわからない場合には、彼はそれを氣紛れの所爲だと思ひ彼を苦しめようとするのだと思つて反抗する。若し反對に人が彼に服従してゐる場合には、何事か彼の意に逆らふや否や、彼は直にそれを反抗と見做し、彼に抵抗する意思を見做す。彼はその反抗を止めさせるために椅子や卓子を叩く。自尊心は吾々自身にのみ關するものだから、吾々自身の必要を充たすだけで満足して居る。然し常に自己と他人とを比較する自尊心の方は、決して満足しない。また、満足する筈がない。蓋し此の感情は他人より自分自身の方を好むと共に、又他人が彼等自身よりも吾々の方を好むことを要求するからだ。が、それは不可能である。これが優しい愛著の感情が自尊心から發生し、憎悪の、腹立たしい感情が自尊心から發生する所以である。かくて人間を根本的に善良ならしめるのは、慾求の渺いこと、他人と自分自身との比較を出来るだけ試みないことである。反對に人を根本的に悪くするものは、慾求の多いこと、他人の取沙汰に重きを置くことである。此の原則によつて、如何にして子供と大人の感情を善又は惡の方へ指導し得るかといふことを知ることは容易である。成る程人間は常に一人で生きることが出来ないの

で、常に善良であることは困難である。他人との關係につれて、此の困難は必然的に増大する。此の理由があればこそ、就中、社會生活が、吾々をして、人心を新しい欲求から生ずる墮落に陥入らせぬやう保護するために必要な熟練と注意を用ひさせるのである。

人間に適當な研究は、彼等の關係の研究である。人間が物質的生活を通じてのみ自己を知つてゐる間は、彼は自分自身と事物との關係を研究するだけで可い。これは少年時代の仕事である。いよいよその道徳的生活を知り始めると、自分と同胞との關係を研究しなければならぬ。これが人間の全生涯の仕事である。さうして吾々はその研究に着手すべき時期に到着したのである。人が仲間を必要とするやうになるやいなや、彼は最早や孤立した生物ではない。彼の心は最早や一人ではない。人類に對する彼の全關係、彼の心の全愛情が、それと共に生ずる。彼の第一の情慾がやがて他のものを生ぜしめる。

本能の方向は不定である。一の性が他の性の方にひかれる。これが自然の動向である。選擇、好悪、個人的愛著は理性、習慣から生ずる偏見の仕業である。吾々が戀が出来るやうになるには時間と知識とが必要である。吾々は判断をしないでは愛しない。若くは比較しないでは擇り好みをしてしない。これ等の判断は無意識に成立するものである。だが依然そのために眞たるを失はぬ。眞の愛は諸君が何と言はうとも常に人類に依つて尊ばれるであらう。蓋し愛の衝動は吾々を迷はせることがあるとは言へ、またこれを經驗する心から或る忌むべき性質を驅逐しないことがあるのみならず、これ等の忌むべき性質を發生させることさへあるとは言へ、猶ほ戀は常に價値ある一種の性質を假定する。實にそれが無ければ吾々は愛する心境にたち入ることが出来ないであらう。通例理性に對置せられてゐる此の選擇は、實は理性から派生するのである。吾々が愛を盲目

にしたのは、愛の眼が吾々の眼より良くて、吾々の認める事の出来ない諸々の關係を認めるからである。價值や美の觀念を持たない男に取つては凡ゆる婦人は何れも同じ様に好いかも知れない。従つて最初に來たものが、常に最も愛すべきものとなつてゐることであらう。戀は自然から發生しない。それどころではない、それは自然の欲望の留め綱であり法則である。或る人をしてその愛するものを別にせば、他の異性に無頓着であるやうにさせるのは愛である。

吾々は自分が好めば相手にも好まれないと思ふ。愛は相互的でなくてはならない。愛されるために、吾々は愛されるだけの價值をもたなければならぬ。吾々が選び出される爲めには、他の者よりも一層愛されるだけの値打がなければならぬ。總ての他のものより多くそれだけ價值がなければならぬ。少くとも愛人の眼にはさう見えなければならぬ。そこで吾々は初めて吾々の仲間を眺め廻はす。そこで初めて吾々は自分と彼等とを較べる。そこからして競争、對抗、嫉妬が生ずる。一つの感情に溢るゝ計り充ちた心は、自然とそれを吐露することを好む。情人が欲しいと思ふ心から、直ちに友達が必要が出てくる。愛されるといふことが如何に快いかといふことを感ずる人は、總ての人に愛されたいと望むやうになる。そして不満をもつた人々が多くゐなければ、擇り好みといふことが有り得まい。戀と友情と共に不和と敵意と憎悪とが生じて來る。これ等の感情の間にあつては、他人の批判といふものが確乎不動な王座的位置を占めてゐる。さうして愚かな人々はその勢力の奴隷となつて他人の判斷の上のみ自分自身の存在を置いてゐるのを私は見る。

これ等の觀念を擴張すれば、吾々の利己心が、自然なものだと考へられてゐる形式を何處で得たかが解るであらう。又如何にして自愛が絶対の感情ではなくなつて、大人物の場合には誇りと

なり小人物の場合には虚榮心となり、その何れの場合にも隣人を絶えず犠牲にして養はれるものであるかが解るであらう。子供の心には少しの芽生えもない此の種の感情は、自らにして發生するものではない。吾々が種子を蒔くからであつて、吾々の方に過失がなければそれは決して根付かない。だが青年の心ではさうではない。吾々が何をしようとも、それ等の感情は吾々の意思の如何に係らず生れて來る。そこで吾々の方法を變化すべき時期になる。

先づ今議論してゐる此の危機に關する若干の重要な考察から始めよう。少年時代から發情期への移行は自然によつて明白に決定されてゐるのではなくて、個人に於いては氣質により、國民に於いては氣候によつて變化がある。此の點に關して暖國と寒國との間で觀察された差異は、何人も知る處である。且つ熱血的な氣質が他のそれよりも早熟であるといふことは何人も知つてゐる。然し吾々はその原因を間違へる事がある、さうして實は精神的原因に起因すべき事柄を肉體的、原因に歸することが往々ある。これは現世紀の哲學に於ける最も普通なる弊害の一である。自然の教育は徐々に漸々と行はれる、人間のそれは何時も早熟過ぎる。前者の場合は感覺が想像力をよびさまし、後者の場合には想像力が感覺をよびさますのである。想像力は早熟な活動を行はせて先づ個人を消耗させ、衰弱させ、結局人類そのものを衰弱させるに相違ない。發情期と性的能力とは、無智な、野蠻な人種よりは教育のある文明な人種の方が早熟である。これは、氣候の影響であるといふ議論よりも一層一般的な一層確實な觀察である(註一)。子供等は、操行端正といふ假面を透してその下に隠れてゐる不道德な習慣を偵知する能力が異常に早い。諸君が子供等に強ひる固苦しい言葉、彼等に與へる品行方正の教訓、諸君が彼等の眼を蔽ふと稱する神祕の覆面は、それだけ彼等の好奇心を刺戟するに過ぎない。諸君のやり方から判斷すれば、諸君がそれを

隠したと想像してゐることは却つて彼に教へてゐるのに外ならぬことが明白である。諸君が彼に與へる總ての教訓の中で、これが最も早く彼等に利用されるものである。

(註一) ピュツフォン氏は云ふ、「都市及び裕福なる階級の家庭にあつては、兒童は遊養多き食物に馴れてゐるので、比較的早く此の状態に達する。田舎及び貧乏な家庭にあつては、兒童は比較的成熟が遅い。原因は食物が貧弱で粗悪だからである」(博物誌、第四卷、二三八頁)。私は此の觀察は認める。だが此の説明は認めない。何故ならば村人達の食物が十分で且つ甘美な地方、例へばル・ヴァレイや、イタリヤの山岳地方の一部例へばフリウリなどにあつては、兩性が發情期に達する年齢が、都會よりは遙かに遅い。然るに都會にあつては遊養心を満足せんがために、人々が佳き食物に對して非常な節度を加へ、彼の昔の謠にあるやうに、大多數の人間が「天鵝絨の衣物をきて腹の空つばな」連中だといふ事實がある。此等の山岳地方では大人と同じ程大きな男兒が未だ甲高い聲をして鬚のない頬をして居り、又大きな女兒で他の點は十分成人してゐても彼の女の性に特有な月經の徴候の見えないものがあるのは驚くに値する。此の相違は私の考へでは一に次の事實から來てゐるらしい。即ち彼等の動作素朴なので、彼等の想像力が遙かに長い間平和に落着いてゐて、ずつと後まで彼等の血を沸き立たせない、それで彼等の氣質を比較的早熟でなくするのである。

經驗に相談してみなさい、此の愚劣な方法が如何程自然の作用を促進して人間の氣質を破壊するかといふことが分かるであらう。これが都會の人々を墮落させる主要な原因の一つである。若き人々は、早くから根氣がつきて、短少で、虚弱で、不格好である。生長せずに老衰してしまふ。丁度春に實のつた葡萄が衰弱して秋にならない中に枯死してしまふのと同様である。

幸福な無知がいつまで子供達の無邪氣さを延ばすことが出来るかといふことを知るためには、諸君は粗野な素朴な人々の間に生活してみなくてはならない。互に安心しきつた男女が花のやうな青春と美との中に子供時代の素朴な遊戯をつゞけ、その親密さによつて彼等の快樂の純潔なことを示してゐるのを見るのは、胸の迫るやうな、それでゐて何となく微笑まれるやうな光景である。やがて此の愛すべき若人達が結婚するとき、夫も妻もその身の初物を互ひに與へ合ふので、

それだけ益々互ひにとつて親愛なものになる。健全強壯な多數の子供が、何物も變へることのできない結合の保證となり、彼等の若かりし時代の聰明さの收穫となるのである。

若し人が自己の性を意識する時期が自然の作用によつてと同様の効果によつて相違するものとせば、子供達の教育方法に應じて此の時期を促進させるか遅延させるか任意に出来るといふ結論になる。而して若しその道程が促進されるか遅延されるかによつて身體が強さを失ふか増すかするならば、吾々がそれを遅延させようと力めれば力める程、その子供はそれだけ益々強く元氣よくなるといふ結論になる。私は今なほたゞ純然たる肉體的結果にのみついて語つてゐるのであるが、諸君はやがて、單にそれは肉體だけの効果に止まらないといふことに氣がつくであらう。

以上の考察からして、次の極めて屢々議論された問題の解決を私は引き出す。即ち吾々は子供等に對してその好奇心の對象を早く説明してきかすがよいか、或は體裁の好い虚偽で彼等を欺いておく方が可いかといふ問題の解決である。私の考へでは、何方も宜しくないと思ふ。第一に、此の好奇心は、吾々が起る機會を與へない限り、起りはしない。吾々は彼等にその機會をもたぬやう注意しなくてはならない。第二に、是非答へなくてはならない質問でない限り、何も無理に苦しんで質問した子供を欺く必要がない。彼に虚偽の答を與へるよりも寧ろ彼に斷然沈黙を命ずる方がよらしい。若し諸君が取るに足らない事柄に關して幾度も彼に沈黙を命じたことがあれば、彼は此の扱ひに別段驚きはしないであらう。最後に、若し諸君が彼の質問に答へると決心したならば、極めて平明に、祕密を打ちあけるのだといふ風や狼狽の風をみせず、微笑も浮べずに答へるが可い。子供の好奇心を満足させる方がそれを刺戟するよりは遙かに危険の度が少い。諸君の答は何時も眞面目で、簡潔で、確乎としてゐて、躊躇の影を少しも伴はないものでなけ

ればならない。それが眞實でなければならぬと云ふことは言ひ加へるまでもあるまい。吾々は、子供に對して大人に虚言を云ふ危険を教へようと欲するならば、先づ大人の方で子供に虚言を云ふのは更に大きな危険だといふことを感じなければならぬ。教師の口から生徒に對して一つの虚言でもついたことが證明されると、教育の全効果が臺なしにされてしまふ。

或る事柄には全然無知であることが、恐らく子供達に最も適當したものであらう。だが彼等から永久に隠しておくことが不可能なことがらは彼等に早く教へておくがよい。彼等の好奇心が全然刺戟されぬやうにするか、さもなければ此の好奇心が危険になる時期に先立つてそれを満足させてしまふか、どちらかにしなくてはならない。諸君の生徒に對する諸君の舉動は、大部分彼に特有な自分、即ち彼を圍繞してゐる社會、將來彼が入るであらうと豫期される環境によつて定まる。何事も偶然に任しておいてはならない。若し諸君が子供が十六歳になるまで性の差別を知らせずにおくことが出來さうにないと考へるならば、十歳にならないやうにそれを覺えるやうに注意するが可い。

私は子供達に對して堅苦しい言葉を使ふ人を好まない。子供の氣のついてゐる事柄をその本名で呼ぶことを避けようとして長い迂遠な言ひ方をするのを好まない。此等の事柄に關して、善良な風俗は常にあくまでも單純だ。だが惡徳に汚れた想像は耳を疑ひ深くして、絶えず無理にこれ等の事柄についての表現を洗練しようとする。粉飾のない言葉は何等、悪い結果を生じない。眞實避けなければならぬのは淫猥な觀念である。

羞恥といふことは人間にとつては自然であるとはいへ、勿論子供には全然それが無い。羞恥は惡の知識と一緒に生れる。此の知識の無い又無いのが當然であるべき子供が何うしてそれから派

生ずる感情を持ち得る筈があらう？ 彼に羞恥と操行方正といふことを教へるのは、世の中には恥づべき事や不品行な事があるといふことを教へることになる。即ち子供等にさういふ事柄は何ういふものか知りたいといふ秘密な希望を起させることになる。遅かれ早かれ彼等はそれを發見する。そして想像に觸れる最初の火花は、確かに感覺の覺醒を早める。何人にせよ顔を赤めるのは既に罪のある印である。眞の無邪氣は何物にも恥ぢない。

子供は大人と同じ慾望はもたない。然し子供も大人と同じく不潔な行爲を行ふ。そして此の行爲は感官を不快にするので、そのために子供等はやはり品行方正といふことについての教訓を與へられることが出来る。自然の精神に従へ、自然は秘密の快樂の器官と、厭ふべき必要のそれとを同一の場所に置いて、吾々に對し色々な年齢に従ひ、或る時は一の觀念により又或る時は別な觀念によつて同一の配慮を教へてゐる。即ち大人には節制の觀念によりて、子供には清潔の觀念によりて教へてゐるのである。

私は子供の無邪氣を保存する満足な方法を唯だ一つしか知らない。即ち彼等の周圍にある總ての人々をして彼の無邪氣を尊重し且つ愛させることである。さうしなければ、彼を無知のままに置かうと試みる吾々の凡ゆる努力も、遅かれ早かれ失敗に終る。微笑、目配せ、無意識な身振り等は、吾々が彼に隠さうとしてゐるものを總て彼に告げ知らせる。吾々が何か彼に隠さうとしてゐるのだといふことでそれは十分にわかる。禮儀正しい人々が用ゐる微妙な言句や表情は子供のもつてゐる筈のない知識を假想するので、彼等にとつては全く不適當である。吾々が本當に子供の無邪氣を尊重するならば、吾々は、彼等に話すとき適當な言葉を用ひる。子供の無邪氣さに適切であり且つ心地のよい一種の直裁な言葉がある。これこそ子供を危険な好奇心から轉じ

させる眞の言葉である。總ての事柄に關して簡明に彼に話せば、彼にまだ何か言はずに残してあるものがあると疑はせるやうなことはない。粉飾のない言葉をもつてそれに相應する不快な觀念を話せば、諸君は彼の想像の最初の火花を消し止めることができる。諸君は子供がかういふ言葉を用ひ、かういふ觀念を抱くことを禁じなくてよい、だが彼の氣のつかぬやうに、彼にそれ等の觀念を想起することの不愉快さを與へればよいのである。此の素朴な自由は、心から話すために常に正しい事を話す人々、而かもそれを自分自身が感じたままに話す人々にとつて、どの位當惑を免れさせることであらう。

赤ん坊はどうしてできるの？ これは極めて自然に子供の心に生ずる厄介な疑問であつて、これが愚劣に答へられるか賢明に答へられるかに依つて、彼等の生涯の品行又は健康が決定されることがある。世の母親が子供を欺かずに此の質問から逃れられると考へる最も簡単な方法は、子供に黙つて居よ、と、命ずることである。これは、若し子供が重要でない事柄の場合には從來永い間さう仕付けられてゐれば、又彼が母の新しい語調について何か不思議を嗅ぎつけるやうなことがなければ、それで十分間に合ふであらう。然し母親がこれだけで止めて置くことは滅多にない。これは結婚した人の秘密です。小さい子供はそんなことを知りたがるものではない。彼の女はさう言ふであらう。これは母親の當惑を免れるためには甚だ結構である、然し乍ら同時に母親は、子供が此の輕蔑的態度に立腹して、結婚した人々の秘密を發見するまでは少時も止まないといふこと、而して間もなくそれが事實となるであらうといふことを覺悟しなければならぬ。

私はこの同じ問題にこれとは非常に違ふ答を與へた人の話をきいた。それを諸君にお話しよ。

う。此の答は、言行共に慎み深いが、然かも子供の幸福のために美德を養ふ爲めには、必要に応じて世の非難に對する間違つた恐怖と愚人の馬鹿な皮肉とを度外視することの出來た婦人の口から出て來たのであるから、益々私には印象が深かつた。此の子供はその少時前に結石のために尿管を傷めてゐたのであるがその小さな結石を尿と共に出したところであつた。が此の病氣はもう忘れられてゐた。お母さん、赤ん坊はどうして出来るの？ 熱心な子供はかう聞いた。坊や、赤ん坊はね、女の人が時には命にかゝはる程の苦しみをして産むのですよ、母親は躊躇するところなくかう言つた。愚人は勝手に笑ふが可い、無智者は勝手に驚くが可い。たゞ賢者のみはこれよりも賢明な、これ以上に其の目的に適當な答が見出されるか何うかを研究してみるべきであらう。

第一に、子供が既に熟知してゐる自然の必要といふ觀念は、不可思議な作用といふ觀念から彼の考へを轉じさせる。それに伴ふ苦痛と死との觀念は悲痛のヴェールでそれを蔽つて、想像力を殺し好奇心を鎮めてしまふ。總てが出産の原因の方へ心を導かずに結果の方へ導く。若し此の答へによつて厭惡の感じが生じてもなほ子供が説明を求めるとせば、それは人生の虚弱、忌はしい事物、苦痛の有様、かゝることの説明を彼は求めるであらう。かうした會話では、慾望をそゝるやうな機會が何處にあるであらうか。然かもそれにも係らず、事實が少しも變改されてゐないといふこと、何等教へもせずに生徒を欺く必要が全くないといふことがわかる。

諸君の子供が讀書する。そして讀書してゐる間に彼等は讀書しなければ得ることが出來なかつたやうな知識に出會ふ。若し彼等が學者であれば、彼等の想像力は書齋の沈黙の裡で刺戟され鋭くされる。若し彼等が世間に住んでゐれば、彼は不思議な隱語を聞く。彼に深い印象を残す實例を見る。彼等は自分等が人間であるといふことを絶えず聞いてゐるので、人々が彼等の眼の前で

何事かをするやいなや、彼等は直にそれが自分等にも相應しいか何うかといふことを見出さうと
かかる。そこで他人の判断が彼等にとつて法則の役目をするときには、凡ゆる他人の行爲が彼等
には皆模範となることを免れない。子供等に附けられてゐる召使等は、そのために御機嫌を取ら
うと腐心して子供等の徳性を犠牲にして彼等に諷ふ。忍び笑ひの好きな乳母は、最も無耻な女で
も十五歳の子供にも言ひ兼ねるやうな事柄を四歳の子供に話す。乳母達は自分等の言つた事柄を
間もなく忘れて了ふが、子供等は自分達の聞いたことを忘れない。猥褻な話は淫蕩な行爲を行は
せる準備となる。狡猾な侍僕は子供を放蕩者にする。さうして一方の秘密は他方の秘密の保證と
なるのである。

自己の年齢に應じて教育された子供は、萬事一人である。彼は習慣的なそれの外には愛着を知
らない。彼は姉妹を愛すること時計を愛すると同じく、友達を愛すること犬を愛すると選ばな
い。彼は性の區別も知らず、又種の差別も知らない。彼には男も女も同じく解つてゐない。彼は
男や女の言つたことや爲たことを自分に結び付けはしない。彼はそれを見もしなければ聞きもし
ない。又他人に注意を拂はない。彼は他人の話にも行爲にも同じく無頓着である。それは彼にと
つて何等の關係もない。これは此の吾々の方法によつて彼に與へられた人爲の缺點ではない、そ
れは自然の無知である。此の同じ自然が自己の生徒を啓蒙しようとなし注意する時期は近寄つて來
る、而して此の時始めて自然は子供に、その與へる教訓から何の危険もなしに利益を得ること
が出来るとする。これこそ吾々の原理である。此の法則の細目は、私の問題外であるが、他
の事柄に關して私が暗示する手段は、これを説明する上にも役立つであらう。
若し諸君が生起しつゝある情慾に法則と秩序を立てようと欲するならば、情慾の發達する期間を

遅らせて、それが生起するにつれて、それ自身で調整するだけの時間を得ることが出来るやうに
するがよい。此の場合には情慾は自然そのものによつて管理されてゐるので、人間に依つて管理
されてゐはしない。即ち諸君の仕事は單に自然をして自分の仕事を整理させることに過ぎない。
諸君の生徒が一人だけであつたなら、諸君は何もすることがなかつたらう、だが、彼の周圍の總
てのものが彼の想像を燃え立たせる。因襲的偏見の奔流は彼を押し流す。彼を救ふためには、反
對の方向に彼を押し遣らなければならぬ。情操によつて想像を拘束し、理性によつて他人の意
見を沈黙させなければならぬ。凡ゆる情慾の源泉は感受性であるが、想像が情慾の傾向を決め
る。自己の諸關係を知つてゐる有らゆる生物は、此の關係の變化されるとき、而して彼が他に自
分に更に適當してゐるものがあると想像するとき乃至想像すると思ふときに著しく影響されるに
違ひない。あらゆる生物、乃至天使の情慾を、假に天使にも情慾があるとして、惡徳に變ずるも
のは、想像の誤謬の所爲である。何故ならば、彼等は如何なる關係が自分達の本性に最もよく適
合するかといふことを知るためにはあらゆる生物の本性を知らなければならなかつたであらうか
らである。

それ故に情慾の效用に關する人間の知慧の總體は次の如きものである。即ち第一、種族として
並びに個人としての人間の眞の關係を意識すること、第二、此の關係によつて心の愛情を調製す
ることである。

だが人間は、かく／＼の關係によつてその愛情を調製するといふことが自由に出来るか？ 疑
ひもなく出来る。若し彼にして自由にかく／＼の對象にその想像を向けることが出来るならば、
或ひはかく／＼の習慣を彼に與へることが出来るならば、疑ひもなく出来る。その上此處では、

或る人が自分自身の爲めにする事の出来るものよりは、吾々が吾々の生徒をおく環境の選擇によつて彼の爲めにする事の出来るものの方が大切な關係がある。彼を自然の秩序から逸れさせないための適當な手段を示すことは、即ち如何にして彼がそれから逸れることが出来るかといふことを存分に話すことである。

彼の意識がその一身に限られてゐる限りは、彼の行動には道德といふものが全然ない。その意識が彼自身といふ範圍の外に擴大し始めるとき、彼は始めて善惡の感情を形作り、次いでその觀念を形作る。此の觀念が眞實彼を人間たらしめ、人類の一部たらしめる。それ故に吾々は先づ此の點に吾々の觀察を集中しなければならぬ。

かゝる觀察は却々困難である、何故ならばその爲めには、吾々の眼前にある實例を投棄して、自然の秩序に従つて相續して發達して行くやうなものに觀察の對象を求めなければならぬからである。

種々細工され、研磨され、文明の惠を與へられて、たゞ自分の受けた早熟の教訓を實行すべき力だけを持つてゐる子供は、此の力の得られる時機に關して決して間違ひはしない。それを待つてゐるところか、彼はそれを促進する。彼は自分の血を早熟にも醗酵させる。彼は何が自己の慾求の目的であるかといふことを實際それを經驗する遙か以前に知つてゐる。彼を刺戟してゐるのは自然そのものではない。彼自身が自然を強ひてゐるのである。自然は彼が大人となるときに最早や何も彼に教へるものを持たない。彼は眞實大人となる遙か以前に精神的には既に大人であつたのだ。

眞の自然の歩みは、もつと緩慢であり、もつと遅々としてゐる。少しづつ次第々々に血が燃え

立たされる。精神が仕上げられる。性格が形成される。何かをこしらへようとする賢明な職人は、それに要する總ての工具をば使用する前に完全にしようとする。最初の慾求の来る前には長い不安が續く。強ひて長められた無知が彼等を欺いてゐるのである。彼等は自分達が何を欲してゐるのか分らない。血は湧いて泡立つ、一種溢れんばかりの生氣が外に出口を求め。眼は生々と輝やいて他人を見廻す。吾々は吾々を圍繞する人々に興味を覺え始める。吾々は自分が一人生活するやうには造られてゐないといふことを感じ始める。かやうにして心が人間の愛情に對して開かれる。さうして愛著することが出来るやうになる。

注意して教養された子供が受け易い最初的情緒は、戀ではなくして親しみである。彼の生起しつゝある想像の最初の仕事は、彼に自分の同胞を知らせることである。性よりは種の方が先きに彼を動かす。此の點に長く彼を無邪氣にして置いたことの別な利益がある。諸君は目覺め始めた感受性を利用して、此の青春期の少年の心に、人道の最初の種子を蒔くことが出来る。彼の生涯の中で斯くの如き努力が成功するのは此の時期のみであるから、此の利益は益々大きいのである。

私は早くから墮落して女に溺れ放蕩に身をもち崩した若い人々を常に觀察してゐるが、その人々は無慈悲で殘忍である。彼等の激し易い氣質は、彼等を短氣にし復讐的にし怒り狂はせる。彼等の想像は唯一の對象に固定して他の對象を拒む、慈悲と憐愍とは等しく彼等の知らないものである。彼等は自分の些細な快樂のために父も母も全世界も犠牲にすることを厭はない。反對に、幸福な無邪氣の中に育てられて來た青年は、自然の最初の刺戟に依つて優しい且つ愛情の深い情緒に引き付けられる。彼の同情深い心は同胞の苦痛に感動させられる。彼は友達に逢ふ時には

れしさのために慄へる。彼の胸は物優しく抱擁することが出来る、彼の眼は憐愍の涙を流すことが出来る。彼は迷惑を掛ける時の恥かしさから他人を不快にすることを氣の毒に思ふ。彼の熱い血が燃え立つて、彼を短氣で怒り易く性急にしても、忽ちにして彼の生來の親切心が熱心に後悔の意を示してゐるのが見られるであらう。彼は、自分の與へた傷の爲めに泣き、呻めく、彼は自分の血を以つて他人の流した血を贖ひたいと思ふ。自分の過失を意識するやいなや、彼の怒りは消え、誇りは鎮まる。彼の機嫌が損はれた場合には、その怒りの眞最中でも、一の辯解、一の言語で彼は鎮まる、彼は自分の過失を贖ふときと同じく他人の過失をも心から許す。青春期は復讐又は憎悪の時期ではない。それは憐愍、慈悲、寛容の時期である。然り、私はかく主張していさゝかも經驗の證據を恐れるものではない、即ち、二十歳になるまで童貞を續けて來た立派な生れの青年こそ、此の年齢に於いては有らゆる人間中最も善良で、最も寛大で、最も親切で、最も愛情があり、最も愛すべきものである。諸君は決してかゝることを聞いたことがない、公立學校の墮落した中で育つて來た諸君のやうな哲學者が、かゝることに氣が付かぬといふことは、私は十分に信ずることが出来る。

人間の弱さが彼を社交的にする。吾々の共通の不幸が、吾々の同胞に對して吾々の心を引きつける。若し吾々が人間でなかつたならば、吾々には人類に對する義務なぞなかつたであらう。凡ゆる愛情は不十分なものゝあることを示してゐる。若し吾々が互ひに他人の必要を感じなかつたならば、吾々は他人と交際しようとは殆んど考へないであらう。かくて吾々の弱さからして吾々のはかない幸福が生れて來る。眞に幸福な人は孤獨な人である。神のみ獨り絶對の幸福を享有する。然しながら吾々の中にはその絶對の幸福の大體さへ知つてゐる人があるか？ 若し或る不完

全な生物に自給自足が出來たとしても、彼に何の楽しみがあらう？ 吾々の考へる處では、彼は不幸であり又獨りぼつちであつたであらう。私は、何物をも必要としない人間が、何物かを愛することが出来るといふことを理解することが出来ない。又何物をも愛さない者が何うして幸福であり得るかといふことも、理解することが出来ない。

此の結果として、吾々は、吾々の同胞の歡喜の感情によつてよりは、寧ろ悲哀の感情に依つて彼等に愛着させられるといふことになる。蓋し悲哀の方に吾々は吾々自身と似た性質をより多く認識し、又彼等の吾々に對する愛情の保證を一層明白に觀取するからである。吾々の共通の必要が利益によつて吾々を結合させるならば、共通の苦痛は愛情によつて吾々を結合させる。幸福な人の姿は他人に對して愛よりも嫉妬を起させる。吾々は直ちに彼が自分のものでない權利を篡奪して、自分獨りだけを幸福にしてゐるのだといふことを責めにかゝる。而して吾々の自尊心は、此の人々には吾々が必要でないといふことを感じさせるのである。然し乍ら、人の苦しんでゐるのを見た時には、其の不幸者を憐まない者があるであらうか？ 若したゞ望んだゞけで出来るものならば、彼の災ひを救つてやりたいと思はぬ人があるであらうか？ 想像は幸福な人々の位置よりは、不幸な人々の位置の方へ一層容易に吾々を置くものだ。吾々は後者の境遇よりも更に直接に吾々を動かすのを感じる。憐愍は快よい、蓋し自身を困る人の立場に立たせて見て、而かも吾々は彼ほどには困つてゐないといふ愉快さを感じることが出来るからである。嫉妬は苦しい。蓋し幸福な人の姿は、彼を羨む人を彼の位置におくどころか、却つて自分がその位置にゐないといふ口惜しさを彼に感せしめるからである。前者は彼の苦しんでゐる苦痛から吾々を脱却させ、後者は彼の有つてゐる幸福を吾々から奪ひとつたものゝやうに思はせる。

それ故に、諸君が若い人の心の裡に此の眼醒めかけて來てゐる感受性の最初の衝動を刺戟し養成しようとするならば、而して彼の性格を善行と親切とに向けようとするならば、人類の幸福の虚偽の姿を彼に抱かせて彼の心に、倨傲、虚榮、羨望の芽を生じさせぬやうにするがよい。第一に彼の眼に對して宮廷の豪華、宮殿の榮華、演劇の歡樂を示さないやうにするがよい。彼を社交界や華やかな會合に伴れて行かぬやうにするがよい。彼が上流社會をその眞の價値のままに判断することの出来るやうになるまではその外觀を見せぬやうにするがよい。彼が人間に就いて十分の知識を得ない中に彼に世間を見せることは彼を薰陶する所以ではない。それは彼を墮落させることである。彼を教へることではなくて、彼を誤ることである。

人間はその本來からいへば、帝王でも、貴族でも、廷臣でも、富豪でもない。凡ての人間は裸體で貧しく生れる。たれも人生の不幸、悲哀、災害、必要、有らゆる種類の苦惱を免れない。最後にたれも必ず死ぬべき運命をもつてゐる。これこそ、人間といふことの眞實意味するものである。これだけは、何人にまれ逃れぬところである。だから第一に人間の本性についてはその最もひき離し難いもの、眞實人間なるものを成してゐるものを研究することにしよう。

十六歳になると、此の青春期の少年は、苦しむといふことがどういふことかといふことを知つて來る。何故ならば自分自身が苦しんだことがあるからである。だが彼は未だ他の人にも亦苦しみがあつたといふことには殆んど氣が附かない。少しも感ぜずにとゞ見るといふことは、知るといふことではない。さうして私が百度も繰返して言つたやうに、子供は他人の感ずるものを全然想像しないので、たゞ自分自身の苦しみを知つてゐるだけである。だが感覺の最初の發達が彼の想像の火を燃え立たせるときに、彼はその同胞の中に自己を感じ始める。彼等の涙に感動し始

める。彼等の苦惱を苦しみ始める。此の時、憫める人間の悲痛な繪畫が彼の心に彼の未だかつて經驗したことのない憐愍を覺えさせるに違ひない。

若し此の時機が、諸君の子供達に於いては容易に認められぬとせば、それは一體誰の咎であらうか？ 諸君は彼等に「いふん早くから感情を弄ぶことを教へた。諸君は彼等に「いふん早くから感情の言葉を教へた。それで彼等は始終同じ口調で語りつゝ、諸君の教訓を諸君自身に向け返すだけで、何等彼等が虚言をいふのを止めて彼等の口にするものをほんとうに感じ始めるかといふことを見分ける手段をもたせない。だが吾がエミールを見なさい、私が今指導して來た此の年まで、彼は何の感動を經驗したこともなければ又感動した風をしてみせたこともない。人を愛するといふことがどんなことかを知つてからでない、彼は何人に向つても「私は貴君を十分愛します」と云つたことがない。彼は父の室、母の室、或は病氣してゐる教師の室に入るときに何ういふ表情をしなければならぬかといふことを何人からも教はつたことがない。彼は自分の感じない悲哀を扮ふ術を何人からも示されたことがない。彼は何人の死にあつても泣く風をしたことがない。何故なら彼には死ぬといふことが何んなことであるか分らないからである。彼の心にある同じ無感覺が、彼の舉動にも見える。他の子供達の様に、自分自身の外の何人に對しても無關心なので、彼は何人にも興味を感じない。たゞ彼の特異な點は、自分がそんな興味を感じてゐるやうな風を少しも扮はないといふことだけである。彼が他の子供達程に虚偽を行はないといふことだけである。

エミールは世の有情生物について殆んど考へてみることをしないので、苦しむとは何か、死ぬとは何かといふことを知るの遙か遅いことであらう。泣聲や叫聲は彼の腸を動かし始めるであ

らう、流血の光景は、彼に眼を背けさせるであらう。瀕死の動物の痙攣してゐる様は、彼に何とも云へぬ苦痛を與へることであらう。かうした慈悲深い衝動が何處から出るのかは分らぬが必ずそれを與へることであらう。若し彼が依然鈍感で野蠻であつたなら、彼はさういふ衝動を感じなかつたであらう。若し彼にして更に聰明になつてゐたなら、彼はその源泉を知りたいと思つたであらう。彼は既に到底無感覺でゐることが出来ない程度々様々な觀念を比較した。だが彼の感ずるものが何かといふことを知る程十分ではなかつたのだ。

かくして憐愍が生れる。これは自然の秩序に従つて人間の心を動かす最初の相対的感情である。憐愍の心をもつことができる程敏感になるには、子供は、世には彼の苦しんだものを苦しんでゐる彼の同胞があるといふこと、彼の感じた苦痛を感じ且つ、感ずることが出来るのでどういふものかわかる他の苦痛をも感じてゐる同胞があるといふことを知らなくてはならぬ。實に、吾々が自分自身を超越して自分をかゝの苦惱する動物と一致せしめ、かくして云はゞ吾々自身の存在をすて彼自身のそれを取るのではない限り、どうして吾々自身を憐愍によつて感動させることが出来ようか？ 吾々は、自分で彼が苦しむと判断する程度までしか苦しまない、吾々は吾々自身の苦しさを苦むのではなく、彼の苦しさを苦しむのである。それで何人にまれ、その想像が生れと働いて彼に自分を超越させない限りは十分敏感にはならない。

此の眼醒めて來る感受性を刺戟し養成するため、それを指導し或はその自然の傾向に従ふためには、吾々は如何にすべきであらうか。吾々はその青年に對して彼の心の膨張力を働かし得るやうな、彼の心をひろげて、それを他の人々に及ぼし、彼をしてあくまで自己を超越させるやうな對象を提示すべきではあるまいか。彼の心を狭め集中させて、人間の自我の力を強めるやうな

對象を注意して遠去けるべきではあるまいか。即ち換言すれば、彼の心に親切、慈悲、憐愍、恩惠等、自然にとつて悦ばしき優しい魅力ある情緒を刺戟すべきであり、嫉妬、渴望、憎惡等、いはば感受性を無にするだけでなく却つて負の量たらしめ、それを經驗する人々の苦痛とならしめるやうな有らゆる厭はしい殘忍な情緒の發生を妨げるべきではあるまいか？

私は、以上の考慮を、正確で明瞭な理解し易い二三の格律に總括することが出来ると思ふ。

第一格律

人間の心は自己よりも幸福な人々の位置になつてみるものではなくて、たゞ自分よりも多くの不満をもつてゐる人々の位置にのみなつてみるものである。

此の格律に對する例外が見出されるとしてもそれは眞實の例外ではなくて表面的の例外である。かくて吾々は自己の好んでゐる富豪や貴族の場合にさへ、その位置になつてみることはしない。吾々の愛情が誠實である時にさへ、彼の幸福の一部分を吾々のものにするだけである。時々吾々は不幸の眞中にゐる富豪を愛することがある。だが彼が繁昌してゐる限りでは、事の表面によつて欺かれない人、彼の繁昌に係らず彼を羨むよりは寧ろ彼を憐む人の外には、眞の友人といふものは彼には一人もない。

或る種の境涯に屬する幸福は吾々を動かす、例へば田園生活、牧畜生活などがそれだ。これ等の善良な人々の幸福な有様を見る愉快は嫉妬羨望によつて毒されない。吾々は心から彼等に興味を感ずる。これは何故であるか？ それは吾々は此の平和な無邪氣な境涯にいつても自由に下りることが出来、同様な幸福を享受することが出来るからである。これはさうしようと欲すれば

何時でも出来るものだから専ら愉快な考へを興へるものではあるが、最後のとつておきの境遇である。吾々の最後のとつておきの財産を見ながら、現在もつてある財産を見てゐることは、たとひ吾々がそれを使用する意志のないときでも愉快なものである。

だから、青年に慈悲の心を感銘させるには、彼をして他の人々の華やかな運命を嘆美させないで、悲惨な方面の人生を彼に示さなくてはならない。彼をしてそれを恐怖させなくてはならない。そうすれば彼は何人の足跡にも従はずに、自ら幸福に至る自身の道を切開いて行かなくてはならないといふことが明白になる。

第二格律

吾々は、自分自身も同様にその災厄に苦しんでゐると考へなければ、他人の災厄を憐れみはしな

5. Non ignara mali miseris succurrere disco

(われ自ら不幸を知らぬにあらねば、われは不幸を救ふことを知れり也) (ヴァイルジール「エネイド」第一、六三〇行)

私は此の詩句程美しい、深遠な、感動すべき、眞實なものを他に知らない。

何故に帝王は自己の人民に對して憐愍をもたないか？ それは彼等が決して庶民となる筈がないと考へてゐるからである。何故に富者は貧者に對してあれ程酷く當るか？ それは彼等自身が貧者となる恐れがないからである。何故に貴族は平民を見下すか？ それは貴族は決して下層民の一人とはならぬであらうからである。何故にトルコ人が吾々よりも親切であり人を厚遇するか？ それは彼等の絶対専制政體に於いては、個人の名譽や富がいつも不安心で危険なものであり、従つて彼等は貧窮と零落を自分に關係のない境遇と見做してはゐないからである(註二)。何

人にまれ明日にも、自分が今日助けてやる人と同じ境遇にならぬとも限らない。此の思想、絶えず東方の物語に現はれて來る此の思想は、吾々の嚴酷な道徳に見られない一種の優情を讀者に興へる。

(註二) 今日では幾分か變つたやうに思はれる。即ち政狀が少しく落ちついて來、従つて人々は以前よりも冷酷になつて來たやうだ。

それ故に、諸君の生徒にその榮華の高處から不幸者の苦惱や薄命者の勞苦を見下ろすやうな習慣をもたせてはならない。又彼が此の人々を自分とは遙か隔絶してゐるものだと考へてゐる限り、彼等を憐むことを彼に教へようと望んではならない。彼をしてこれ等の不幸者の運命が何時か彼自身のものとなるかも知れぬといふこと、彼等の不幸の淵の總てが彼の足下に口を開いてゐるといふこと、豫想されない避け難い幾多の出來事が何時彼をそこへ飛び込ませまいとも限らぬといふことを十分理解させるがよい。家柄や、健康や、富を決して頼らぬやうに彼に教へるがよい。彼に運命の有ゆる轉變を示して見せるがよい。以前は彼より遙か優れた身分でありながら、今では此等の不幸者の身分より下に零落した人々の有り餘る程ある實例を探して見せるがよい。それが彼等自身の過失からかさうでないかといふことは、此處で吾々の關心するところではない。一體彼は、過失とは何であるかといふことを知つてゐるか？ 彼の知識の秩序に干渉しないで、たゞ彼の力で解し得る知識によつて彼に説明するがよい。人間がどんなに頭をひねつたとて、一時間以内に彼が生きるか死ぬか何うか、夜にならぬ中に腎臓炎の苦痛が彼に齒齧みをさせぬか何うか、一箇月の中に彼が富人になるか貧者になるか、一年の中に恐らく彼がアルジェリアのガリイ船で奴隷頭の革鞭の下に船を漕いでゐないか何うかを彼に答へることが出来ないといふ

ことを覺るのには、別段大した學問は入りはしない。とりわけ、以上のことを彼に語るとき、彼の宗教問答書のやうに冷やかに語つてはならない、彼をして人間の災厄を眼に見せ、又心に感じさせるがよい。あらゆる人間が不斷に圍繞されてゐる危険でもつて彼の想像力を驚かし、恐れさせるがよい。彼の周圍にさうした幾多の深淵を見せてやるがよい。さうして諸君がそれ等のことを話すのを聞くとき、彼がそこへ落つるのを恐怖する餘り諸君に固く獅噛みつかせるやうにするがよい。吾々は彼を臆病な内氣な少年にしてしまふであらうと諸君は云ふかも知れない。それはゆくゆくわかるだらう。だが現在のところは第一に彼を親切な子供にすることから始めよう。これが最も重大なことである。

第三格律

吾々が他人の不幸に對して感ずる憐愍は、此の不幸の大小に比例せず、それを蒙る人々に與へられる感情に比例する。

吾々は、不幸な人達をその憐愍の必要を感じてゐると考へる限りに於いてしか憐まない。吾々の肉體的感情は、吾々の假想するよりは限られたものである。だが吾々に依然それが續いてゐると感じさせるのは、記憶の作用であり、それを將來に引及ぼすのは想像の作用である。吾々を眞實憐まるべきものにするのはそのためである。私の考へでは、人間と動物の兩者に對して共通の同胞感情が吾々を同感させなければならぬ筈なのに、吾々が人間の苦惱に對してよりも動物のこれに對して鈍感な原因の一つが此處にある。吾々は厩舎にゐる馬車馬を殆んど憐みはしない。何故なら、吾々は彼がその乾草を食ひつゝ、彼がうけた鞭打と彼を待つてゐる勞苦とを考へてゐる

とは想像しないからである。同様に吾々は間もなく屠殺されるとは知りつゝ、今草を食つてゐる羊を憐みはしない。何故なら、吾々は羊がその運命を豫視しはしないと信じてゐるからである。かくて吾々は人間の運命に對しても鈍感になる。即ち富者は、貧者を何も感ずることができない程愚鈍だと假定しながら、自分達が彼等に對して爲す害惡について自ら慰めてゐる。一般に私は、何人かゞ、自己の同胞を何と考へるかといふことによつてその同胞の幸福に對して拂ふ代價を判断する。吾々が、自己の輕蔑する人々の幸福を安く見るといふことは自然である。政治家が人民のことを甚だ輕侮的な口調で話し大部分の哲學者が人間をあくまで邪惡なものに考へるとしても、諸君は別に驚くには及ばないのだ。

人類を構成してゐるものは平民である。平民でないものは、數へるに値しない程の少數である。人はどんな身分にある人でも同様である。若しさうであるならば、極めて多數な人々の屬してゐる身分が最も尊敬に價してゐるといふことになる。思索する人の前には、様々の階級位地の差別は消え去つてしまふ。彼は宿無しにも高貴な人にも同様な情慾、同様な感情を見る。たゞ彼等の言語に差別があるだけで、それも多少様子ぶつた語調の差別である。而かも彼等の間に何か根本的な差異があるとならば、その不利は異を立て、矯飾する人々の側にある。平民は眞實あるが儘の姿を見せる。それで人を惹きつけはしない。だが流行社會の人々は假裝を用ひなければならぬ。若し彼等がその本來の姿を示すならば、吾々は戰慄するであらう。

吾が賢者達の話によると、凡ゆる境涯には同じ量の幸福と不幸とがあるといふことである。此の言葉は支持できない言葉であると同時に禍ひな言葉である。若し萬人が同じく幸福であるなら、何で私が何人かについて自らよく／＼する必要があらうか？各人をしてその現在ある處に止

まらしめよ、奴隷は虐待され、病人は苦しみ、不幸者は死ぬままに任せよ、彼等は境遇が變化しても何等の得る處は無い。彼の賢者達は富人の不幸を數へる。而して彼の空虚なる快樂のむなしさを示す。何といふ鐵面皮の詭辯だらう！ 富人の苦痛は彼の身分から生ずるのではない。彼がその身分を濫用した場合に自ら招くのである。彼が眞實貧乏人よりも不幸であつても、同情すべきではない。何となれば彼の不幸は自ら招いたものであつて、幸福にならうと思へば幸福になれるのであるからである。然し乍ら貧乏人の不幸は外部の事情から来る。彼に重荷を負はせる運命の苛酷から生ずるのである。どのやうな習慣を以つてしても、疲勞、困憊、飢餓等の肉體的感情を感じないやうになるわけにゆかない。智慧も慈悲心も彼の境遇の苦痛から彼を免れしめることは出来ない。エビクテートが、自分の主人が自分の足を折るといふことを前以つて知つてゐたとしたとて何の得があつたであらうか？ 主人はその爲めに多少遠慮したであらうか？ 彼は苦痛そのものゝ上に苦痛の豫想をも忍ばなければならぬだけだ。若し平民が吾々から愚鈍だと思はれてゐるのと同じ程度で慧敏であつたとしても、どうして、彼等が現在の彼等より以外のものにならぬやうか？ 此の階級の人々を観察してみよ、諸君は、その用語こそ異へ、彼等は諸君と同じやうに才智をもち、且つ一層多くの常識を有してゐるといふことを認めるであらう。だから諸君の同胞を尊重しなさい。諸君の同胞が本質的に平民から構成されてゐることを考へてみよ。凡ゆる帝王や凡ゆる哲學者が取除かれて了つても、始んど差支へはない。萬事はその爲めに一向故障を生じないであらう。一言にして言へば諸君の生徒に凡ゆる人々を愛することを教へるがよい。人間を尊重することの出来ない人々をさへ愛することを教へるがよい。彼をその階級の成員でもないものとして、同時に如何なる階級にも屬してゐるものとして取扱ふがよい。彼に解るやうに、人類

について優情をこめ憐愍をすらこめて話すがい。決して輕蔑の風を見せて話してはならない。人々よ、決して人を侮辱してはならない。

吾々が青春期の若人の心に入り込んで自然の衝動を刺戟し、それを發達させて、彼の同胞にまで推し及ぼすに至るのは、これ等の道、乃至これと似た他の道に依るのである。世人の踏み馴れた道とは何たる相違であらう。且つ私は、これ等の衝動には私心を出来るだけ混和しないやうにすることが肝心だと附言しよう。殊に虚榮、對抗心、高慢、又は吾々自身と他人とを比較することを強ひる感情を混へてはならない。蓋し斯くの如き比較は、たとひそれが吾々だけの評價に於いてだとしても、第一位を要求して吾々と張合ふ人々に對して或る程度の憎惡心を喚起しなければ、決して行はれることが出来ないからである。その時には吾々は盲目になるか、焦燥するか、悪人になるか、愚人になるに違ひない。吾々は此の板挟みめく羽目を避けるやうにしたい。だが吾々に構はず、早晚此の危険な感情が生ずるであらう、と諸君は言ふ。私はそれを否定はしない。總ての事物にはその時と場所とがある。私は唯だこれ等の感情を喚起することを助長してはならないといつてゐるに過ぎないのだ。

これが私が今説明しなければならぬ方法の精神である。此の場合には實例や細説は無益になつて来る。蓋し吾々は此の時期に殆んど無數の性格の相違が始まるのを發見する。而して私の擧げる總ての實例は幾百千の中で唯だ一つの場合にのみ適用し得るに過ぎない。賢明なる教師が、人の精神を調和してこれを正しく指導する術を知つてゐる學者や哲學者のやうに、自分の眞の事業に着手するのは正に此の年齢に於てである。青年が伴はることを未だ覺えない間に、彼が伴はるといふ意味さへ知らない間に、諸君は彼の顔色、態度、身振りに依つて、彼に示された事物から

彼の受ける印象を見てとる。諸君は彼の顔色に依つて彼の精神の凡ゆる衝動を讀む。その衝動を偵知することによつて、諸君はそれを保護し、事實上それを統御することを知るのである。

一般に血、傷、泣聲、呻吟、痛い手術の用意、及び苦痛に關係してゐる事柄の方へ感覺を導く總てのものは、通常凡ゆる人々に對して最も早く最も一般的に印象を與へるものだといふことが認められてゐる。破壊の觀念はこれよりも複雑に組成されてゐるものだから、それ程に大きな影響を與へない。それより後になつて且つそれよりも弱く吾々の心を動かす、蓋し何人にせよ死ぬことが何んなことかといふことを自分自身の經驗から知つてゐるものはないからである。諸君は死者の苦悶を感じるには屍體を見たことがなければならぬ。然し乍ら一度此の姿が吾々の精神の中に形作られるとき、吾々の眼にこれ以上に恐ろしい光景はない。これは或は死の姿がその時吾々の感覺を通じて喚起する全的な破壊の觀念に由るか、乃至此の瞬間が吾々の何人にも必ず來るといふことを知つてゐるので、吾々はこの境涯を到底逃れることが出來ない爲めに、それだけ生々と影響されることに依るものかであらう。

各個人の性格と以前の習慣とに従つて、これ等の印象はその種類と度合とを異にする。然しながらこれ等の印象は普遍的であり、何人も全然それから免れるといふことは出來ない。また左程に普遍的でなく、且つ遙かに遅れて生ずる印象がある。これは敏感な精神に最も適當した印象であつて、道德的苦痛、内心の煩悶、憂苦、憂鬱、苦惱等からうけるものである。世の中には、泣き聲と涙との外には感動することの出來ない人々がある。悲哀に惱む心の長い抑壓された嘔泣きは、決して彼等に嘆息を洩らさざることがない。沈んだ容貌、青白い陰鬱な顔色、最早泣くことの出來ない弱つた眼を見ても、決して彼等に涙を流させはせぬであらう。精神の苦痛は彼等には

何でもない。彼等はその苦痛を判断する。しかし彼等自身の精神には何物をも感じない。かういふ人々には嚴格と苛酷と残忍との外には何事をも期待することは出來ない。彼等は公正で且つ正直であるかも知れない。だが慈悲がなく、寛大でなく、憐愍の情が無い。若し人間が慈悲の心がなくとも正義であり得るならば、彼等は正義であるかも知れないと私は言ふ。

だがこの標準で若い人々を判断することを急いではならない。殊に正しく教育されてゐるために、まだ道德的な苦しみを知らないもんだから、それに就いては何等の觀念をも持つてゐない青年をこの標準で判断してはならない。蓋し今一度繰返すが、彼等はたゞ彼等の知つてゐる不幸のみを感むことが出来るのに過ぎない。此の表面上の無感覺は全く無知から來るもので、彼等が世の中には自分等の知らない幾千の不幸があるといふことを感じ始める時には、忽ちにしてそれが憐愍の情と變ずるのである。私のエミールが少年時代に眞率と常識とを著しく示してゐたことば、彼の青年時代には暖かい心と思ひやりとを示すであらうと私は確信する。蓋し感情の眞偽は主として、觀念の正確といふことに係つてゐるからである。

だが何故彼を此處へ呼び寄せるのであるか？ 疑ひもなく私が最初の決心を忘れ、私が自分の生徒に約束した永續的幸福を忘れたといふ理由で、私を非難する讀者は一人にはとゞまるまい。不幸者、瀕死者、苦痛と不幸との光景！ 人生の入口に立つ若い心にとつてこれはまた何たる幸福、何たる歡喜であらう！ エミールに極めて愉快な教育を與へようと決心したこの陰氣な教師は、ただ苦しめんがために彼を人生に引き合はせたに過ぎないので彼等は言ふであらう。然し私は何も氣に掛けはしない。私は彼を幸福にすることを約束したので、幸福らしく見えさせることを約束したのではない。諸君が外觀の爲めに欺かれてほんとうにそれを眞實と間違へたとて、私が

非難を受くべきであらうか？

初等教育の終つた二人の青年を選んで、丁度正反對の入口から世間にはひらせてみよう。一方の青年は直ちにオリムプスの山に登り、最上の流行社會に入り込む。宮廷に連れて行かれ、貴顯や富豪や美しい婦人の家庭に紹介される。彼は到る處で持て囃されるものと私は假定する。さうして私は彼の理性に此の歡待が及ぼす影響をよくしらべて見ないで、彼の理性がそれに耐へると假定する。快樂が彼の前を飛んで行く。毎日彼は新しい娛樂物を得る。彼は諸君を感動させる熱心をもつて總ての事に没頭する。諸君は彼が忙しげに、熱中して、物珍らしがつてゐるのを發見する。彼の最初の歎稱の聲が諸君に非常な印象を與へる。諸君は彼を幸福だと考へる。然し彼の精神状態を觀察せよ、諸君は彼が楽しんでゐると思つてゐる。が、私は彼は苦しんでゐるのだと思ふ。彼が始めて眼を開いた時に彼は何物を見たであらうか？ 彼の見たのは從來知らなかつた凡ゆる種類の所謂快樂である。これ等の快樂の大部分は唯一瞬間の間彼の手の届く處に在るに過ぎず、あとでそれが取去られたことを残念に思はせる爲めに彼に示された様に見える。彼が宮廷の中を歩くときは、諸君は彼の不安な好奇心によつて、何故自分の父の家がこれと同じでないのかと尋ねてゐることを認める。彼の凡ゆる疑問は彼が此の堂々たる大厦の持主と自分を絶えず比較してゐることを諸君に語る。さうして此の比較から生ずる屈辱の念は直ちに彼の虚榮心を刺戟し反抗させる。若し彼が自分よりも立派な着物を著てゐる青年を見れば、私は彼が心の中で自分の兩親の吝嗇を咎めてゐるのを認める。若し彼が他人よりも立派な着物を著てゐれば、彼は此の他人が門地又は知識で優れてゐることを氣にする。さうして彼の金びかの着物は質素な布の着物のために屈辱を受ける。若し何かの會合で彼が著しく頭角を示して居るとき、他人から一層立派だと思は

れるやうに爪先きで立つてゐれば、其處に居合はせた人々で心の中に此の若い洒落者と自惚れと虚榮心を貶してやらうと思はないものがあるだらうか？ 總ての人々が同盟したやうに彼に反對する。嚴肅な人の氣味のわるい瞥見、皮肉な人の刺すやうな言句が、必ず彼の耳に入るに相違ない。若し彼を輕蔑するものが唯だ一人であつても、その一人の輕蔑は爾餘の人々の喝采を、一瞬の中に毒して了ふであらう。

吾々は彼に總てのものを許さう。彼に愛嬌と手腕とを與へよう。彼を風采がよく、才氣があり、魅力があるやうにしよう。婦人は彼の後を追ふであらう。然し若し彼が彼女を愛する以前に彼の後を追ふとき、婦人等は彼に戀をさせるよりは寧ろ怒らせるであらう。彼は成功するであらう。だが彼の女等を享樂する恍惚も情熱も感ぜぬであらう。彼の慾望は常に機先を制されてゐて、決して生れ出る時間がないので、その快樂の眞中にありつゝ彼は拘束の倦怠を感じるに過ぎない。彼は實際自分の幸福となるやうに出來てゐる性を知る以前に、それに倦き、それに厭惡を感じてゐるのだ。若し彼が依然として續けてそれを見てゐれば、それはたゞ虚榮心に依つてさうしてゐるだけである。而して彼が婦人に本當にうちこむやうになつたときには、彼女にとつて自分が唯一の青年でなく、唯一の光彩がある者でもなく、唯一の魅力ある者でもなく、彼の愛人がいつも絶對に彼に忠順でもないといふことを發見するであらう。

斯くの如き生活と離し難い凡ゆる種類の不和、欺瞞、罪惡、及び悔恨については何事をも言はない。吾々は、世間の經驗が吾々にそれを厭はせることを知つてゐる。私は最初の幻想に附隨してゐる苦しみだけを話してゐるに過ぎないのだ。

從來家族や友人の團樂の中に閉ぢ籠められて彼等の保護の唯一の對象となつて來た青年にとつ

ては、俄に自分が物の數ともならない新しい世間に這入るといふこと、極めて長い間自分の世界の中心であつた彼が未知の世界に自分が投げこまれてゐたのを發見するといふことは何たるちがひであらう！ 自分の周圍の人々の間で形造られ養成されて來た自分が偉いといふ偏見を未知の人々の間で失ふまでには、彼は如何なる侮辱、如何なる屈辱を耐へなければならなかつたであらう！ 少年の時には、總ての人々が彼に道を譲り、總ての人々が彼の周圍に群がった。青年になると、彼は凡ゆる人々に途を譲らなければならぬ、若し彼が知らずに少しでも以前の様子を持続してゐれば、嚴酷な教訓で彼は思ひ知らされることであらう！ 自分の欲する物は何でも容易に得た習慣があるので、彼の欲しいものは澤山にあり、又そのために彼は絶えず不自由を感じてゐる。彼は自分の氣に入つた總ての物に心を動かす。他人の持つて居る物は彼も亦持ちたいと思ふ。彼は總ての物を欲しがらる。凡ゆる人を羨ましがらる。彼は到る處で主人公となりたがつてゐる。虛榮心は彼の骨までしみ込んでゐる。彼の若い精神は放肆な慾求の熱に燃えてゐる。それと共に嫉妬と憎悪心が生れる。總て熱烈な感情が一時に爆發する。彼は多忙な世間にそれ等の感情で動揺した心をもつて外へ出る。夜になると彼はそれをもつて歸つて來る。彼は自分自身も他人も皆厭になつて歸つて來る。彼は幾千の幻想の爲めに妨げられつゝ、幾千の愚かしい計畫を夢みながら寝る。彼の自負は夢の裡にさへもこれ等の幻想の快樂を彼に描き示す。彼は生涯擱むことの出來ない快樂を慾求してやきもきする。これは諸君の生徒の話だ。次に私の生徒の話に移らう。若しエミールに印象を與へる最初の光景が何か悲しい事柄であれば、彼が始めて自分自身を反省した時の感じは愉快な感じである。彼が如何に多くの不幸を免れたかといふことを知つた場合に、彼は自分自身は想像してゐたよりも遙かに幸福であると考へる。彼は、同胞の苦痛を分か

つ、だがこれは彼の自由意志からするのであり、従つて快樂である。彼は他の人々の不幸に對して感ずる憐愍と自分がそれを免れたといふ幸福とを同時に感ずるのである。彼は自分自身の中に、吾々を自己の上に出させ吾々の幸福の餘剩を他の者に分かつたしめる彼の生氣滿々たる状態を感じてゐる。他人の不幸を憐むには實際吾々はその不幸を知らなければならぬ。然し吾々はその不幸を實感する必要はない。吾々が嘗て苦しんだとき、或は苦しむ處のあるときには、吾々は苦しんでゐる人々を慰む。然し吾々自らが現に苦しんでゐるときには、吾々は自分自身の外は憐まない。だが、吾々の總てが人生の不幸を免れてゐないので、若し何人にまれ、現在自身自身には必要のないだけを他人に與へるのだとしたら、その結果同情といふものが甚だ愉快な感情だといふことになる。何故ならば彼の心の状態が、彼に他人の苦痛に與へることの出來る餘剩のあはれみを何等残さないからである。

吾々は極めて屢々外觀で幸福を判斷し勝ちである。吾々は幸福をその最もありさうでない場所にあると假定してゐる。吾々は到底それの有る筈のない場所にそれを求めてゐる。陽氣といふことはその極めて曖昧な記號に外ならない。陽氣快活な人は往々不幸で、たゞ他人を欺き自己の氣安めをしようと欲してゐるに過ぎないことがある。俱樂部ではよく笑ふ、飽くまで分け隔てせぬ、陽氣な人物が、殆んど總て家庭ではむづかしい叱言家であり、彼等の召使は彼等が友人に與へる愉快の埋合せに苦しませてゐるのである。

眞の満足は陽氣でもなければ騒々しくもない。かくの如き情緒は深く愛着させるので、それを樂しんでゐる間は吾々はそれを默想してゐる。吾々はそれを默々として玩味する。吾々はそれが吾々から逃げるのを慮れる。眞實幸福な人は口數が少く、餘り笑はない。いはゞ、彼は心に幸福

を抱き締めてゐる。騒々しい遊戯や激しい歡喜は、失望と倦怠を隠す。だが憂鬱は快樂の友である。感動と涙とは吾々の最も愉快な享樂に附いてゐる。極度の歡喜は人を笑はせるよりも却つて人の涙を誘ふものである。

最初は吾々の娛樂が數に於いても種類に於いても澤山あることが吾々の幸福を増すやうに思はれ、又最初は靜かな生活の單調さが厭はしく思はれるけれども、仔細に觀察すれば、吾々は反對に最も快よい精神の習慣は、慾望と嫌惡とに殆んど餘地を與へない控へ目な享樂から成立してゐることを發見するのである。慾望の不安は好奇心と氣紛れを生む。騒々しい快樂がないと倦怠を生ずる。吾々は吾々のより愉快な境遇を知らない時には、決して自分の境遇が厭にならない。世界のあらゆる人種の中で野蕃人は最も好奇心の少ない、従つて倦怠の少ない人種である。何物でも彼等にとつては無頓着である、彼等は事物を享樂せず自分自身を享樂する、彼等は何もせず一生をすごして、それで決して厭にならない。

實際社會の人々は大抵假面を被つてゐる。殆んど何時でも自分自身ではないので、彼は殆んど自分自身にとつて他人である。彼がやむを得ず自分自身にかへつてくると、どうも工合が悪い。如何なる人間であるかといふことは彼には何でもない、如何なる人間に見えるかといふことが彼にとつて總てである。

私は、今し方述べた青年の顔色には、何とも言へぬ不快な生意氣と甘たるさと氣取りを描いて見ざるを得ない、これ等は淡白な人々には嫌がられる面白くないものである。私の生徒の顔には、眞の満足と精神の平靜とを示す質朴で愉快な表情が見える。これは尊敬と信任との心を起させ、自分に近づく人々さへ友愛の心を示せば彼の方でもすぐにそれに應じさうに見える。人相は

單に自然の手でしるされた特徴が發達したものに止まると考へられてゐる。私の考へる處では此の發達以上に、人間の顔面の特徴は無意識に或る精神の感動の反覆された習慣的象に依つて形造られて一の人相を現すものであると思ふ。これ等の感動は顔色に現はれる、これ以上確かなものは無い。そしてその感動が習慣的になつた時には、確かに永續的な印刻を残すに相違ない。これが、私が人相は性格を示すものであると思ふ理由であり、又吾々の持つてゐない知識を求めずに、吾々が時々人相によつて性格を判斷することが出来る理由である。

子供は唯だ二種の明白な感情を有してゐるのみである。即ち喜びと悲しみとがそれだ。彼は笑ふか然らざれば泣く、彼は此の中間のものを知らない。彼は絶えず泣くかと思へば笑ひ、笑ふかと思へば泣く。此の交替の不斷の爲めに、顔に永續的な印象がない。従つて何等定つた人相がない。だが子供が一層感じ易くなつて、一層生き生きと一層繼續的に感動されるやうな年輩になると、此等の稍や深い印象がやゝ消し難い痕跡を残すやうになる。而して精神の習慣的狀態からして變化する人々を見ることは珍らしくない、私はそういふ人々を數多見たことがある。而して私はいつも、自分の十分觀察してしらべてみることに出來た人々はその習慣的感情をも亦かへてゐたといふことを發見した。此の觀察は十分に確められたものであるから、私には確定的なものであり、而して教育論に取入れても相應はしからぬものではないと思はれる。即ち教育論では外部的徴候で精神の動きを判斷することを學ぶことが重要な事柄だからである。

私は自分の生徒が因襲的な風習を學ばず又自分の持たない感情を伴はることを學ばなかつたといふ願で、私の青年が幾分愛らしくなくなるか何うかといふことは知らない。そんなことは今の

處問題ではない。私はたゞ彼が更に愛情深くなるであらうといふことを知つてゐる。而して自身の外には人を愛さない人が、他人に對する愛情から新なる感情を得る人と同様に容易に人を悦ばす程、自己の眞情を伴ふことが出来ようとは到底信じ難い。だが此の幸福の感情については、既に理解ある讀者を指導するに足る程、又私が矛盾してゐないといふことを證明するに足る程十分に語つたと思ふ。

それ故に私は自分の方法に歸る。そして私はかういふ、いよいよ危険な年齢が近付いて來るときには、若い人々に對して彼等を興奮させる見世物を見せず、彼等の心を靜めるような見世物を見せるがよい。彼等の眼醒めかけて來る想像を、彼等の感覺を燃え立たせないで、却つてその活動を阻止するやうな物の方へ向けさせるがよい。彼等を大きな都會から遠去けるがよい。都會では婦人の裝飾や大膽な動作が自然の教訓を促進させ、又自然の教訓の機先を制する。又あらゆるものが彼等の眼に對してそれを選択することの出來る年輩になるまでは知つてはならぬ快樂を示してゐるからである。彼等とその最初の住家に連れ返るが可い。そこでは田園の質朴が彼等の年輩の情慾をもつとおそく發達させるであらう。或は藝術に對する彼等の趣味が依然彼等を都會に止まらしめるならば、此の趣味そのものを利用して、彼等を危険な怠惰に陥入らせぬやうに用心せよ。彼等の仲間、彼等の仕事、彼等の快樂を注意して選擇するがよい。人を動かすやうな、而かも純潔な繪畫のみを彼等に見せるがよい。彼等を唆かさずに彼等を感じさせるやうな、彼等の感官を刺戟せずに彼等の感受性を養成するやうなものをのみを見せるがよい。到る處に極端に走ると恐ろしいものがあるといふこと、不節制な情慾は何時も避けることのできない災を招くものであるといふことをよく考へるがよい。とはいへ、諸君の生徒を看病人としたり、慈惠看護夫としたり

する必要はない。不斷に物悲しい苦惱してゐる事物を見せて彼を苦しめる必要はない。彼を養老院から養老院へ、病院から病院へ、絞刑場から監獄へと伴れて歩く必要はない。彼の心に人間の不幸を見せて感動させることは必要である。だが彼の心それによつて冷酷にすることは斷じて不必要である。同一の光景を長く見せるとそれが吾々に印象を與へなくなる。習慣はすべての物をならしてしまふ。吾々の餘り多く見てゐる事柄は最早や吾々の想像に訴へなくなる。而かも吾々が他人の悲哀を感じることが出来るのは唯だ想像を通してのみである。此の故に、常に死と苦惱とを見てゐる僧侶と醫師は甚だ冷酷になる。故に諸君の生徒に人間の運命と同胞の不幸を知らせて置くことは必要であるが、然し餘り屢々それを見せぬやうにしないでならない。慎重に選んで適當な日に見せた唯だ一つの事柄は、彼をして一箇月の間憐愍と反省を味はせしめるであらう。物事に關する彼の判斷を決定するのは、彼の見るものといふよりは寧ろ彼の見たものに對する彼自身の反省である。而して彼の或る對象からうける永續的印象は對象その物から來ず、それを見る彼の見地の如何から來る。そしてその見地は人が彼に與へるのだ。斯くの如く實例、教訓、形像を儉約して使用することによつて、諸君はいつまでも感覺の針の磨滅を防ぎ、自然そのものの指圖に従ひながら自然を騙すことが出来るのである。

彼が知識を得るにつれて、その知識に關係してゐる觀念を選ぶがよい。彼の慾求が燃えたつときは、それを鎮壓するに適當な見世物を選ぶがよい。勇氣と人格とで有名な或る老將軍が嘗つて私に語つた話によれば、彼の青春時代に、思慮深い而も極めて敬虔な彼の父は、彼の眼ざめて來る氣質が婦人に牽引されてゐるのを觀破して、それを制止する爲めには如何なる骨折をも厭はなかつた。だが父親の凡ゆる心配にも拘らず、彼が將に父親の監督を逃れようとした時に、父親は彼

をある花柳病院へ連れて行く決心をした。さうして彼に豫め何も話さず、一團の不幸な人々が恐ろしい取扱ひをうけつゝ、その犯した罪業の滅びるのを待つてゐる部屋に彼をはひらせた。五感を一時に背けさせるやうな此の恐ろしい光景には、流石の青年も嘔氣を覺えた。その時、彼の父親は熱心に言つた「やくざな放蕩者よ、行け、お前を引きつけてゐる悪趣味を追へ。お前は間もなく嬉しがつて此の部屋へ這入つてひどく幸福になるであらう。そして最も耻づべき疾病の犠牲となつて、お前が死んだ時、お前の父に神さまに感謝することを餘儀なくさせるであらう。」と。これ等の數語と青年を感動させた驚くべき光景とが相俟つて、決して消すべからざる印象を彼に與へた。彼は職務の關係で青年時代を兵營で送る事を餘儀なくされたが、同輩と一緒に遊蕩に耽るよりも甘んじて同輩の有らゆる嘲弄を受けてゐた。彼は私に言ふ「私だつて男であつた、私にも私の弱點があつた、だが此の年になるまでまだ戰慄せずに淫賣婦を見たことがない」と。教師よ、多言する勿れ、たゞ時と場所と人を選ばばよい。然る後諸君の教訓を具體的實例によつて與へるがよい。さうすれば必ず効果があるであらう。

少年時代が如何に送られるかといふことは問題ではない。害悪がすべり込んだとて治癒し難きものではない。善事の爲さるべきものは遙か遅く來るかも知れない。然しながら眞の生活の始まる最初の時代はこれとは異ふ。此の間に爲すべき事柄に較べると、此の時期は決して長くはない。此の期間は重要であるから不斷の注意が必要である。これが、私が如何にして此の時期を長引かせるかといふことに重きを置く理由である。最良の耕作法の一つは耕作物を出來るだけ遅らせて置くことである。總て進歩を徐々に且つ確實ならしめよ、青年が大人になる資格のないとき一時に大人になることを防止するがよい。身體が發達して來る一方、血液に活力を與へ筋肉に

勢力を與へる役目のある精氣が形成され鍛煉される。若し諸君が此の精氣に別な道を取らしめるならば、そして一人物を完成する爲めに定められてゐるこの力が他の人間を形作る爲めに用ゐられるならば、兩者は共に虚弱の儘になつて、自然の事業は完成されない。精神の作用も、此の變化の爲めに影響を受ける。精神は肉體と同じく病的になつて、物懶げに虚弱にはたらくやうになる。大きく強い手足だつて、勇氣や天才にはならない。私は、精神の力は必ずしも身體の力と伴はない、別して、心身を關係させる機關が他の點に於いて缺點のある場合には身心の力は一致しないといふことを認める。然し乍ら、身心が如何に見事に組織されてゐても、若し疲弊し、衰頽した血液、全機械の有らゆる彈機に力と彈性を與へる物質がかけてゐる血液をその原動力としてゐたならば、身心の作用は必ず薄弱になるであらう。青年時代に早熟な悪習に感染しなかつた人々は、惡徳にふける力ができるとすぐ頽廢した生活を始めた人々よりは一般に精神が旺盛なのが認められる。而してこれが疑ひもなく、道徳の高い國民が一般に道徳の低い國民よりは常識と勇氣が優れてゐるといふ理由の一つである。此の道徳の低い國民は才氣、伶俐、銳敏と彼等が稱するあくまで些々たる資質によつて比類なく角頭を現してゐる。然しながら、善行、美德、眞に有用な努力に依つて人間を區別し尊敬せしめる聰明と理知の壯大高尚なる機能は、かゝる國民には一つだに見出されない。

教師達は此の年齢の激情が生徒を御し難くするといふことを嘆ずる。私もそれは事實であるのを認める。然し乍らそれは教師自身の罪ではないか？ 若し彼等が一度感覺の通路を通じて、此の激情の流出する儘に委せるやいなや、最早やその進路を變へることが出來ないといふことを彼等は知らないのであるか？ 術學者の長い、無味乾燥な説法が、生徒の精神から彼の感じてゐる

快樂の思想を拭き消すであらうか？ 術學者等が彼の心から彼を苦しめてゐる慾望を驅除するのであらうか？ 生徒がその用ゐる方を知つてゐる情慾の熱を冷却するのであらうか？ その生徒は彼が多少とも知つてゐる唯一の幸福を妨げる障礙物に依つて焦ら立たされないのであらうか？ 而して彼に理解もさせずに強制された嚴酷な取締に對しては、彼は自分を苛責しようとしてゐる人間の氣約れと憎惡の外に何を認め得るであらうか？ 彼の方でも亦反抗して諸君を憎むやうになるといふことが不思議であらうか？

人はしやすいやうにされれば表面的の權威に耐へ、これをまもつてゐることが出来る。私はそれをよく知つてゐる。だが本來禁絶しなければならぬ惡徳を煽動することによつてのみ生徒に對して維持されるやうな權威が何の役に立つかは私には分らない。それは丁度悍馬を鎮めんがために、それに斷崖を躍り越えさせようと試みるやうなものである。

此の青春の激情は教育の邪魔になるどころではない。却つてそれがあるので教育が成就され完成されるのである。これこそ、青年がもはや諸君よりも弱くはなくなつてゐる此の時に、諸君に彼の心を掴む手蔓を與へるものである。彼の最初の愛情は、諸君に彼のあらゆる行動を制取させる手綱である。彼は前には自由であつた。今は彼は諸君の掌中にはひつたといふことがわかる。彼が何物をも愛しないときには、彼は自分自身と自分の必要以外の有らゆるものから獨立してゐた。だが彼が愛情をもち始めるやいなや、彼はその愛情のまゝに動く。かくして彼を人類に結合する最初の連絡は既に形成されてゐるのだ。諸君が彼の眼覺めかけて来る感受性を此の方に差向けるときに、それが直に有らゆる人間を含むであらうといふこと、全人類といふ語が彼にとつて幾分かの意味をもつであらうといふことを期待してはならない。いな、此の感受性は最初は彼自

身の如き人々にだけ限られる、彼自身の如き人々といふのは、全然彼にとつて未知の人々ではない、彼と關係のある人々、習慣上彼に對して親愛に或は必要になつた人々、彼が自己と同様に思考し、同様に感ずることを明白に認める人々、彼の苦しんだ苦痛に苦しみ、彼の楽しんだ快樂を樂しむ人々、一言でいへば、天性の類似がそれだけ多く彼の心を自己を愛する方に向はしめるやうな人々がそれである。彼が個人的觀念を人類なる概念の下に一般化して、彼の個人的愛情に彼と人類とを一致せしめ得る愛情を附加することの出来るのは、幾多の方法で長い間修練した後、彼自身の感情及び彼が他人の中に認めるそれを十分考慮した後開始して出来るのである。

彼が愛することが出来るやうになると、彼は他人の愛情(註三)にも氣が付くやうになる。そして此の愛情の徴候に氣を付けて来るやうにすらなる。此のとき諸君は、彼に對して如何なる新な勢力を得ることになるかといふことを知つてゐるか？ 彼が未だ氣が付かない間に、諸君は彼の心の周圍にすつかり綱を巻きつけたのだ！ 彼が眼を開いて自分自身を顧み、諸君が彼の爲めにしたことを見るときに、彼は何んと感ずるであらうか、自分を他の同年輩の青年に比較し、諸君を他の教師に比較することが出来るやうになるときに、彼はなんと感ずるであらうか！ 私は彼がそれを見るときと言ふ、だが諸君はそれを彼に話さないやうに注意してほしい。若し諸君が彼に話せば、彼は決してそれを見ないであらう。若し諸君が彼に加へた保護の代償として、彼の服従を求めらば、彼は諸君が彼を欺いたと思ふであらう。彼は、諸君が無報酬で彼の面倒を見てゐる風にみせかけつゝ、彼に一種の負債を負はせ、彼が全然同意しなかつた契約に拘束する積りであつたといふことを彼は吾と自ら認めるであらう。諸君が、自分の彼に求めるものは彼自身の幸福に外ならぬと言ひ加へたつて無駄である。諸君はそれを求める、而かも諸君は彼の同意を

得ず諸君の行つたものに依つて、それを求める。一人の不幸な人間が自分に與へられるつもりで役人から金を貰つて、而かも自分が知らぬ間に兵籍に登録されるとすれば、諸君はその不正義に抗議するであらう、諸君の生徒が受取りさへもしなかつた保護の代價を生徒から要求する諸君は、更に甚だしく不正なものではないか？

(註三) 愛情は開けられないこともある、然し友情はさうではない。友情は交換である、凡ゆる他の契約と同じく契約である、但し他の契約より一層神聖なる契約である「友」といふ言葉には、それ自身以外に何等の對語がない、何人にまれその友人に對して友人でない男は、言ふまでもなく惡漢である、蓋し友情は、それを與へ、或はそれを與へると伴つてのみ得ることが出来るものだからである。

若し高利貸的親切といふものが尠なければ、忘恩といふことがそれだけ少なくならう。吾々は自分に親切にしてくれる人々を愛する。これは飽くまで自然な感情ではないか！ 忘恩は元來人間の間にはない、が自利心といふものはある。自分の受けた恩を感謝しない人々は、自利の目的で親切を行ふ人々よりは數が尠い。若し諸君が諸君の贈物を私に賣れば、私は商人的にそれを値切るであらう。然し若し諸君が自分の思ふ値段で後に賣る爲に、諸君がそれを黙つて私に與へるやうなことをすれば、諸君は詐欺の罪を犯したことになる。無代の贈物こそ、無上の價がある。人の心はそれ自身の法則にしか従はないものだ、若し諸君がそれを拘束しようとするれば、却つてそれを失ふ、それに自由を與へてこそ、それが諸君自身のものとなる。

漁師が糸に餌を附ければ、魚は疑ふ事なく彼の周圍に集まる。が魚の餌の中に隠してある釣針に掛かると、糸の引張るのを感じて逃げようとする。漁師は恩人であらうか？ 魚は忘恩者であらうか？ 吾々は恩人に忘れられた人でその恩人を忘れた人を見たことがあるか？ 反對に彼は悦んで何時もその恩人の話をする。彼は感激せずその恩人のことを考へることが出来ない。若

し或る偶然の仕事から、自分が恩人の自分にしてくれたものを記憶してゐるといふことを彼に示す機會があれば、自分の感謝の情の満足されたことを何れ程悦ぶことであらう！ 如何に愉快な心でこれで御恩返しが出来ましたと彼は恩人にいふことであらう！ これこそ實に自然の教訓である。眞の善行は決して忘恩を措きはしない。

故に感謝が自然的な感情であり、諸君が自分の過失に依つてその効果をそこなはないならば、諸君の生徒が諸君の保護の價値を理解するやうになつた際には、彼等はきつとそれを感謝するといふことを諸君は確信していい。但しそれは諸君が自分の保護に値段を付けて置かない場合だけに限る。そのときにはこの保護は、生徒の心中に於いて何物も破壊することの出来ない權威となるであらう。然し此の利益が本當に諸君自身のものとならない中に、それを失はないやうに注意せよ。諸君自身の重要なことを吹聴して、それを失はないやうに注意せよ。諸君が自分のつくした恩を自慢すれば、それは彼にとつて堪へ難くなつて来る。自分のつくしたことを自分で忘れることは、生徒にそれを忘れさせない道であらう。彼を大人として取扱ふ時期の來るまでは、諸君に對する彼の義務といふことを問題にしてはならない。唯彼自身に對する彼の義務の問題だけではない。若し諸君が彼を毀し易くしようと思ふなら、彼に自己の自由を與へよ。諸君は隠れてゐて彼に諸君を求めさがさせよ。彼自身の利益だけを語りつゝ彼の精神を崇高な感謝の念に高めさせよ。私は、彼が理解することが出来るまでは、諸君が自分の行つた事柄が彼の幸福の爲めだといふことを彼に語らないで欲しいと思ふ。さういふ言葉をきくと、彼は諸君が彼に從屬してゐるのだといふ意味に解する、従つて彼は單に諸君を自己の召使ひだと解するに過ぎない。だが今や彼は愛とは何かといふことを感じ始めてゐるので、彼は如何なる優しい愛情が人をその

愛するものに結び付けるものであるかといふことも知つてゐる。それで彼は、彼の爲めに諸君を常に忙しくさせてゐるあの熱心の中に、今や奴隷の愛着を見ないで、友人の愛情を認めるのである。さて世の中には十分それと認められた友情の聲ほど、人間の精神を深く動かすものは無い。蓋し吾々はそれが吾々の利益以外には何事をも語らないといふことを知つてゐるからである。吾々は、吾々の友人が間違つて居ると思ふことがあるかも知れない。然し吾々の友人が吾々を欺かうと欲してゐるとは決して信ずることが出来ない。吾々は時々彼の勸告を拒む、然し決してそれを輕蔑しない。

吾々は遂に道徳的秩序の中へはひつてゆく。吾々は今正に成人の第二步を踏んだのである。若し此處がそれに適當の場處とすれば、私は如何にして心の最初の衝動が良心の最初の聲を生むに至るか、如何にして愛と憎惡の最初の感情から、善と惡の最初の觀念が生ずるかといふことを説きたいと思ふ。正義と親切とは決して單なる抽象名詞ではないこと、即ち決して單に理知に依つて形造られた道徳的觀念ではないこと、反對に理性に依つて目覺まされた精神の眞の愛情、吾々の原始的愛情の自然的成果であるといふこと、又良心の援けを借りずに理性のみに依つては、吾は何等の自然的法則をも確立することが出来ないといふこと、一切の自然的權利は若しそれが人間の心の或る自然的必要の上に立脚してゐないならば、一の夢想に外ならないといふことを證明したいと思ふ(註四)。が、然し乍ら私は此處で形而上學又は倫理に關する議論をしようとは思はないし、又何等かの種類の研究を講義するつもりもない。私にとつては、吾々の成長に關する吾々の感情と知識の秩序と發達とを述べればそれで十分である。私が此處でほんの指摘するだけに止めて置くものは他人が實證するであらう。

(註四) 『己れの欲する處は之れを他人に施せ』といふ訓言は、良心と感情以外には眞の根柢を持たない。蓋し、私が自身身であるのに何故に他人であつたかの如く振舞ふ特別な理由があるか？ 殊に私自身さへ二度と同一の立場に立つ事の決してないといふことが精神的にみて確實である場合に於いて然りではないか？ 又私が此の格言に飽くまでも忠實に従つた場合には他人も亦私のために同じやうにこれに従はせることが出来るといふことをそも何人が私に保證するであらうか？ 惡人は正しい人の正直と自分の不正を併せて利用する。彼は喜んで自分以外の總ての人々の正しからんことを望むであらう。諸君が何と言ふにしても、此の取引は正しい人にはひどく不利なものだ。然し乍ら汪濊する愛情の熱誠が私の同胞と私を同一視させ、言はゞ私自らを苦しめないがために彼を苦しめたくないと感ずる場合には、私は自分に對する愛情のために彼に關心することになる、従つてこの訓言の理由は人の天性その者の中に發見される、即ち自然の天性は私が何處に居ようとも私自身の幸福を望むやうに私を刺戟するからである。此の點から、私はかう結論する。人道の訓言は唯だ理性にのみ基いてゐるといふのは間違つて居る、それにはより以上確實な、より以上堅固な基礎があるのである、と。自愛の心から出た人類愛こそ、人間の正義の根源である。道徳の全體は、此の法則の根源といふ形式で福音書中で述べられてゐる。

吾がエミールは今日まで彼自身のことより考へたことがないので、彼が同胞に對して與へる最初の瞥見は、彼に彼等と自分自身とを比較させる。此の比較が彼の心に起させる第一の感情は、第一位に立ちたいといふ望みである。此の時に於いて、自愛心が利己心に變るのだ。さうして利己心から生ずる有らゆる感情が皆此の時から生じ始まるのである。だがこれ等の感情の中で、將來彼の性格を支配すべきものが、慈悲深い優しいものであるか、或は残忍な嚴酷なものであるか何うか、それが親切と同情の感情であるか、嫉妬と羨望の感情であるか何うかを決定するためには、彼が自己の人間中に於ける位置が何んなものであると考へてゐるか、さうして自分が占めようと思ふ位置に到達するには如何なる障礙物に打克たなければならぬと覺悟してゐるかといふことを知らなくてはならない。

此の探求で彼を導くには、今まで人類に共通な不幸によつて人間といふものを示して来たのは反對に、今はその相違によつて彼に人間といふものを示さなくてはならない。此の時が自然的社會的不平等を測り、全社會組織を描いて示すべき時期である。

社會を研究するには人間によらなければならず、人間を研究するには社會によらなければならぬ。政治と道徳とを別々に取扱はうと欲する人々には、兩者の何れも全然理解されないのであらう。最初原始的關係だけに限つていふと、吾々には、如何に人間がそれに影響されるべきか、又如何なる感情がそれから發生すべきかといふことが分かる。又、相互的にこれ等の感情の發達に比例して、かゝる關係が増大し且つ鞏固になることがわかるのである。人間を獨立させ自由ならしめるものは、腕力の強さよりも寧ろ精神の節限である。何人にまれその要求が極く少ない人々は極く少數の人々に頼るだけで足りる。だが吾々の肉體的慾求と吾々の虚榮的慾求とを混同してゐるために、前者を人間社會の基礎であるとした人々は、何時も結果を原因と取違へ、従つてその推理をたゞ混亂させるだけであつた。

自然の状態には、一種眞實な破壊し難い實際の平等がある。何故ならば此の状態に於いては、人と人との間の相違が一方を全然他方に頼らしめる程大きいといふことが有り得ないからである。文明社會には一種空想的な虚妄な權利の平等がある。何故ならばそれを支持すべき筈の手段そのものが、却つてそれを破壊する手助けをする上に、公衆の力が、弱者を壓抑するための強者の力に附加されるので、人類から、自然が彼等の間に確立した平衡を奪ひ取つてしまふ(註五)。此の第一の矛盾からして、文明社會にみられた實際の間の有らゆる矛盾が生れて来る。多數は常に少數の犠牲にされ、公衆の福利は個人的利益に犠牲にされる。正義、服従といふ丁度格好の言葉

が、何時も暴虐の道具となり、不義の武器として役立つ。此の點からして、他の階級に對して有益であるらしく見せてゐる上流階級は、實際は他の階級を犠牲にして専ら自身自身の利益のみを求めてゐるのだといふことになる。此處からして、吾々は、正義と理性によつて彼等に如何程の尊敬が相應はしいかといふことを判断しなければならぬ。残つてゐるのは、彼等の到達した身分が、それを占める人々の幸福にとつて更に有利であるか何うか、吾々の各々が各自身の運命について如何なる意見をもつべきかといふことを知るために更に有利であるか何うか、といふことを見る問題である。これこそ、今吾々が關心してゐる研究である。だがこれを徹底的にやるには、人間の心を知ることから始めなくてはならない。

(註五) 有らゆる國家の法律の普遍的的精神は常に強者の味方をして弱者を抑へることである、有産者の味方をして無産者を抑へることである。此の缺點はさげがたいもので、且つこれには一の例外もない。

若し青年に對して假面をつけたまゝの人間を示すだけのことであつたならば、何も態々彼等にそれを示す勞をとる必要がなかつたであらう、彼等はいつてもかゝる人間を澤山目の前にみてゐたであらう。だが假面が人間ではなく、且つ諸君が諸君の生徒に人間を描いてみせるときに、假面の表皮だけで彼等を欺いてはならないとすれば、彼等にあるがまゝの人間の姿を描いてみせるがよい。それは諸君の生徒をして彼等を嫌はせるためではない、彼等を憫ましめ彼等に似たくないと思はせるためである。私の考へでは、これこそ、人間がその同胞に對して抱き得る最も合理的な意見であると思ふ。

此の目的からして、吾々は今日まで従つて来た道とは正反對な道をとつて、吾が青年を教育するに彼自身の經驗よりも他人の經驗によつてしなければならぬ。若し人間が彼を欺くならば、

彼は人間を憎むであらう。だが彼が彼等から丁寧には扱はれてゐる一方、彼等同志が互ひに欺き合つてゐるのを見る時は、彼は彼等を憐むであらう。ピタゴラスはかう云つた、「世界の光景は丁度オリムピック競技のそれに似てゐる、或る人々は店を開いて、たゞ自分の利得を考へてゐる、他の人々は進んで事に當つて名譽を求め、又他の人々はその競技を見るだけで満足してゐる、而かも此の人々が一番つまらないのぢやない」と。

私は、諸君が、若い人に自分と共に生活してゐる人々に好意をもたせるやうに彼の仲間を選んでやつて欲しいと思ふ。又彼が世間に起る總ての事柄を邪惡視するやうに十分彼に世間のことを教へてやつて欲しいと思ふ。彼に、人は天性善だといふことを學ばしめよ。彼にそれを感じさせよ。彼自身によつてその隣人を判断させよ、だが同時に如何に社會が人間を腐敗させ墮落させるかといふことを見せよ。彼等の偏見の中に有らゆる惡徳の源泉を見出させよ。彼に、個人は尊敬するが群集は輕蔑させるやうにせよ。彼に有らゆる人間が殆んど皆同一の假面を被つてゐることを見せよ。同時に人々の素顔はそれを隠してゐる假面より遙かに美しいといふことをみせよ。

此の方法には種々不便な點があり、又實地ではさう容易でないことは、認めなければならぬ。何故ならば若し彼が餘り早くから他人の觀察に専心するならば、若し諸君が彼を餘り仔細に他人の行爲に注意するやうに訓練するならば、諸君は彼を惡口好きな皮肉家にしてしまふであらうからだ。輕率に躁急に他人を判断する人間にしてしまふであらうからだ。彼は邪惡な動機を求めることに厭ふべき快感を覺えて、實際善いものゝ裡にさへ喜びを見ることが出来なくなるであらうからだ。彼は少くとも惡徳を見ることに慣れるであらう。何等恐れずに惡人を見るやうにならう。丁度吾々が何の憐愍も感ぜずに不幸者を見るに慣れて來てゐるやうなものだ。やがて一般人類の

邪惡が彼に教訓を與へるよりも寧ろ辯解を與へることにならう。彼は、若し人間がかういふものなら、自分もそれとは違つたものとなつてはならぬと考へないとも限らない。

だが若し諸君が彼を原則的に教育して、彼に、人間の心の本性と、吾々の性向を惡徳に向はせる外的原因の適用を認めさせようと思ふならば、諸君は彼を感覺の對象から一躍して知的對象につれ去り未だ彼に理解の出来ない形而上學を用ゐることになる。その時、諸君は今迄十分注意して避けて來た、彼にいかにも教訓らしい教訓を與へるといふ不便、彼の精神の裡に於いて彼自身の經驗と彼自身の理性の進歩とを、教師の經驗と權威とに代へてしまふといふ不便に落つることになるのだ。

此の二つの障礙を同時に除いて、彼自身の心を損なふ危險を何等伴はずに人間の心を彼の理解し得る範圍にもち來すために、私は彼に遠方から人間といふものを示したいと思ふ。他の時代或は他の土地に於ける人間を彼に示したいと思ふ。かくすると彼はその光景を見て而かもそれに與からずにあることが出来る。これが歴史を利用すべき時機である。歴史の助を得ると、彼は哲學の教訓なしに人間の心を讀むことが出来る。此の助けを得ると、彼は單なる傍觀者として、冷靜な、偏見のない傍觀者としてそれを眺めることが出来る。彼等の援助者としてでも彼等の非難者としてでもなしに彼等の批判者として眺めることが出来る。

人間を知るには、諸君は彼等の行爲を見なければならぬ。交際社會にあつて、吾々が聞くのは人間の語ることだけだ。彼等は言葉を見せて、行爲を隠してゐる。だが歴史に於いては、彼等の行爲は暴露されてゐる。それで吾々は事實によつて判断することが出来る。彼等の言語さへ、彼等を理解する助けとなる。何故なれば彼等のすることゝ、彼等の言ふことゝを比較して、吾々

は、彼等の有りのまゝの姿と、彼等が見せかけようと思つてゐる姿とを同時に見るからだ。彼等は假裝すればする程、それだけ鮮やかに眞の姿が現はれる。

不幸にして、此の研究には危険がある。種々の不便がある。人をして公平にその同胞を批判させるやうな見地を取らしめることは中々困難である。歴史の最大の缺點の一つは、それが人間を描くに善い方面より悪い方面からすることが多いといふことである。例へば歴史を興味あるものにしてゐるのは、革命や大破壊の場面である。一の國民が一の平和な政治の和氣の裡に長生して繁昌してゐる限り、歴史は何事も語らない。歴史が語り始めるのは、國民が最早や自分自身だけで満足が出来なくなつて、その隣人の事業に干渉したり、又隣人に自分の方の事業に干渉することを許したりするときである。歴史は或る國民が衰頹期に向ふ時にならなければそれを有名なものにしない。吾々の總ての歴史は、それが正に終へて然るべき處で始まつてゐる。吾々は衰頹しつつある國民については甚が正確な歴史をもつてゐる。吾々の缺いてゐるのは、増大しつつある國民のそれである。かゝる國民は、歴史が彼等について吾々に何等語るべきものを持たない程に幸福であり、賢明である。實際吾々は、今日でさへ、最も成切した政府は最も人に取沙されなさいそれだといふことを見てゐる。だから吾々は、たゞ悪いものだけを知つてゐるのだ。善は殆んど口にされることがない。たゞ悪人のみが有名であり、善人は忘却されてゐるか、嘲笑されてゐる。かくの如くして歴史も亦、哲學と同様に永久に人類を誤らしめつつあるのである。

その上、歴史に描かれた事實が、眞實起つたものゝ正確な描寫でないといふことは、如何にしても避け難い。これ等の事實は皆歴史家の頭の中で變形されてゐる。彼の利害でそれが傷つけられ、彼の偏見で色彩られてゐる。誰だつて讀者を、或る事件を眞實それが起つたまゝに見せるや

うな場處に立たせることが出来るか？ 無知か偏頗心かゞ凡ゆるものを變へる。一つの歴史的出來事そのものを變へずとも、それに關係する環境を誇大し或は誇小するときは、如何にその相貌が變つて來るであらう？ 同一の對象を様々な見地から見ると、殆んどそれは同一物とは見えないであらう。とは云へ、觀る人の眼の外には何一つ變つてゐないのである。諸君の私に語るものが一個眞實の事實であつて、而かもそれを實際起つたものとは全然相違したものと、如く思はせるといふことは、十分眞理を尊重する所以であるか？ 樹木の多少、岩が右にあるか左にあるかといふこと、風に吹き上げられた塵埃の雲、かゝることが如何に度々誰も氣のつかぬ間に戰鬥の結果を決定したことであらうか！ さればとて、その爲めに歴史家がその敗北なり勝利なりの原因を、彼が現に其處にゐたかの如く正確に諸君に語ることを妨げるか？ さては又、その理由が未だ分からないのに、たゞ事實としての事實が私にとつて何であらう？ その眞の原因も知らぬのに、私が何等かの出來事から如何なる教訓を引出すことが出来るか？ 成る程歴史家は私に一つの原因を與へる、だが彼はそれを工夫するのである。而して人が大騒ぎする批評といふものは、推量する術に外ならない。多數の虚偽の中で、最も眞理に近いものを撰び出す術に外ならない。諸君はかつてクレオパトラ又はカツサンドル(註六)或は此の種の他の書物を讀んだことがあるか？ 作者は有名な出來事を選び、それから自分の見地にそれを適合させ、自分の工夫に成る細かな説明や、決して實在してゐなかつた人物や、想像的な描寫でそれを飾つて、かくして、つくり話に作り話を重ねて讀者を悦ばせようとする。私は諸君の歴史とかゝる小説の間に大した相違は認めない。たゞ認められるのは、小説家は自分自身の想像力を利用するが、歴史家は他人のそれを寫し取るに苦勞するといふ相違だけである。諸君にして欲するならば私はかう言ひ添へた

い、前者は善かれ悪かれ一の道徳的目的をもつてゐるが歴史家は少しもそれには頓着しないと。

(註六) 共にラ・カルプルネードの小説の名。(ゴーチエド・ラ・カルプルネードは十七世紀のフランスの小説家)

諸君は私にかういふであらう、歴史の史實といふことは風習や性格の眞實程には大問題でない、人間の心さへ眞實に描寫されてゐるならば、出来事が忠實に記録されてゐるか何うかは大した問題ではないと。さうしてかう言ひ加へる、「何故ならば、所詮二千年前に起つた出来事が吾々にとつて何にならうか」と。然り、若しその描寫が實際自然に従つて眞實にうつし出されてゐるならば、諸君の言も尤もである。だが大多数はそのモデルを歴史家の想像の中からのみ得てゐるとせば、結局今迄避けようとしてゐた誤謬に落ちて、教師に對して與へようと欲しなかつた權威を作家に與へることになりはしないか？ 若し私の生徒に空想畫しか見せられないならば、私はそれが他人の手に成るよりも私自身の手に成つたものゝ方が優しだと思ふ。少くともその方が彼にとつてずつと適當してゐるであらう。

青年にとつて最も悪い歴史家は彼に自己の判断を與へる歴史家である。事實！ 事實！ 判断は彼自身にさせればよい。かくして彼は人間を學ぶのである。若し彼が常に作者の意見によつて指導されてゐるとせば、彼は結局他人の眼で物を見ることにならう、さうして此の眼がなくなる

とき、何一つ見えないことにならう。
私は近代の歴史は置いて置く。それは近代の歴史には何等整然とした形状がなく、又吾々の人民が皆互ひに似てゐるのみでなく、吾々の歴史家が専ら眼立たうと眼立たうと腐心してゐて、極度に彩色された肖像畫、即ち往々何物の姿も見えない肖像畫を描かうとだけ考へてゐるからである(註七)。一般に、古代の歴史家は肖像畫をこれ程多く與へはしない。その批判には機智が左ま

で多くなくて常識が多い。だが彼等の間でさへ、大に選擇する餘地がある、諸君は最も賢明なもので始めずに、最も簡單なもので始めなければならぬ。私はポリイブや、サリュエスト(共にロオマの史家)の著書を青年の手には持たせたくない。タシタスは老人向きの書であつて青年にはわからない。諸君は人間の行爲の中に人間の心の深さを測らうとする前に、人間の心の最も簡單な特徴を見ることを學ばなければならぬ。格言を研究し始める前に明白に事實を讀むことが出来なければならぬ。格言の形式をとつた哲學は、經驗のある人だけに分る。青年時代には一般的觀念を取扱つてはならない。青年の教育は總て個々の模範に依らなければならぬ。

(註七) 例へばタヴィラ、ギツチャルディニ、ストラダ、ソリス、マキアヴェリ、時々はド・トウをさへ見よ。ヴェルネ
こそ肖像畫を描かず描寫することを知つてゐる唯一の人物であらう。

私の考へによると、ツキデイスこそ、歴史家の眞の模範である。彼は批判を加へずに事實そのまゝを物語つてゐる。だが彼は、吾々自身にそれを批判させる手蔓となるやうな事情狀況は何一つ省いてゐない。彼は、自分の物語るものを總て讀者の眼の前に並べる。彼は、事實と讀者の間に立ちはだからないで、姿を隠して見せない。吾々は讀むのではなくして、見るやうな氣がする。不幸にして彼は何時も戦争のことだけを語つてゐる。吾々は彼の物語に於いて、殆んど世間の最も非教訓的な部分、即ち戰鬥を見るだけである。一萬人退却記やシーザア戰記は殆んど同様な長所と同様な短所をもつてゐる。肖像畫もかゝらず、格言もなく、而かも流るゝ如く、素朴で、最も面白き最も愉快な細かい物語に満ちてゐるヘロドタスこそ、恐らく最良の歴史家であらう。たゞ惜しいのは此の細かい物語が往々子供らしい愚鈍に墮して、青年の趣味を養成せず却つて損ふことがある點である。吾々は彼の書を讀むために十分識別を用ゐなければならぬ。私は

テイトリイダについては今は何ともいはない。彼の番もそのうちに廻つて来るであらう。だが彼は修辭學者である。彼は政治家である。彼は此の年輩の青年には悉く不適當である。歴史には一般に缺點がある。即ちそれは吾々が人と場所と時によつて決定することの出来るやうな顯著な事實だけを記録するからである。だがかうした事實の緩漫な漸進的な原因は同様に明確に認めることが出来ぬので、何時も知られずにゐる。吾々は往々或る戦争に於いて勝つたにまれ敗けたにまれ、既に此の戦争の起る前に避け難くなつてゐた革命の明白な理由を見出すことがある。戦争は、既に無形の原因によつて決定されてゐる出来事を明白なものにするだけに過ぎない。然るに此の無形の原因は歴史家の眼には滅多にふれることがない。

哲學的精神は、現世紀の幾多の著作家の思想を此の方向に向けた。だが彼等の勞力が果して眞理の爲になつたか何うかは、私は疑はしいと思ふ。彼の學說熱が何人にも一樣に取憑いてゐるので、何人も事物があるが儘に見ようとせず、唯その事物が彼の學說と一致する限り見ようとする。以上の考察に對してかう言ひ加へよう。歴史は人間そのものよりも寧ろ人間の行爲を示すと、何故ならば、歴史は或る選ばれた瞬間に盛裝を凝してゐる人間を描くものだからである。歴史は政治家を描くにしても、彼が見られても可いやうに支度してゐる時だけを描く。彼の家、彼の書齋、彼の家族、彼の交友の間まで彼の跡を辿りほしめない。歴史は彼が國事を議してゐるときだけを見せる、歴史の描くのは、彼自身といふよりは寧ろ彼の衣裳に外ならない。

私は寧ろ個人の傳記をよむことによつて人間の心の研究を始めたいと思ふ。何故ならばその時には人は隠れても無駄である。歴史家は到る處へ彼の跡を辿つてゆく。彼はその人に一瞬間の用捨をも與へない。又見物の爛眼を逃れるための一隅をも許さない。さうして本人が十分隠れ了せ

たと考へてゐるときこそ、歴史家が最も明瞭に彼を示してゐるときである。モンテエニユはかう云つてゐる『傳記を書く人々が、事件よりも思想を喜び、外より来るものより内より出るものを悦ば悦ぶほど、余にはかゝる作家が適切だ。それ故に、有らゆる點に於いてブリユタルクが私の取る人物となるのである』と。(註八)

(註八) 第二卷第十章

集合せる人間、或は國民の天才が個人の性格とは甚しく相違してゐるといふこと、若し吾々が群集に於いても同様に人間の心を吟味しなければそれに對して甚だ不完全な智識をもつことになつたらうといふことは實際である。だが人間を判斷するためには個人々々を研究することから始めなければならぬといふこと、各個人の性向を完全に知つてゐる人は國民といふ團體に於けるその總合的結果を豫見することが出来るといふことも亦、同様に眞實である。

既に述べた理由のため、又以上有りふれた、知れきつた、平凡な、然し眞實な特色ある細々しい描寫が近代の文章から驅逐されて居り、従つて人間は近代の著作家によつてその私生活に於いてもその公生活の舞臺に於いてと同様に化粧を施させてゐるので、吾々は再び古代の著作家に戻らなければならぬ。體裁といふ觀念が生活に於いてと同様文學に於いても嚴重なので、公然と爲すことを許さぬものは、公然と口にすることも許されぬ。吾々はたゞその職務の衣裳を着てゐる人間を示すことが出来るだけで、舞臺に於いても書籍に於いても人間を見はしない。帝王の傳記が幾百回書かれたつて、所詮、シユエトンは決して二度と出はせぬであらう。

(註九) 現代の歴史家史家中たゞ一人だけが主要に於いてはタシトを模倣しながら、僅かな點に於いて敢てシユエトンを模し、時にコミイヌを辱へてゐる。それでさへ彼は其の著作に價値を加へ、吾々の間にそれを批評せしめたのである。

之はテユクロである。その著ルイ十一世の一生は全三巻は一七四五年に出版され、別に二巻の補遺がその翌年出版された。プリユタルクの長所は、吾々が最早や描くことを敢えてしない彼の細かい描寫にある。彼は些細な事で偉人を描くに他の追隨を許さぬ長所をもつてゐる。而して彼はその急所の選擇に甚だ巧みなので、往々一の言葉、一の微笑、一の身振だけで、英雄の性格を示すに十分なことがある。戲謔の言葉をいひながら、ハンニバルは怖氣立つた部下を勵まして、彼等をして笑ひながら、イタリを足下にかける戰鬪に進軍させる。杖の上に馬乗りになつてゐるアヂエシラスは、此の大國王の征服者を愛すべきものに見せる。貧しい村落を通る途中友人と談話しつゝあるシーザアは、不用意の間に、専らボンベエと肩を並べようと思ふだけだと言つた彼の謀叛人の性格を示してゐる。アレキサンドルは藥を飲み下して一言もいはない。これが彼の生涯の最高潮の場面である。アリスチイドは自身で貝殻の上に自分の名をかく、かうして彼の渾名の正當なことを證據立てる。フィロベエメンは軍袍を脱いで、彼の主人の臺所で薪を切る。これこそ、眞の實寫の術である。吾々の風貌は誇大な言語の中には見えぬ。又吾々の性格も偉大な行爲の中には見えぬ。吾々の眞相の露はされるのは些細な事柄の中にある。公然と爲される事物は餘りに平凡であるか餘りに飾られ過ぎてゐる。而かも吾が近代の著作家は吾々に専らこれではなくては語らない程に現代は大層な時代なのである。

ド・テユレンヌ元師は疑ひもなく前世紀の最も偉大な人物の一人であつた。傳記家は、彼の生涯を吾々をして彼を知らしめ愛さしめるやうに些細な出來事によつて興味あるものにした、だが同時に吾々をして更によく彼を知らしめ愛さしめたかも知れないものを如何に多く省略しなければならぬと感じたことであらう。私は十分信憑すべき典據からその中の一つを引かう。これはプリユタルクなら決して省略しなかつたに違ひないものであり、ラムゼイならばたとひ知つてゐたとしても挿入しなかつたに違ひないものである。

或る夏の甚だしく暑い日、ド・テユレンヌ子爵は小さい白胸衣を着、寝帽子を被つて、その應接間の窓の傍に立つてゐた。すると彼の召使の一人が入つて来て、その衣服に欺されて、自己と馴染みな臺所掛りの若者だと考へた。彼は背後から忍び足で近寄つた。さうしていきなり餘り軽くはない手で、彼の臂を擲つた。擲られた人物はすぐ振り向いた。召使はそれが主人なのを見て、彼の顔を見て慄へた。彼は全く度々を失つて膝まづいた。『殿様、私はジョルジュだと思ひましたものですから……』、『うむ、ぢやがジョルジュであつたとしても、こんなに甚く打つことは要らぬぞ。』テユレンヌは臂を撫でながらかう叫んだ。憐むべき著作者よ、諸君はこれを言ふことを敢てし得ないではないか！ さらば、何時までも人間味もない、感情もないまゝであるが可い。汝の鐵の心をその邪惡な體裁感に潰けて、よく鍛へるが可い。自分の高慢からして自身を輕蔑すべきものにするが可い。だが汝、良き若者よ、汝が此の逸話を讀んで、隣間の衝動にさへ示されるその精神の優しさに感動するとき、その生れとその名を重視する一方、此の偉人の細心の點をも讀むことが出來よう。これが、事毎に彼の甥に公然と讓歩して、此の子供こそ王家の主人だといふことを萬人に十分示したかの同じテユレンヌだといふことを考へてみよ。此の對照を比較せよ、自然を愛せ、輿論をいやしめ、而してあるが儘の彼の人物を知れ。

世には、入念に指導されたかゝる讀書が青年の無垢な精神に及ぼし得る効果を自覺することの出來る人々は少ない。子供時代からして書物の重荷を負はされ、何等考へることもなしに讀書する習慣をつけられてゐるので、何にまれ吾々の讀むものは、吾々を感動させることが少ない。そ

れは吾々が既にかゝる人間の歴史や傳記などを滿してゐる感情や偏見を自分自身の中にもつてゐる爲めだ。彼等のすることは吾々には總て自然に見える。それは吾々自身が自然に背いて居り、自分自身によつて他人を判断してゐるからである。だが私の主義によつて教育された青年を思ひ浮べてみよ。十八年の間専ら正しい判断と健全な心を保持することを唯一の目的として熱心に保護されて来た吾がエミールを想像してみよ。彼がいよいよ幕が上つて始めて世界の舞臺に眼を投げるとき、或は寧ろ舞臺の背後にあつて、役者達が衣裳を着たり脱いだり、見せかけの幻影で見物の眼を欺く綱や滑車を敷へたりしてゐるのを見るときを想像してみよ。間もなく彼の最初の驚愕は人間に對する慚愧と輕蔑の感情に代るであらう。彼は、かくの如く全人類が吾と自らを欺いて、かゝる兒戯の類に墮落してゐるのを見て憤怒を覚えるであらう。彼は、自己の同胞達が單なる夢のために互ひに引裂きあひ、人間であることが出來ずに猛獸に變るのを見ては悲哀を感じるであらう。

正しく此の生徒の如き自然な性向にとつては、教師が彼の讀書に少しでも思慮と選擇を加へるなら、彼を少しでもその讀書の題材に對する反省の路に導くなら、此の試みは彼にとつて一科の實踐哲學として役立つことであらう。今日吾々の學校に於てたゞ青年の精神を混亂させつつある空虚な理屈よりも遙かに確實な、更によく理解さるべき實踐哲學として役立つに違ひない。ピリュスのロマンチックな大計畫を聞いた後で、シネアスは、かくの如き今後大きな苦惱なしには楽しむことの出來ない世界征服によつて如何なる眞實の利益が得られるか、と彼に尋ねる。吾々はこれを聞いて、氣の利いた言葉だといふ一時的な興味を感じる。だがエミールはそれを甚だ賢明な思想だと考へるであらう。これは既に彼の心にも浮んでゐたものであり、彼が決してそれを

忘れ得ないものであらう。何故ならば彼の心には此の思想の印象をかき消すことの出來る反對の偏見が一つもないからである。此の狂人の傳記を更に讀んで行つて、彼の有らゆる大計畫が結局一婦人の手による彼の死に終つたといふことを見出すとき、吾がエミールは、此の似而非の英雄精神を讚美することは愚か、かゝる偉大な將軍の有らゆる勳功、かゝる偉大な政治家の有らゆる策略をば、此の人の生涯とその計畫を不名譽な死によつて終局せしめる運命にあつたかの不幸な瓦片(ピリュスはギリシヤに侵入してアテネ市に馬を進めたとき、或る婦人が屋根から投げた瓦に當つて死んだとプリユタルクの『ピリュス傳』にある)に向つて進む歩みより外の何物をも認めないであらう。

有らゆる征服者が皆殺されたのではない。有らゆる篡奪者が皆その計畫に失敗したのではない。飽くまで俗衆の偏見を抱いた心にはかゝる人々の多數が幸福に見えるであらう。だが物の表面のみに眼を止めずに、人間の心の状態によつて幸福を判断する人は、彼等の成功そのものにさへ不幸を認めるであらう。彼は彼等の幸運と、もに彼等の欲望と心勞とが増して來るのを見るであらう。彼は彼等が息を途切らして進みながら、而かも決してその目的に達しないのを見るであらう。彼は彼等を、初めてアルプス山に登つた未經験な旅行者が、一山毎にもう終りだと考へつゝ、而かもその頂に來ると更に高い山が眼の前に見えるので落膽するのに似てゐると思ふであらう。

オーギュスト帝は、同國人を服従させ、政敵を滅亡させた後、四十年間、かつて存在した最大の帝國を統治した。だが此の強大な權力も、ヴァリユスに向つて彼の屠殺された軍隊を返せと責めながら、頭で壁を打ち、叫喚の聲でその廣い宮殿を滿すことを止めることが出來なかつたではないか(將軍ヴァリユスがドイツ民族と戦つて敗れて、敵軍國の兵を皆殺にされたときのこと)。彼があらゆる政敵に

打ち勝つたとはいへ、有らゆる種類の災厄が斷えず彼の周圍に生れたとき、彼の生命がこの最愛の友人によつて危くされたとき、而して彼が自分の有らゆる親近者の恥辱や死を悲まなければならなかつたときに、彼の空しい勝利が彼に何の役に立つたか？ 此の不幸なる人物は世界を治めようと欲して、而かも自分の家を治めることが出来なかつたのだ！ 此の疎漏の結果は何うであつたか？ 彼は甥、養子、婿が青春の花盛りに死ぬのを見た。彼の孫はその不幸の生命を數時間延すために彼の寢床の綿を食はなければならなかつた。彼の娘と孫娘は、彼に散々不名誉な目を見せた揚句、一人は荒れ果てた島で饑餓と缺乏のため、他の一人は獄舎で刑吏の手によつて死んだ。最後に彼の一家の最後の生存者たる彼自身は、自分の妻によつて、一の怪物を後繼者として認めなければならぬやうにさせられた。これが、あの名譽と幸福の爲めにあれ程有名な世界の帝王の運命であつたのだ。彼の名譽や幸福を讚美する人々の何人にまれ、同様な代價を拂つてそれを得ようと欲するものがあるか？ 信じられようか？

私は例として野心のことを取つた。だが有らゆる人間の欲望の演ずるはたらきは、先人に鑑みて自己を識り自己を賢明ならしめるために歴史を研究しようと欲する人にとつては同様な教訓を與へる。オーギュストの傳記よりもアントニイの方が青年に對して更に適切な教訓を與へるやうな時期が近づきつゝある。エミールは、此の新研究の間、珍らしい見馴れない見世物に難つてゐるので、自分で自分のことを殆んど気がつかないであらう。だが彼は豫め欲望が生じない先にその幻影を避ける術を知つてゐるに違ひない。而して有らゆる時代に於いて欲望が人間を盲目にしたのを見て、彼は、他日自分がそれのとりこになつた際には自分がどんな盲目にされるかといふことについて豫め警告されてゐるであらう。かゝる教訓は彼にとつて甚だ不適當なものである

ことを私は知つてゐる。恐らく必要な場合にはそれは時期を失して、且つ不十分であらう。だがこれ等の教訓が、私が此の研究から引き出さうと欲したものでないといふことを考へて貰ひたい。第一に、私は全然別な目的を目指してゐたのだ。而して此の目的が十分満足されないなら、それは確に教師たる人の責任に歸するであらう。

先づ考へなければならぬのは、利己心が發達するやいなや、他に對する我といふものが絶えず働らきはじめるといふこと、青年は自己を反省せず自他を比較せずには他人を觀察しないといふことである。それ故に、彼がその同胞を吟味した後如何なる位置に自分を置くかといふことを知るのが問題である。私は、諸君が青年に歴史を讀ませる讀ませ方によつて、諸君が彼等をいはゞ彼等の見る有らゆる人物に變化させるといふこと、諸君が彼等を或はシゼロ、或はトラジャン、或はアレキサンドルたらしめようと努めるといふこと、彼等が自分自身を反省するときに落膽させ、これ等各人に對して自分は單に自分自身に過ぎないといふ嘆息を與へるやうにするのを見る。此の方法にも或る利益はある。それは私も否まない。だが吾がエミールに關する限りでは、若したゞ一度にせよ、かゝる比較の際に、彼が自分自身ならぬ他の人物となりたいと欲するやうなことがあるば、たとへその人物がソクラテスにまれ、カトンにまれ、私は全然失敗したものといはなければならぬ。自分自身を他人と見做し始める人は、やがて自分を全然忘れてしまふであらう。

人間について最もよく知つてゐるものは、哲學者たちではない。彼等はたゞ哲學といふ先入見を通じて人間を見るに過ぎない。而して私は哲學者程かゝる先入見を多くもつてゐるものを知らない。野蠻人は哲學者よりは遙かに健全に吾々を判斷する。哲學者はその惡徳を知つてゐる、吾

吾のそれに憤慨してゐる。さうしてから獨言する、「吾々は皆悪人だ」と。野蠻人は少しも感動せず、吾々を眺めて、かう云ふ、「お前達は皆狂人だ」と。彼の言が正しい、何故なれば何人にまれ悪のために悪をする人はないからである。私の生徒はこの野蠻人だ。が彼と野蠻人との間にはかゝるいふ區別がある。即ちエミイルはより多く思案し、より多く觀念を比較し、より手近で吾々の誤謬を見たので、自分自身により多く用心し、たゞ自分の知つてゐるものだけを判断するといふことである。

他人の感情慾に對して吾々を焦立たせるものは吾々自身の感情慾である。吾々に悪人を憎ませるものは吾々の利己心である。若し彼等が吾々に何の害も與へなかつたならば、吾々は彼等に對して憎悪よりも憐愍を感じたことであらう。此等の悪人が吾々に與へる害は、吾々をして彼等が自分自身に對して與へる害を忘れさせる。若し吾々にして彼等自身の心が如何に自分自身の害悪を罰するかといふことを認めることが出来たなら、吾々は更に容易に彼等の悪徳を赦したであらう。吾々はその罪を意識してゐる。而かもその罰を見ない。利益は表面に見えてゐる。罰は内に隠れてゐる。自分が悪徳の結果を享樂してゐるのだと考へてゐる人は、その成功しなかつた時と同様に懊惱してゐるのだ。對象こそ違へ、その心配は同様である。彼がその幸福を表面に示してその内心を隠しても無駄である、彼等の舉動は吾にもなくそれを現はしてしまふ。だがそれを見るためには、吾々自身の心がそれに似たものであつてはならない。

吾々が共にもつてゐる情慾は吾々を誘惑するものだ。吾々の利益を脅す情慾は、吾々に嫌悪を起させる。而してかゝる情慾から生ずる撞着から、吾々は他人に對して吾々自身が喜んで模倣したに違ひないものを責める。吾々が自分がその位置に立つときは自分自身でしたに違ひない悪を

他人の側から蒙らされるときには、嫌悪と迷妄とが避け難いものとなる。

然らば、人間を正確に觀察するためには何が必要であるか？ 彼等を知らうといふ大なる興味、彼等を判断する大なる公平、有らゆる人間の情慾を理解し得る程敏捷な、而かもかゝる情慾に累されない程平靜な心、それである。人の一生に此の研究に好都合な時期が一寸でもあるとせば、それは私がエミイルの爲めに選んだ此の時期である。此れより早ければ、人間は彼にとつては未知人であつたであらう。これより遅くは、彼が人間の仲間となつてゐたであらう。彼が既にその作用を見てゐる俗界の偏見は、未だ彼をその奴隷とはしてゐない。彼がその結果を知つてゐる慾望は、まだ彼の心を刺戟してゐない。彼は人間である。彼は自分の同胞に興味を感じてゐる。彼は公平である。彼はその同輩を判断する。さて、若し彼が彼等を正確に判断するならば、彼等の中の何人とも位置を變へようと欲しないといふことは確かである。何故ならば彼等自身の嘗める有らゆる煩惱の目的は、彼のもたない偏見に基づいてゐるので、彼にとつては單なる假空の目的に過ぎないやうに見える。彼自身としては、彼の欲するものは總て手に入れることが出来る。彼が自身に満足して有らゆる偏見を離脱してゐるとき、如何にか何人かに頼るといふことがあらうか。彼には腕がある。健康がある(註一〇)。節制がある。要求が少ない。而かもその必要を満足せしめるものがある。完全な自由の裡に生長してゐるので、物に累され人に従ふことが彼の知つてゐる最大の悪である。彼はかの不幸な帝王、彼等に服従する總ての人々の奴隷たる帝王を憐む。彼はその空虚な名譽に束縛された似而非賢人を憐む。彼はかの富裕な愚物、自己の奢侈の犠牲となる人間を憐む。彼は、如何にも享樂してゐると見せるために自己の全生涯を倦怠の中に過すかの虚飾家の放蕩漢を憐む。彼は彼自身に害を與へる敵をさへ憐むであらう。何故ならば、

その奸悪の裡にも、彼は敵の不幸を見るであらうからである。かう彼は獨言するであらう、「此の男は私に害を興へるといふ慾求に負けたのだから、自分の運命を私のそれに頼らせたのではないか」と。

(註一〇) 私は健康と良き體格とを彼の教育によつて獲得した利益、或は寧ろ彼の教育によりて保存された自然の賜物のうちに大膽に教へようと思ふ。

今一步進めば吾々は目的に達する。利己心といふものは有益な道具ではあるが、危険を伴ふ。往々これはそれを使ふ手を傷ける。又惡の混じらない善を生ずることも減多にない。エミールが人類の間に於ける自分の地位を考へて、自分が飽くまで幸運な位置に置かれてゐるのを見るとき、彼は諸君の爲したものを自分自身の理性の所爲にし、自分の幸運の結果を自分自身の價値に歸したいと誘惑されんとする。彼はかう獨語するとする、「私は賢くて、人間は馬鹿だ。」彼は人間を憐むと同時に輕蔑するとする。自分を祝福しながらそれだけ自分を買被つてしまふとする。而も自分が彼等より幸福だと知つてゐるので、彼は自分の方が彼等よりも幸福になるだけの價値があるのだと考へるであらう。これこそ最も恐るべき誤謬である。何故ならば此の誤謬は最も根絶し難いからである。若し彼が此の状態の儘でゐたならば、吾々の有らゆる苦心によつて彼は殆んど益するところがなかつたと言つて可い。若しどちらかを選ばなければならぬとならば、私は、倨傲の妄想よりは寧ろ偏見のそれの方を取つた方が損であるかあるどうか分らないと思ふ。

偉人は自己の優越といふことに關して自ら誤りはしない。彼等はそれを見、それを知つてゐる。而かもそれにも抱らず依然謙遜である。彼等は自分のものが多ければ多い程、自分に缺けてゐるものゝ多いことを知つてゐる。彼等は自己が吾々に優越してゐるのを誇負するよりも自己の

弱さを意識して卑下する。彼等は自己の眞實所有してゐる様々な長所があるにも係らず、自分自身で得たのではない賜物を誇負するに餘りに賢明である。善人はその徳を誇つても可いかも知れない。何故なら徳そのものは彼自身のものだからである、だが智者は何等か誇負すべきものがあるか。ブラドンとならぬためにラシイヌは何をしたか？ コータンとならぬ爲めにポアローは何をしたか？

吾々の場合は、全然違ふ。吾々は何時にも標準を離れないことにしよう。私は自分の生徒が人に優つた天才があるとも、理解力が十分でないとも假定しなかつた。私は教育が人間に如何程の事を爲し得るかといふことを示すために尋常の才能ある人々の中から彼を選んだ。例外は一切規則には入らない。それ故に私の苦心の結果として、エミールが自分自身の生活の仕方、物の見方、感じ方を他の人間のそれよりも好むとせば、エミールは正當である、だが彼が、他の人間よりも自分が才能逞ましく且つ身分よく生れた結果さうするのだと考へるなら、エミールは間違つてゐる。彼は自分を欺いてゐる。吾々は彼の誤解をとかなければならない。寧ろ吾々は此の誤謬を禁じて、それを根絶するには遅過ぎるといふやうなことがないやうにしたい。

人間が狂氣でない限り、虚榮の外には如何なる愚行も治癒され得ないものはない。虚榮に對しては、若し何物かそれを治癒することが出来ることとせば、經驗の外には適薬がない。少くともその初めて發生するときには、吾々はその生長を禁ずることが出来る。だがさればとて青春期の若者に對して彼も亦他の人々と同じ人間であり、同じ弱點を免れないといふことを證明してみせようとして、空虚な議論に力を費してはならない。彼をしてそれを感じさせよ、さもないと彼は決してそれを知らぬであらう。此處に私の本來の規則に對する例外の場合が今一つある。それは私の

生活に吾々よりもより賢くはないといふことを證明することの出来るやうな總ての出来事に彼を故意に向けてやる場合である。例の手品師に對する冒険が再三四様々な方法で繰返されるやうにする。私は彼の機嫌を取る連中に勝手に彼を利用して置かう。若し軽躁な仲間が彼を或る冒険に連れ込んだとせば、私は彼がその危険を犯すまゝに放つて置かう。若し彼がカルタ遊びが上手の手に落ちたとせば、私は彼を彼等が何物にするまゝに任せて置かう(註一)。私は彼等が彼の機嫌を取つたり、彼に金を使はせたり、盗んだりするがまゝに放つて置かう。そして彼等が彼の持ち物を皆吸ひ乾してしまつて、最後に彼に背中を向けて彼を嘲弄するときには、私は彼の面前で、彼等が彼に親切にも十分與へてくれたこれ等の教訓に對して感謝さへしよう。たゞ私が注意して彼から遠去けようとかゝる唯一の係蹄は、淫賣婦達のそれである。私が彼に對してとるべき唯一の用心は、自分が彼に犯させる有らゆる危険、及び彼に受けさせる有らゆる侮辱をすべて彼と共にするといふことであらう。私は萬事を無言で堪へることにする。愚痴もいはず、咎めもせず、彼に一言も語らずに堪へることにする。此の賢明な舉措が續けられるならば、何事にまれ、私が苦しむのを見る毎に、彼自身が苦しむよりも遙かに多くの印象を彼に與へるであらうといふことは確かである。

(註一) その上、吾が生徒は此の係蹄には殆んど誘惑されぬであらう。彼は身の周圍に幾多の遊戯をもつて居り、生れてから倦怠を感じることがなく、又金の使用を殆んど知らない。子供等を指導する二つの動機が利己と虚榮であるので、此の二つは、將來淫賣婦や悪漢連が彼等を手の中に入れて役立つやうになる。諸君が懸賞により、賞與によつて彼等の貪慾心が刺戟されるのを見るとき、又彼等が十歳で學校の公開試演で喝采されるのを見るとき、諸君は同時に如何にして彼等が二十歳になるとその財布を賭博窟にすて、その健康を更に悪い場所にするに至るかといふことを見ているのである。諸君は、級中第一の鋭敏な少年が他日最大の賭博者乃至放蕩漢になるといふことを安心して賭けても可い程

である。さて子供時代に經驗されなかつた手段は、青年時代に同じ効果を生じない。だが、此の場合私の不斷の格言は、事を最悪の場合に置いてみよといふことであることは銘記すべきである。私は先づ害悪を禁ずることを求める、次に私はそれを矯正せんがためにその存在を假定するのである。

此の點に於いて、私は、愚かしくも賢者振りながら、その生徒達を見下げて、彼等を何時も子供として扱ひ、彼等に爲さしめる事毎に自分達と彼等とを區別しようとする世の教師達の似而非威嚴に注意を拂はない譯には行かない。かくの如くして青年の勇氣を沮喪させるのは以ての外で、彼等の精神を高揚させる爲めになら如何なる努力も惜んではならない。彼等を諸君と同等な者たらしめるためには、彼等を既にそれであるやうに取扱ふがよい。若し彼等がまた諸君と同等の水準に上ることが出来なかつたならば、何等恥づるところなく、遠慮するところもなく、諸君が彼等の高さに降るがよい。諸君の名譽は諸君自身にあるのではなく、もはや諸君の生徒にあるといふことを考へよ。彼の過失を矯正したいならば、自らそれに與かれ、彼の恥を掻き消したいならば、その恥を諸君自ら負へ。自分の部下の兵が逃亡して到底止めることが出来ぬのを見て、却つて自分の兵の先頭に立つて逃げながら、「彼等は逃げるのではない、大將の爲す所を學んでゐるのだ」と叫んだといふ勇敢なロマ人の例に従へ。これは彼の名譽を汚したであらうか？ 大違ひである。かく自分の光榮を犠牲にすることによつて、彼は却つてそれを増したのだ。義務の力、徳の美は、吾々の意志の如何に構はず吾々に賛成させ、吾々の愚劣な偏見を覆してしまふ。若し私がエミールに對する義務を實行してゐるときに人に打擲されたとせば、その打擲を仕返すどころか、私は却つてそれを誇るであらう。私は、その爲めに私を前より尊敬しなくなるといふ程邪悪な人間が世界に一人でもゐるか何うか疑はしいと思ふ。(註二)

(註二) さう思つたのは私の誤りだつた。私はさういふ人を一人發見した。それはフォルメイ氏だ。

とはいへ、私は、生徒に教師を自分と同様に無知であると想像させ、自分自身と同様に誘惑に陥り易いと想像させたことはない。かゝる觀念は、まだ何物を見ることも、何物を比較することも知らずに、總ての物が自分のまゝになると考へてゐる子供、自分と同じ水準に降ることを知つてゐる人々をのみ信用する子供にとつては好い。だがエミール位の年輩と思慮をもつた青年は、最早やかゝる誤謬を出來す程愚かではない。又實際さうした誤謬を出來すといふことは望ましいことではない。彼が自己の教師に對してもつべき信頼は、それとは別種のものである。それは理性の權威に、より優越な知識に、又青年にでもわかるやうな、且つ彼にその效用の分かるやうな利益に基づいたものでなければならぬ。長い經驗から彼は、自分が自分の教師から愛されてゐるといふこと、此の教師は賢い、道理に通じた人物で、彼の幸福を冀ひ、且つ彼の爲めにそれを得る術を知つてゐるといふことを確信した。彼は、この人の忠告を聞き入れるのは皆自分の利益のためだといふことを知つてゐるに相違ない。だが若し教師が弟子と同じく欺かれる儘になつてゐたなら、彼は弟子から尊敬を得る權利も、彼に教訓を與へる權利も失つてしまつたであらう。況んや生徒の方で、先生が自分を故意に係蹄に陥入らせ、彼の無經驗に對して陥罪を設けてゐるのだと想像する如きことは尙ほ更あつてはならない。然らば此の二つの困難を吾々は如何にして避けることが出来るか？ 最も良き、最も自然な手段を取るが可い。即ち彼自身と同じく直截に眞實にすること、彼の向つてゐる危険を彼に警告すること、彼にそれを明白に、分かるやうに示すことである。だがそれも誇張せず、怒氣を見せず、術學者的のお題目を並べずに、就中諸君の忠告を命令的な形式で與へぬやうにしなければならぬ、この危険が如何なるものになつたかを

見た上、かゝる命令的な語調が絶対に必要になるまでは、それを與へてはならぬ。若し彼にしてそれでも尙ほ強情を張るならば、かういふ場合は好くあるが、その時には彼には口では何事もいはぬがよい。彼を勝手に振舞はせよ、たゞ彼に従つて行け、彼を模倣せよ。しかも面白げに、腹藏なく模倣せよ。若し出来るならば、我を忘れてせよ。彼と同様に樂しめ。若しその結果が餘り重大になつて來るときは、諸君は何時でもそれを止めることが出来る。とはいへ、諸君の先見と諸君の親切を見た此の青年は同時に前者によつて深い印象をうけ後者によつて多大な感動を與へられはせぬであらうか？ 彼の有らゆる過失は、畢竟、必要のときには諸君に彼を引止めさせるために彼自身が諸君に渡してゐる手綱に外ならない。さて、此の場合、教師の最大の技能なるものは、如何なる時青年が従ふか、如何なる時強情を張るかといふことの豫め知られるやうに機會を調整し且つ忠告を指導すること、かくて青年に大なる危険を犯させることなしに、彼の周圍を経験の教訓で取巻くことにある。

彼が過失を犯さぬ前に、彼にその過失を警告せよ。彼が過失を犯した時には、彼を咎めてはならぬ。そんなことをすればたゞ彼の利己心を燃え立たせ煽動するだけに終るであらう。吾々は、吾々の嫌惡する教訓からは何の得る所もない。私は君によくさう話していただぢやないか、といふ言葉程馬鹿げた言葉を私は他に知らない。諸君が彼に語つたものを彼に想ひ出させる最良の手段は、全然これを忘却してしまつた風をすることである。その反對に、彼が諸君の言を信じなかつたのを恥ぢてゐるのを見る時には、親切な言葉で此の恥辱を優しく拭ひ取つてやるが可い。諸君が如何に彼のために自分を忘れてゐるか、如何に彼を叱る代りに彼を慰藉するかといふことを見る時、彼は必ず諸君に對して愛著するに至るであらう。だが若し諸君が彼を叱責して彼の苦

痛を増すならば、彼は諸君を憎悪するであらう。而していはゞ諸君の忠告の價値を彼は諸君と同様に考へてはゐないといふことを證明するかのやうに、諸君の言葉を傾聴しないことを一の常規にするに至るであらう。

諸君の慰藉の言葉は更に彼にとつてそれ自身一の教訓となり得よう。彼がそれを疑はぬだけそれだけ有益な教訓となる。例へば、他の幾多の人間が矢張り同じ過失を犯してゐるのだと彼に語るるとき、正しくこれは彼の豫期してゐなかつたものである。諸君は彼に同情する如く見せつゝ彼を矯正することになる。何故ならば、自分が他の人間よりも遙かに偉いと考へてゐる人に對しては、その他の人間の例によつて慰められることは極めて侮辱的な口實であるからだ。それは、彼の主張し得る最大限は、他人も彼と同様であるといふことだと考へるに等しいから。

過失の時期は、寓話を聞かすべき時期である。罪ある人を責めるに物語の假面の下ですれば、吾々は彼に立腹させることなしに教訓することになる。彼はその時、自分の身に引較べて見ると眞理があるので、此の物語は虚辭ではないといふことを理解する。未だ讀辭で欺まされたことのない子供は、私が本書の第二篇で吟味した鴉と狐の物語を少しも理解しない。だが近頃阿諛者の玩具になつたことのある輕躁な青年は、鴉が如何にも馬鹿であつたといふことを極めて容易に理解する。かくて、一の事實から彼は格言を得る、さうしてさもないと直に忘れられたに違ひない。經驗は、此の物語のお蔭で、彼の心に刻み込まれる。世には、他人の經驗によつて、或は自分自身の經驗によつて得ることが出来ない道徳的知識といふものはない。その經驗が危險なものである場合には、彼自身にそれをさせる代りに、吾々は歴史から教訓を抜き出す。危險が比較的小さい場合には、青年をそれに曝しておく方が宜しい。かくして、此の物語によつて、青年は自分の

知つてゐる個々の場合を格言に變へるのである。

とはいへ、私はこれ等の格言が説明されたり、たゞ記されたりすることすら必要だとは思はない。大抵の寓話の終りに附いてゐる訓言程空虚な、誤解されやすいものはない。いはゞかゝる教訓が、讀者がそれを認め損ふことのない程明瞭に此の寓話そのものゝ中には見えなかつたか、或は見えてはならぬとでもいふ如くではないか！ 何故かゝる訓言を終りに言ひ添へて、讀者が自分でそれを發見するといふ愉快を奪ひとるのであるか？ 教育の術は、生徒をして悦んで學ばせることにある。さて、彼が學ぶことを悦ぶならば、彼の精神は、諸君が彼に語る總てのものに就いて、たゞ諸君の言を聞く外に何等爲すべきことがないやうな受動的な状態に止まつてゐてはならない。教師の自尊心は何時も生徒のそれに譲らなければならぬ。生徒はいつもかう云ふことが出来なくてはならない。「私は認める、私は理解する、私は行動する、私は自己を教育する」と。イタリ喜劇のパンタロンを甚だ困らせるものゝ一つは、彼が聴衆の知り過ぎる程知つてゐる平凡至極なものを説明するときに見せるその苦心である。私は教師がパンタロンたることを欲しない。況んや著作者がパンタロンとなることは尙ほ更である。吾々は意のあるところを明白に理解させなければならぬ。だが吾々は何時も總てを口で述べる必要はない、有りつたけのことを口にする人は、少しだけより話さないことになる。何故ならば結局誰も彼の言葉を聞くまいからである。ラ・フォンテエヌが、彼の腹を膨らした蛙の話の終りに書き加へてゐる四行の詩句は何を意味してゐるか？ 彼は、吾々にそれが分かるまいかと心配したのであるか？ 此の偉大な畫家は、自分の畫いた物の下にその名を書き添へる必要があるのか？ 彼の訓言は、それによつて一般化されるどころか、與へられた實例の若干の範圍にだけその教訓を制限して、吾々がそれを

他の場合に適用することを妨げる。此の比類ない著者の物語を青年の手に持たせるに先き立つて、私は著者が前に述べたことを明白に又愉快に説明しようと思ふ。若し諸君の生徒が此の説明がなくては其の物語が分からないなら、彼はそれがあつても分からないであらう。

その上、此の物語には更に教訓的な、又青春期の青年の感情と知識の進歩とに更に合致した順序を與へる必要があらう。必要と場合とに顧慮せず、たゞ機械的に書物の数字的順序のみ従つて行くこと程馬鹿氣たことを想像することが出来ようか？ 第一に鴉、次に蟬（註一三）次に蛙、次に二匹の驢馬等々。私は此の二匹の驢馬の話はよくおぼえてゐる、何故ならば私は理財家になるやうに教育されてゐた或る子供を見たことを思ひ出すからである。彼は、常に彼が將來就くべき職業のことばかりきかされ、此の物語を讀まされ、それを學ばせられ、それを言はされ、幾百回となくそれを暗誦させられた。而かも此の物語の中に彼の將來つくべき職業に對する反對の理由を少しも見出さなかつた。私はたゞの一度も、子供等が自分の學んだ物語を眞に利用したのを見たことがないのみならず、彼等にそれを眞に利用をさせるやうに注意した人を一人も見ることがない。この研究は道徳的教訓に資するためだと言はれてゐる。だが世の母親なり子供なりの眞實の目的は、子供が此の物語を朗讀してゐる間一坐の注意を彼に集めて置くことにあるのだ。彼が生長してその朗讀が必要でなくなり、それを利用することが必要となるときには、こんな物語が皆忘れられてゐるのだ。私は繰返していふが、たゞ大人のみがかうした物語から學ぶことが出来る。それで今やエミールもそれを始むべき時期に臨んでゐるのだ。

（註一三）鴉、蟬、フオルメイ氏の訂正を適用しなければならぬ、それは先づ蟬、次に鴉等々……だ。

私は諸君に總ての事柄を話す積りではないから、正しい道から逸れてゐる路を遠方から示すに止める。それによつて諸君は如何にしてそれを避くべきかといふことが解るであらう。若し諸君が私の記號を附けた道を進むならば、諸君の生徒は最も安價に、人類に關する知識と彼自身に關する知識とを買ふことが出来るであらう。又彼をして、運命の寵兒を羨ましがらずに、運命の惡戯を認めることを得せしめ、自分を他人よりも賢いなどと思はずに、自分に満足することを得しめるであらう。諸君は彼に見物人の一人にする爲めに先づ彼を役者にした。諸君はその仕事を繼續しなければならぬ、蓋し觀覽席から見れば、物事がその表面の見かけ通りに見え、舞臺から見れば人間がその眞實のある儘に見えるからである。一般的效果を得る爲めには、吾々は遠方から眺めなければならず、細部を見る爲めには近寄つて觀察しなければならぬ。然し如何にして青年が、世間の仕事に携はることが出来ようか？ 彼は此の暗い神祕を教へられるべき如何なる權利があるか？ 彼の興味は彼の快樂の範圍内に限られてゐる。彼は他人に對して何の權利をも有してゐない。つまり何事を處置する權力をも有してゐないと同じである。人間は市場に於ける最も粗惡な商品なのだ。吾々の凡ゆる重要な所有權の中で、個人の權利は常に最も輕んぜられてゐる。私は最大活動期の青年の研究が、純粹の思索的問題に限られてゐるのを見、雖も何等の經驗もなく人事の世界に突如として投げ込まれるのを見ると、それが同時に自然にも理性にも反するものであることに氣がつく。だから私は、自分の身を何うしたらよいかを知つて居る人々が世に甚だ妙いといふことを最早や驚かない。非常に多くの有益な事柄が吾々に教へられてゐるのに、處世の術が等閑視されてゐるのは、如何にも不思議なことではないか？ 彼等は吾々を社會に向くやう教養すると公言してゐる。而かも吾々を、いはゞ淋しい僧庵に孤獨な思索の生活でも送る

に至るかのやうに、或は吾々の無關係な人々と空想的な議論でも闘はすに至るかのやうに、教育するのである。諸君は、諸君の生徒に如何にして生くべきかといふことを教へてゐると思つてゐる。而かも諸君の教へてゐるのは或る肉體的の歪みと或る意味の無い言葉の形式だけに過ぎない。私も亦私のエミイルに對して、如何にして生くべきかといふことを教へた。蓋し私は彼に、自分自身を相手に樂むこと、その上、自分自身の麵麩を得ることを教へて來たからである。然しこれだけでは十分でない。世間に生活して行く爲めには、何うして他人と交渉して行くかといふことを知らなければならぬ。彼は世人を動かしてゐる力を知らなければならぬ。彼は公衆社會に對する個人的利益の作用と反作用とを考量しなければならぬ。而してその結果をあくまで正確に先見して、減多にその事業に失敗しないやうに、若くは少くとも出來得る限りの最良な方法を試みて成功するやうにしなければならぬ。國法は青年に自分自身が勝手に振舞ふことを許さない。又自身の財産を處分することを許さない。然しながら、青年が法定年齢に達するまでに何等の經驗をも持つてゐなかつたならば、以上の如き用心も何の役に立つであらうか？ 青年は或る時期まで待つたといふ理由で何等得る點がなかつたであらう。そして二十五歳になつても十五歳の時より經驗に富むといふことがなかつたであらう。勿論吾々は、青年が無知のために盲目にされて、或は感情の爲めに誤まれてその身に害をうけないやうに、用心しなければならぬ。然しながら如何なる年齢でも親切な行爲をする機會はある。如何なる年齢のときでも、賢明な人の指導の下に、保護を必要とする不幸を保護する機會はあるのである。

母親や乳母は、子供等に與へる注意からしてその子供等が好きになるのである。公德の實行は、人類・愛といふものを心の底までもち來たす。善行をするとき吾々は善人になる。私は善人

になる目的の爲めにこれ以上に確實な方法を知らない。諸君の生徒をして、懸命にその力の及ぶ範圍の善行を行はせよ。貧者の利益を自己の利益とするやうにさせよ。單に金錢を以つて彼等を助けるのみならず又勤勞を以つて彼等を助けるやうにさせよ。生徒をして貧しき人々の爲めに奉仕し、彼等を保護し、身體と時間を彼等に捧げるやうにさせよ。生徒をして貧者の代理たしらめよ。彼の全生涯にこれ以上名譽ある職分は決してないであらう。徳の實行が與へる不屈の勇氣と決斷とを以つて彼が貧者の爲めに正義を主張するとき、如何に多數の訴ふるに由なき虐げられた人々が、正義を得ることであらうか。即ち生徒が權門や金持の面前に進み出るとき、乃至必要な場合には帝王の玉座の前に立つて、貧困である爲めに凡ゆる門戸が鎖ざされてゐる不幸なる人々、自分等の不運の爲めに罰せられることを非常に怖れて不平を言ふことさへ敢てし得ない不幸なる人々の正當の主張を辯護するときは、如何に多くの虐げられた人々が正義を得ることであらうか？

然し吾々はエミイルを武者修業者、俠客、冒險騎士たらしむべきであらうか？ エミイルは公務に身を投じて、奉行、帝王の所にあつて賢者の役をつとめ、法律の擁護者の役をつとむべきであらうか？ 彼は裁判官の所において訴師となり、法廷に立つて辯護士となるべきであらうか？ それは私には全く解らない。事物の本性は、嘲笑や皮肉の名前のために變化しはしない。彼は、自分が有益なり善なりと認めたま事は總て行ふであらう。彼はそれ以外の事は何事もしないであらう。同時に彼の年頃に相應はしくない事は、總て彼にとつて有益でも善事でもないといふことを知つて居る。彼は彼の第一の義務は自分自身に對するものであることを知つてゐる。青年は自分自身に用心しなければならぬことを知つてゐる。青年は慎重に行動しなければならぬ

こと、自分より年長の人々に敬意を表すること、目的の無い談話は控へ目に用心深くすること、無關係の事柄には謙遜なること、然し善行は勇氣を以つて行ひ、眞理を語るには大膽なるべきことを知つて居る。これが、彼の著名なるロオマ人達の行爲であつた。公共生活に入ることを許される前に、正義に奉仕し且つ善良なる行爲を保護することによつて自己を教養するといふ以外には何の動機もなしに、罪人をば正しく裁判し無辜の民をば保護した彼のロオマ人達の行動であつた。

エミイルは人間の間でばかりではなく、動物の間に於いても、騒動や喧嘩を好まない(註一四)。彼は決して二匹の犬に嗾かけて喧嘩をさせたことなどない。犬を嗾かけて猫を追はせたこともない。此の平和の精神は彼の教育の結果の一つであつて、この精神は決して利己心を喚起せず、又自惚の心を起こさせないので、従つて他人を支配したり他人の苦しむのを悦ぶやうな性向を彼に與へなかつた。他人の苦しむ有様を見れば彼も亦苦しむ。これは自然の感情である、青年を冷酷にして、彼を感傷のある動物の苦しむのを見て悦ぶやうにするのは一種の虚榮心が彼に、自分の智慧、若しくは善徳に依つて自分は同じやうな苦痛を受けることがないのだと考へさせるからだ。かゝる虚榮心から遠ざかつてゐる者は、その結果なる悪徳に陥ることがない。それ故にエミイルは平和を愛する。彼は幸福の有様を見れば悦ぶ。而して若し彼が幸福を齎らすことに貢献することが出来れば、それが幸福を共にするといふ附加的の理由になる。私はエミイルが不幸な人を見るとき、自分が癒すことが出来る不幸を唯だ慰れむだけで満足してゐる無感覺な残忍な憐愍の情だけを彼等に對して感ずるに止まるとは想像しない。彼の親切は能動的であり、而して若し彼の心が冷靜なときは遙か後になつてから覺えるか、或は全然覺えなかつたやうな知識を直ちに

彼に與へるのである。若し友達が争つてゐるのを彼が見れば、彼はそれを和解させようとする。若し彼が惱んでゐる者を見れば、彼はその苦痛の原因を尋ねる。若し相互に憎んでゐる二人の間を見れば、彼はその敵意の原因を知りたいと思ふ。若し彼が富豪や権力家の壓制の下に呻吟してゐる蹂躪られた人を見れば、此の迫害を除く何等かの手段をさがす。而して彼は凡ゆるこれ等の不幸な人々に興味をもつので、彼等の苦痛の原因を除去する手段に對しては、彼は決して無頓着ではゐない。吾々は此の性質を彼の年齢に適當してゐるやうに利用する爲めには、如何にすべきであらうか？ 吾々は彼の知識と努力とを指導し、且つそれを増進させるやうに彼の熱心を利用しなければならぬ。

(註一四) 然し若し何人か彼自身に喧嘩を吹きかけたら、彼は何うするか。私はかう答へる、何人も彼とは喧嘩をしなからう、彼はさういふ事柄に決して關係しないであらう。然し乍ら弱い者や酔漢、或は兇漢、侮辱を加へて人を殺すのを悦んでゐる輩の攻撃又は侮辱を實際誰が免れ得るだらうか、と諸君は重ねて尋ねるであらう。その時は別問題である。公民の生命と名譽は暴漢や酔漢や兇漢の手に左右されるべきものではない。又何人も彼の落下して来る瓦と同じくかくの如き事件に對しては自身を保障することが出来ない。加へられた打撃又は語られた虚言は、若し彼がこれに服従すれば如何なる智慧でも防止する事が出来ず、如何なる裁判官でも復讐することが出来ない社會的影響をもつてゐる。故に法律の缺點は此の程度まで人間の獨立を復活させる。彼は凌辱者と自分自身との唯一の泰行であり且つ裁判官である。自然法の唯一の解釋者であり又執行者である。正義は彼の正當の權利であつて彼のみがそれを得る事が出来る。而してかくの如き場合に當つて彼がかくの如くに行動することを所期するほど愚かな政府は世界の何處にも無い。私は彼が戦はなければならないとは言はない。それは不合理だ。私は、正義が彼の權利であつて彼のみがそれを處置し得ると言ふだけである。若し私が帝王であれば、私は自分の領土の中に於いては何人にも人を隣つたり人に恥辱を與へたりすることを許さないと約束する。然しながら決闘を禁ずる凡ゆる無用な法律だけは用ゐなくても済むやうにする。此の法律は簡單で法律を必要としない。それは兎に角としてエミイルはかくの如き場合に何が自分自身に對する正當の權利で

あるかといふ事、及び名譽ある人間の安全の爲めに彼が當然行ふべき實例を知つて居るのである。最も強い人間でも侮辱を防ぐことは出来ない。然しながら彼は其の敵手に長く其の侮辱を誇るやうな機會を與へないやうに注意を拂ふことだけは出来る。

私は幾回でも繰返して言ふことを厭はないが、青年のあらゆる教訓は、口で喋舌る談議でせず、に實行の形式でするがよい。彼等に經驗が教へることの出来る事柄は、決して書籍によつて學ばせてはならない。別に話したいと思ふこともないのに、彼等に話すことを練習させようとする企圖、學校の机に腰を掛けてゐて、何人かに對して何事かを説服するといふ興味もないのに、古人の熱情を籠めた言句の力や、人を説服する技術の力を青年に感じさせようとかかるのは、何たる滑稽なことであらう！ 何うして修辭學を自分自身の目的の爲めに應用するかといふことを知らない人々には、修辭學の總ての法則は單に言葉の浪費に過ぎない。ハンニバルが兵士達にアルプスを越える決心をさせるために何といつたかといふことを知るのが、學校兒童に何の關係があるか？ そんな立派な演説をしないで、何うしたら校長を欺して休日を貰ふことが出来るかといふことを教へてやれば、確かに諸君の規則に對して子供等が一層注意を拂ふこと請合ひだ。

若し私が感情の既に發達してゐる青年に修辭を教へようと思へば、私は彼の感情を刺戟するやうな事柄に絶えず彼の注意を惹き付けるであらう。又私は相手に彼の希望に好意をもたせるためには何ういふ具合に彼等に話をしてもらい、かといふことを、彼と共に吟味するであらう。然しながらエミールは雄辯術に就いては餘り好都合な境遇には居ない。彼は主として自分の肉體的幸福といふことに關心してゐるから、他人が彼を必要とする程に彼は他人を必要としない。かく自分の爲めに他人に依頼する必要が全くないから、他人に爲て貰ひたいと思ふ事柄は、彼を強く感動

させるに足りないのである。此の結果として、彼の言辭は、大體に於いて簡單であり且つあけすけである。彼は通例は要點のみを話す。たゞ自分の言ふことを理解させる爲めに話す。彼は滅多に名文句を吐かない。といふのは彼は觀念を一般化することを學んでゐないからである。又彼は滅多に感激しないから、比喻をつかふことは殆んどない。

けれども是は彼が全く冷淡で無感覺であるからではない。彼の年齢、性格、乃至趣味がさうであることを許さないのである。青春の熱情の裡に於いては、一種の生命を附與する精氣、血液の中に保存されて幾度となく蒸溜された精氣が青年の心に熱情を與へる。そしてそれは、彼の眼に輝いて見え、彼の言葉の裡に看取され、彼の行動の上にも認められる。彼の言語には抑揚が出来る。時々は熱心がこもる。彼を鼓吹する崇高な感情は、彼に力と氣高さを與へる。人類に對する優しい愛に満ちてゐるので、彼の言葉は彼の心の動きをそのまま現はしてゐる。彼の寛大で卒直な態度の方が、他の人々のわざとらしい雄辯よりは言葉では言へぬ程の魅力を持つてゐる。といふよりは寧ろたゞ彼のみが眞に雄辯だといはう。何故ならば彼は、たゞ自分の感ずるものを示してそれを聽者に傳へるだけでよいからである。

私は考へれば考へる程、斯くの如く吾々の親切な衝動を行爲に現はし、吾々の成功または失敗からしてその原因に對する反省を抽き出すことによつて、世には苟も有益な知識であつて青年の精神に注入され得ないものが始んどないといふことを、益々多く見出す。又學校で學び得る眞の知識と、ともに、彼は更に重要な學問、即ちその學んだ事柄を人生の目的に應用するといふ學問を學ぶであらうといふことを、益々多く見出すのである。同胞に對して斯くの如き興味を持つてゐるのに、彼が早くから同胞の行爲、趣味、快樂を秤量し評價し、而して一般に人類の幸福を増減

すべきものに對して、何人にも興味をもたず、他人の爲めに何事をもなさぬ人々より正しい價値を與へることを學び損ふといふ筈が有り得ない。自分に關係のある事柄にのみ没頭してゐる人々は、その爲めに感情を餘りに強く刺戟されてゐるので、物事を賢明に判斷することが出来ない。彼等は自分等に關係のある點だけで總ての事物を判斷し、又は自分の經驗を唯一の頼みとして善惡の判斷をするので、彼等の精神は凡ゆる種類の滑稽な偏見で一杯になつてゐる。さうして苟くも少しでも彼等の利益に影響する事柄をみれば、彼等は全宇宙がひつくりかへつたやうに思ふのである。

利己心を他人の上に押し擴げよ、さすればそれは美德に變化する。人間の心で此の美德が根を張つてないものはない。吾々の注意の對象が直接吾々自身に限られてゐることが少い程、吾々は私慾の迷妄を恐れる必要が少くなるのである。此の私慾が一般的にさればされる程、それは益々公正なものとなる。従つて人類を愛するといふことは、吾々に於いては正義を愛するといふことに外ならなくなる。そこで吾々がエミイルが眞理を愛することを願ふならば、又吾々がエミイルが眞理を認めることを願ふならば、吾々は彼をして彼の凡ゆる事業から私慾を遠ざけさせなければならぬ。彼が他人の幸福を念とする事が多いに従つて、彼は益々賢明になり善良になる。従つて善と惡とを取違へること愈々少くなるであらう。然しながら單に個人的愚慮や不公平な先入見にのみ基いた盲目的な擇り好みを決して彼に許してはならない。何故に彼は一人の人間を利する爲めに他の人間に害を與へなければならぬか？彼が萬人の最大幸福の増進を念としてゐるなら、誰がより多くの幸福に浴したとてそれが彼にとつて何であるか？私慾を離れてかく一般の幸福を念とするといふことは、賢者が第一に關心することである。蓋し吾々は互ひに人類の

一員となつてゐるのであつて、人類の或る個人の一部分となつて居るのではないからである。

隣感が懦弱に墮落することを防ぐ爲めには、吾々はそれを一般化して全人類の上に擴張しなければならぬ。さうすれば吾々はそれが正義と一致する場合にのみ、憐愍に動かされるといふことになる。蓋し正義は凡ゆる徳の中で共通の幸福に貢獻する處が最も多いものだからである。理性と自愛とは、吾々に對して隣人より以上に人類そのものを愛することを強ひる。従つて惡人を慍むといふことは、他の人々に取つて極めて残酷だといふことになる。

加ふるに諸君は、私が自分の生徒に自分自身を超越させる爲めに採用したこれ等の凡ゆる手段は、一方彼自身にも亦直接の關係があるといふことを記憶しなければならぬ。蓋しそれは彼に内心の歡善を味はせるのみではなく、私は彼をして他人に對して親切ならしめようとして居ると同時に、亦彼自身を教育しようとして努力してゐるからだ。

先づ私はたゞ手段だけを示した。さてこれからその結果を説かう。彼の腦裡には如何に廣大な前途が次第々々に展開されて來ることであらう！如何に莊嚴なる感情が彼の心の裡で些細な情慾の芽生を窒息させてしまふことであらう！如何に明晰なる判斷、如何に正確なる推理か、吾の養成して來た性向から、偉大な精神の願望を狹隘な可能の範圍に集中する經驗、他人より優れた人物をして他人を自己の高さに引上げることが出來ぬので、自ら彼等の高さ迄身を屈することを知らしめる經驗から、發達して來るのが認められることであらう！正義の眞理、美の眞の典型、人間の凡ゆる道徳的關係、凡ゆる秩序の觀念、かゝる事柄が彼の理知に銘記される、彼は總ての事物の正當な位置を認める、而してその事物をその位置から追ふ原因を認める、彼は善を爲し得るものとそれを妨げるものを認める。人間の煩惱を感じたことはないでも、彼はその煩惱

の妄執とその作用とを知つてゐるのである。

私は境遇の力が自分を進ませる儘に進む。けれども私は吾が讀者に私に従つて來れ、とは主張しない。久しい以前から世人は私を妄想の國を彷徨してゐる人間だと考へてゐる。だが私の方では、始終彼等を偏見の國に住んで居るのだと思つて居る。私が俗見から遠く離れてさ迷つてゐる間でも、私はそれを心から忘れたことはない。私はかかる俗見を吟味し、それを思索する。しかしそれは俗見に追従したり、それから逃げたりするためではない、理性の秤で正しく量つて見るためである。私の理性がこれ等の俗見を棄てることを私に迫る場合には、讀者は私の例に倣はないであらうといふことを、私は經驗に依つて知つてゐる。私は、彼等が彼等の見るもの以上に想像を進めることを拒むので、單に彼等が比較する青年達とは著しく異つて居るといふだけの理由で、私がこゝに述べてゐる青年を私の空想の産物だと考へるといふことを知つてゐる。彼等は私の生徒が異つてゐるのが當然だといふことを忘れてゐる。もともと彼は全然異つた方法で育てられ、全く異つた感情に感化され、全く異つた状態で教育されて來たのであるから、彼が私の想像したやうにならないで、諸君の生徒に似るやうなことがあれば、それこそ甚だ不思議ではないか？ 彼は自然の作つた人間であつて、人間が作つた人間ではない。人間の眼に彼が不思議に見えるのは驚くに足りないのだ。

私が此の著作に着手した時に、有らゆる人々が自分と同じく容易に認めることが出来る事柄の外には何事をも假定しなかつた。蓋し吾々の出發點、即ち人間の出生は何人に取つても同一だからである。けれども吾々が進むに従つて、私が自然を培養しようとしてゐるのに、諸君はそれを根絶しようとしてゐるので、進めば進む程、吾々は互ひに益々遠ざかるのである。六歳の時には

私の生徒は諸君の生徒と左して變はつてゐなかつた。諸君はその時は未だ諸君の生徒の天性を損ふ時間が十分無かつたのである。然るに今や兩者には全然共通點が無い。而して彼等が成年に達した時には、——其の時期は今や迫つて來てゐるが——私の骨折が全く無にならない限りは、彼等は相互に全く異つた人間となるであらう。彼等が持つてゐる知識の量にはさう非常な相違はないかも知れない、が知識の種類には何等似たところがない。諸君は一方の者が崇高な感情を抱いてゐるのに他方の者にはその芽生さへもないのを見て、大に驚くであらう。そのくせ後者が已に哲學者であり又神學者であるのに、エミールは哲學者とは如何なるものか知らないし、殆んど神の名前さへ聞いたこともないといふことを記憶しなければならぬ。

若し何人か私に向つて、世の中には君の假定するやうな青年はない、若い人々はさういふ風には生れてはゐない、彼等にはかく／＼の感情がある。彼等はこれこれのことをすると言つたらば、それは恰も吾々の庭に在る梨の樹は悉く矮小だから、梨の樹は大木とはならないと斷言するのと同じことである。

私は動もすれば非難せんとする批評家に對して、私も彼等と同様に彼等の言ふ總ての事柄を知つてゐるといふこと、私は恐らく彼等より長い間その事を思考してゐたといふこと、及び彼等に私の意見を強ひたとて何の利益も得られるのではないので、少くとも彼等は相當の時間を費やして私が何の點で間違つてゐるかを發見しなくてはならぬと要求する權利が私にけあるといふことを考案せんことを乞ふものである。彼等に人間の本性を十分に研究してもらひたい。教育の力が個人に如何なる差異を齎らすものであるかといふことを知る爲めに、任意の境遇に於ける人間の精神の最も初期の發達を研究してもらひたい。然る後、彼等をして私の教育方法と私がその結果

だとする成果とを比較してもらひたい。私の推理の何の點が正しくないかといふことを語つて貰ひたい。そうすれば私は彼等に答へる必要がなくなるであらう。

私をして斷定的に、しかも自信をもつて語らせるのは、私が何等かの學說の精神に屈從せず、議論には出来るだけ頼らないことにして、専ら私自身が觀察したものだけに信賴してゐるといふことのためである。私は自分の想像した事柄に思想の根據を置かず、自分の目撃した事柄に根據を置く。私はある都會の障壁の中又け或る階級の人々の中にのみ自分の觀察を限つてゐけしない。私は、此の研究に費した生涯の間に觀察することが出来た凡ゆる階級の人々と凡ゆる國民とを比較した後、一國民に屬して他の國民にはないもの、一階級には有つて他の階級にはないものは、人爲的なものとしてこれを捨てた。而して凡ゆる年齢を通じ、凡ゆる階級の中、凡ゆる國民の中に於いて、總ての人々に共通してゐるもの、のみを明白に人類の固有なものと思ふした。

さて、此の方法に従つて、諸君が、未だ特定な型が出来てゐない青年、従つて他人の權威や意見に頼つて居ることが最も妙い青年にその子供の時代から従つて來てゐれば、彼は私の生徒と諸君の生徒との何れに酷似してくるだらうか？ 若し諸君が私が間違つてゐるか何うか知りたと思ふなら、これこそ諸君の解答しなければならぬ質問だと、私には思はれる。

人間に取つて、物事を考へ始めるといふことは容易な事柄ではない。然しながら一度び考へ始めるやいなや、決してそれを止めることがなくなるであらう。一度び思想すれば、常に思想する。さうして一度び思索を行はされた理知は、決して休止され得ない。それ故に諸君は、私が餘り休止させ過ぎ或は休止を與へなさ過ぎると思ふかも知れない。人間の精神は本性上それ程速かに開展するものではないと思ふかも知れない。又今までもたなかつた思想力を與へた後に、私は

精神を一種の觀念の圏内に餘り長く閉込めて置きすぎる、かゝる觀念の圏内は疾くにとび越してゐるべきである、と諸君は思ふかも知れない。

けれども先づ第一に記憶すべきことは、私が自然人を教育しようと思ふ場合、何も彼も野蠻人に仕立て、森林の中へ返さうとする必要はないといふこと、いな、社會生活の渦中に生活してゐつゝも、而かも人間の感情と偏見によつて社會なるものに束縛されるやうにしないといふだけで十分だといふ事である。彼をして自分の眼で見、自分の感情で感じさせよ。彼をして自分の理性以外に何の權威にも支配されぬやうにさせよ。かゝる状態の下に在つては、彼に印象を與へる幾多の事物、彼を動かす時に反覆する感情、彼の眞の慾求を充たす様々な手段等は、彼に從來得たことがなかつたやうな、若くは餘程遅れて始めて得られるやうな多大な觀念を與へるに相違ないといふことは、明白である。精神の自然な發達は、促進されるが錯亂されはしない。森の中に居れば何時までも愚鈍である人も、單に都會に居て傍觀してゐるさへすれば、賢明で合理的な人間となるであらう。吾々がそれに與からずに見てゐることの出来る愚行ほど、人をして賢明ならしめるに適したものはない。又若し吾々がその愚行に與つても、吾々が吾々の愚行の傀儡とならず又他人をそれに加へない限り、猶ほ學ぶ處があるのである。

又、吾々の能力が感覺の事柄のみに限られてゐる間は、吾々は哲學の抽象觀念や、或は純然たる知的觀念に對する手蔓を、殆んど全然與へてゐないといふことを考へなくてはならない。かゝるものに達するには、吾々が飽くまで強く結び付けられてゐる此の肉體から解放されるか、もしくは一歩々々徐々に且つ漸次に進行するか、然らざれば如何なる子供にも不可能な絶大な飛躍をして中間の空間を跳ね越えなければならぬ、而かもかゝる飛躍の爲めには成長した人々でさへ

も新に彼等のために作られた階梯が必要なのである。最初の抽象的觀念はかゝる階梯の第一段である、が然し如何にして諸君が此の階梯を建設しようと工夫するに至るか、私の解するに苦む處である。

一切を包んでゐる偉大なる不可解、地球を運行せしめ、あらゆる生物の系統を形造つてゐる偉大なる不可解は、吾々の眼に見る事が出来ず、吾々の手に探り出すことが出来ず、吾々の感覺の力を全然逸出してゐる。仕事そのものは吾々に見える。けれども仕事する者は吾々には見えない。此の仕事をする者が存在するといふことを知るのは、容易なことではない。が吾々がその存在する事を知る程度まで達した時、而してそれが何であるか、それが何處に在るか、と自問するとき、吾々の精神は混亂し、茫然自失してしまふ。吾々は最早や考ふる處も知らなくなる。

ロツクは、吾々をして先づ精神の研究から着手させて、次に肉體の研究に移らせようと欲してゐる。この方法は迷信、偏見、誤謬のそれである。それは理性の方法ではない。十分の秩序立つた自然の方法でさへない。それは吾々の眼を閉ぢて見ることを學ぼうとするのと同様である。吾々が精神に就いて正確な觀念を形造ることが出来るため、乃至かゝる存在があるといふことを感付くことの出来るためにさへ、先づ長い間形體を研究しなくてはならない。此の順序を反對にすれば、徒らに唯物主義を確立するに役立つに過ぎない。

吾々の感官が吾々の知識の最初の道具である以上、具體的な感覺し得る物體こそ、吾々が直接にその觀念を得る唯一のものである。此の「精神」といふ言葉は、哲學を學ばなかつた人には何の意味もない。精神は、無學者や子供達にとつては形體に外ならない。彼等は、精神が泣叫び、話をし、戦ひ、喧囂の音をたてると假想してゐるはしないか？ 然らば諸君は、腕をもち、言葉を

口にする精神は、甚だ形體に似てゐるといふことを認めなければなるまい。此處に、地球上の有らゆる人民が、ユダヤ人を例外にせず、偶像の神體を造つた理由がある。吾々自身も亦、精靈とか三位一體とか至尊とかの語があつて、大半は眞實の神人同形論者である。私は、神は遍在してゐると教へられてゐることを認める。然るに吾々は又、空氣も亦遍在してゐるといふこと、少くとも吾々の大氣中ではさうだといふことを信じてゐる。而して精靈といふ言葉の語原は、呼吸又は風といふ義に外ならない。諸君が一度世人にその理解することが出来ない事物を口にすることを教へるやいなや、諸君の欲する如何なるもの生まれ、世人をしてそれを語らせることは甚だ容易である。

最初、他の物體に對する吾々の作用の知覺が、吾々をして他の物體が吾々に對する作用の仕方、も吾々がこれ等に對して作用するときのそれに似てゐると考へさせたものに相違ない。斯くして人間は自分に作用する凡ゆる存在を、皆生きて居ると考へ始めたのだ。自分がこれ等の存在の大部分よりも弱いといふことを感じ、又これ等の存在の能力の限界を認めることができなかったのだ。彼は彼等を実際限だと想像した。彼等はこれ等のものに肉體を與へると同時にそれを彼の神々にした。原始時代には、人間は總てのものを怖れ、自然に於ける一切は皆生きて居るものだと思つた。物質といふ觀念も、精神といふ觀念と同じく徐々に形造られて來た。蓋し前者の觀念それ自體は一の抽象だからである。斯くて彼等は宇宙を彼等と同じやうな神々で一杯にした。星、風、山、川、樹木、町、彼等の住居、總てがそれぞれ精靈、神、生命をもつてゐた。古代へブライ人のラバン、野蠻人の崇拜物、黒人の物神等、自然と人間の凡ゆる創造物が、人類の最初の神々であつた。多神教は彼等の最初の宗教であり、偶像崇拜が彼等の崇拜の原始形式であつた。

唯一の神といふ觀念は彼等の理解することが出来ないものであつた。これは彼等が徐々にその觀念を一般化して、第一原因といふ觀念に向上し、唯一の觀念の下に有らゆる存在物の全組織を統一し實體といふ言葉に一の意味を與へるやうになつて始めて理解が出来たのである。而してこの實體なるものは根本に於いて最大の抽象に他ならぬ。そこで神を信する總ての少年は必然に偶像崇拜者か、若くは少なくとも神人同一論者である。而して一度想像力の方が神を認めるときには、理解力が神を認めることは殆んどなくなる。これこそ、まさしくロツクの順序が吾々を導く誤謬である。

いよいよ實體といふ抽象的觀念に到達したとして、——何うして到達するか私は知らないが、——さて單一の實體を認める爲めには、此の實體は相互に相排斥する兩立し難い性質を具有してあるものと假定しなければならぬことが明白である。例へば思想や廣袤といふ如きもので、一方は本性上分割する事が出来るが他方は全然分割することを許さない。加ふるに吾々は、思想、若くは感情の如きは其の屬して居る實體から分離され難い原始的性質であり、その實體に對する關係は實體と廣袤との間の關係に似てゐると認めてゐる。従つてこれ等の屬性の一を失つた存在物は、その屬してゐる實體を失つてゐるといふこと、此の故に死は實體の分離に過ぎないといふこと、而して等のこれ二種の屬性が結合されてゐる存在物は、これ等の二種の性質の屬してゐる二種の實體から成立してゐるといふことが推察される。

ところで二つの實體といふ觀念と神の自然といふ觀念との間、及び、吾々の靈魂の吾々の肉體に及ぼす作用といふ不可解な觀念と、凡ゆる生物に對する神の作用といふ觀念との間には、如何に大なる溝渠があるかといふことを考へなければならぬ。創造、破壊、遍在、萬能といふ觀念、

神の屬性の觀念等は何れも極めて混亂した曖昧な觀念であつて、その意義を把握し得る人は甚だ尠い。然しながら一般人にとつてはこれ等の觀念に關して曖昧なことが少しもない。蓋し、彼等は全くそれを理解してゐないからである。然らば如何にしてかゝる觀念が、未だ専ら感官の最初の作用のみを事としてゐて、その觸知するもの、以外には何等理解することが出来ない青年の精神に對して、その觀念の全き姿が、即ちそれが曖昧である所以がわかる筈があらうか？ 無限といふ深淵が吾々の周圍に開けてゐても何の役にも立たない。子供はそれを恐怖することを知らない。彼の微弱な眼は其の深さを測ることが出来ない。子供には總ての事柄が無限であつて、彼は何事にも限界を附する事が出来ないのだ。彼等の測度が非常に大きいからではなく、理解力が極めて狭いからである。私は彼等が無限といふことを彼等の知つてゐる廣袤の以上ではなしに、それの以下に置いてゐるのをさへ見たことがあつた。彼等が或る距離を甚く遠いと判斷するのは足で測るのであつて眼で測るのではない。無限は、彼等が何處まで見ることが出来るかといふことではなしに、何處まで彼等が歩けるかといふことに依つて限られてゐるのである。若し諸君が神の力といふことを彼等に話して聞かせれば、彼等は神は自分の父親と同じやうに強いものだと思ふであらう。彼等自身の知識が、何事にまれ總ての可能なものを判斷する總ての標準になるので、彼等は常に自分が話に聞いた事柄は、自分が知つてゐる事柄よりは小さいものだと思像する。アジャックスはアキレスに對して自分の力を試みることを怖れた。然もジュピテに戦を挑んだ。何となれば彼はアシルは知つてゐるが、ジュピテを知らなかつたからである。或るスイスの百姓は自分が世界中の人間の内で最も金持であると思つてゐた。或る人が帝王とは何かといふことを彼に説明して聞かせたとき、彼は得意氣にかう尋ねた、「王様は山に百頭も雌牛を持つてゐる

らつしやるか」と。

私は、私が自分の生徒の教育の初期全體を通じて、宗教について生徒に何事をも話さなかつたのを見て、多數の讀者が驚くだらうといふことは承知してゐる。十五歳の時には、彼は世に靈魂があるといふことさへ知らなかつた。十八歳に達しても、恐らくは未だ彼にそれを學ばせるべき時代は來てゐまい。蓋し若し彼がそれを當然學ぶべき時期よりも早く學ぶと、彼は宗教について眞に何事をも解せずして終る危険があるからである。

若し私が最もなさない愚行を描けといはれたならば、私は教義問答を子供に教へてゐる術學の徒を描くであらう。若し私が子供を精神錯亂にしようと思へば、私は彼が教義問答で學んだものを彼に説明させてみる。諸君は私をかう反駁するであらう、基督教の教義の大部分は神祕であるから、人間の精神がこれ等の教義を理解出来るやうになるには、子供が大人になるまで待つばかりでなく、大人が死ぬまで待たなければならぬ、と。これに對して私は答へる。世の中には人間の精神が思考するのみならず信ずることさへ出来ない神祕がある。さうして私はそれを子供に教へることは無用だと思ふ。但し諸君が早くから子供を虚言をつく人間にしようと思ふなら格別である。私は更にかう言ひ加へる、神祕があるといふことを認めるには、諸君は少くともそれが不可解であるといふことを覺らなければならぬ。然し子供等はかゝる考へを持つことが出来ないと。萬事萬物が神祕である年頃には、本來の意味で神祕と稱すべきものはない。

救はれたいと思ふならば、吾々は神を信じなければならぬ。誤解された此の教義は、有らゆる殺伐な異教排斥の根源であり、且つ人間の理性を常に單なる言葉に満足するやうに習慣づけることに依つて、これに致命的打撃を與へる凡ゆる無益有害な教訓の原因である。永遠の救ひを受

け得んが爲めには、勿論一瞬間をも浪費してはならない。けれども或る言葉を繰り返してゐれば十分それが得られるならば、吾々は何故子供と同じく椋鳥や鸚鵡を天國に住まはせてならないのかその理由が解らない。

信仰の義務は信念の可能を假定する。信仰をもたない哲學者は間違つてゐる、蓋し彼は自分が教養した理性を誤用して居り、且つ彼には自分の否定する眞理を理解することが出来るからである。然しながら基督教を信ずると公言する子供、彼は何を信じてゐるか？ たゞ彼の理解し得るものを信じてゐる。然るに彼が、繰り返して言へると自分に教へられた事柄を理解することは甚だ妙い。若し諸君が彼に正反對なことを言へと教へれば、彼は何時でも進んでそれを行つたことであらう。子供等の信仰、及び多くの人々の信仰は地理の問題である。彼はメッカに生まれないでロオマに生まれたことに依つて恵まれてゐるであらうか？ 或る人はマホメットは神の豫言者であるといふ話を聞く。それで彼は「マホメットは神の豫言者である」と言ふ。また他の者はマホメットは悪漢だといふことを聞く、それで彼は「マホメットは悪漢である」と言ふ。此の二人が若しその位置を代へたならば、何れも正反對なことを言ふであらう。最初は二人がかく極めてよく似てゐるのに、一人が天國へ、一人が地獄へ振向けられるといふことが有り得ようか？ 子供が自分は神を信ずると言ふのは、それは神を信ずるのではなく、世の中には神と稱する或るものがあるといふことを彼に話したピエールやジャックの言を信ずるといふことである。

ユーリビイドにかういふ詩の句がある、――

おゝ、ジュピテよ！ 私はたゞ汝の名前だけより知らない（註一五）

丁度子供の信仰は此の流儀である。

(註一五) プリユタルクの「戀愛論」によれば、ユーリビイドの「メナリツプ」の悲劇は本来此の詩句で始まつてゐたと
いふ、それをアテン市民が無理に今本のやうに代へさせたのであると。

吾々は、理性の時期に先立つて死んだ子供は總て永遠の幸福を奪はれないと信じてゐる。カトリック教徒も亦、洗禮をうけた子供達については、たとひ彼等が神の名の語られるのを聞いたこともなかつたにせよ、吾々と同じことを信じてゐる。だから、神を信ぜずに救はれる場合があるといふことになる。而してさういふ場合は、子供か狂人か、總て人間の精神が神性を認めるに必要な作用をすることの出来ないときに起るのである。此の點に於いて諸君と私との間に認められる相違は、諸君は子供は七歳で此の能力をもつてゐると主張するのに、私は十五歳になつても彼等にその能力はないといふ點である。私が間違つてゐるか正しいかといふことは、信仰箇條の問題ではない。博物學の一觀察の問題である。

同様の根據からして、かういふことが明白である。神を信ずることなしに老人になつた人だつて、彼が故意に眼をつむつてゐたのでない限りは來世に於いて神の遍在を見ることを妨げられはしない。而して私は、かゝる盲目は何時も故意だと定つてはゐないといふ。諸君は狂人の場合にはそれがさうだといふことを認める。狂人は病氣のためにその精神能力を奪はれてゐる。而かもその人間たる資格を奪はれてゐないので、彼等の造物主たる神の善に與る權利があるのである。然らば何故に、子供の時から有らゆる社會から遠去けられて、絶対に野生的な生活を送らされ、人間と交通して得られるやうな知識を何一つ與へられてゐない人々の場合にもさうと認めてはならぬであらうか(註一六)。何故ならばかゝる野生の人がその思想を眞實の神の認識まで高上させることが出来ることは、明白に不可能だからである。理性は吾々にかう語る。人間はその故意

の過失によつてのみ罰せらるべく、止むを得ない無知は彼にとつて決して一の罪惡となるべきものではない。此處からして、永遠の正義の前に於いては、若し必要な知識だに與へられたならば、必ず信仰したに違ひない凡ての人々は皆信者として數へられ、従つてたゞ眞理に對してその心を閉ぢてゐる人々の外には罰せらるべき不信者が一人もないといふことになる。

(註一六) 人間の精神の自然的狀態、及びその發達の緩慢なことについては「人間不平等論」の第一部を見よ。

吾々は、未だ眞理を理解することの出来ない人々に對して眞理を公言せぬやうにしたい。何故ならばそれは誤謬を強ひて教へ込むことになるからである。神に對して、低劣な、空想的な、有害な、不當な觀念をもつよりは、全然神の觀念をもたぬ方がどれだけ可いかわれない。神を認めることができないといふことは、神を讀すよりは罪としてまだ軽い。かの好プリユタルクはかういふ、「自分は、プリユタルクが不正で、嫉妬深く、毒心ある、自分の爲し得るものより更に多くを要求する人間だと云はれるよりも、寧ろプリユタルクといふ人間が全然世間には存在しないと云はれる方を好む」と。

神といふものが奇怪な姿として子供達の精神に描かれることから生ずる最大の惡は、その姿がその儘彼等の一生涯續いて行つて、彼等が大人になつても子供の時の神と同様な神のみ認めるといふことである。私は、スイスで、或る善良な敬虔な母親が此の格言を十分信じて、彼の女の子供が幼年時代の粗笨な教へに満足して、理性の時期に達した時に更に好い教へを等閑視するやうなことがあつた。此の子供は、尊敬と獻身の意を込めずに神の名が唱へられるのを聞いたことがなかつた。さうして彼自身が神の名を唱へようとしたときに、いはゞ彼には餘りに莊嚴、餘りに偉

大な題目だとしてもいふやうに、お黙りと言ひつけられた。此の制止が彼の好奇心を刺戟した。彼の自愛心は、かくまで念入りに彼から隠されてゐる此の神秘を知る時が早く来れば可いにと頸を伸べて待った。彼等が神のことを彼に語ることが少なければ少い程、彼自身が神のことを語るところを許されることが少なければ少い程、それだけ多く彼は神のことを考へた。此の子供は神を到るところに見た。たゞ私が恐れるのは、かく不謹慎に神秘の風を見せ過ぎる結果、青年の想像力を餘りに刺戟し過ぎた結果、頭腦に變調を來させて、彼を信神者とす代りに立派な狂人にしてせぬかといふことである。

だが私のエミールにとつてはさういふ心配は一つも要らない。彼は自分の力以上のものには何時も注意を拂ふことを欲しない習慣なので、かうした自分の理解することの出来ない事物に對しては甚だしい無關心の態度で耳を貸す。彼が平生「そんなことは私の知つたことではない」と口にする事は澤山ある。だから一つ二つ多からうと少なからうと彼にとつては大した相違とはならない。それで若し彼が以上の如き大問題について不安を感じ始めるときは、かゝる問題を人から提出されたのを聞いた爲めではなくて、彼の知識の自然の發達が彼の思想を此の方面に向けつつあるが爲めなのである。

吾々は、教養ある人間精神が如何なる道によつてかゝる神秘に到達するかといふことを見た。而かも私は、それが自然のままでは、たとひ社會の眞中であつても、可成り年齢の進むまでは決してかゝる神秘に到達しなかつたであらうといふことを躊躇せずに認めよう。だが此の同じ社會には感情の發達の促進される不可抗的原因があるので、若し吾々にして此等の感情を支配するに役立つ知識の發達を促進せしめなかつたならば、その時は吾々は實際自然の秩序から逸出して、

平衡が全然破られてしまふことにならう。吾々が何等か早過ぎる發達を如何にしても喰ひ止めることが出来ないときは、同様に迅速に、それに對應するものを發達させなければならぬ。さうすれば自然の秩序も覆へされず、又事物が離れ離れではなく共に進歩することになり、而してその生涯の各瞬間に於いて完全な人間が、或る時には一の能力に頼り、他の時には他の能力に頼るといふやうなことがなくなるであらう。

こゝで様々な困難が起つて來るのを私は見る。この困難は事實そのものによりも、それを解決しようとするに及んでいない人々の臆病にあるので益々大きな困難である。吾々は少くともそれを述べただけは述べてみよう。即ち子供は、必ず父親の宗教で教育されるに相違ない。彼は、此の宗教が如何なるものであらうとも、唯一の宗教であり、他の總ての宗教は笑ふべき馬鹿げたものに外ならないといふ證據を何時も十分に示される。その理由は國々により、地方によりて形式がちがふ。コンスタンチノーブルに於いてキリスト教を極めて馬鹿げたものだと考へてゐるトルコ人達に、パリに於いて、皆がマホメット教のことを何と考へてゐるかといふことを見せたい。輿論が勝利をしめるのは、宗教の問題が第一である。だが、有らゆる事物に就いて偏見の羈絆を振り切らうと欲してゐる吾々、何等の權威にも決して屈服することを欲しない吾々、吾々がエミールに對して如何なる國に於いても彼が自身で學び得るものでなければ何等學ばせようとはせぬ吾々は、如何なる宗教を彼に與へるであらうか、此の自然兒を如何なる宗派に屬させることにならうか？ その答へは甚だ簡單である、と私には見える。吾々は彼を何宗派にも屬させない、吾々は彼にその理性の正當な使用に導くものを彼自身で選擇させるやうにするであらう。

が、何うでもよい。熱心と信念とが今迄慎重な注意の代りをして来た。私は、今後も必要な時にこれ等の保護者が私を見棄て、くれないやうに望む。讀者よ、私が眞理の友に相應せぬ用心をするかと心配してはならない。私は決して自分の標語を忘れたのではない。だが私は稍やともすると自分の判断を信じない。此の件については、私自身が考へてゐるものを諸君に語る代りに、私よりも遙か優れた人物が考へたことを語ることにしよう。私は、自分の今物語らうといふ事實の眞實な點は保證する。これ等の事實は、私が今抄出しようとする著作家に實際起つた事柄である。吾々が現在手近の問題に關して何等か有益な思想をそれから引出すことが出来るかどうかを判断するのは、諸君に任せる。私は諸君の規矩として他人の思想乃至自身のそれを諸君に揭示するのではない。たゞ私はそれを諸君に吟味してもらひたいのである。

『三十年前に、或るイタリイの都會に一人の青年が居た。此の青年は故國を放逐された天涯の遊子で、赤貧洗ふが如きみじめ極まる生活をしてゐた。彼はカルヴァン教徒の家に生まれたのだが、愚行の結果異國に流浪する身となつたのであつた。彼は一文無しであつたので、一片の麵麴の爲めに改宗した。此の町に改宗者の宿る寄宿舎があつて、其處へ彼は宿泊することを許された。が宗論の研究で、彼はこれ迄に未だ感じたことのなかつた疑惑を抱くやうになつた。そして従來思ひも寄らなかつた悪行を知るやうになつた。彼は聞き馴れない講義を聞き、又それよりも一層見馴れない所行を見た。彼は此の悪行を知り、將さにその犠牲にならうとした。彼は逃げようとしたが、逃げようとするやうとすると幽閉された。彼は不服を言ふと罰せられた。彼は壓制的に死命を制されて、その人達と一緒に悪行をしないとふので、罪人のやうに取り扱は

れた。暴行と不正義との始めての經驗のために、若い經驗のない心に燃え立つた憤りは、自らそれを經驗した人々には解るかも知れない。憤慨の涙は彼の眼から溢れて彼は激怒のため息詰るやうだつた。彼は天に訴へ地に禱つたが、彼の禱りは容れられなかつた。彼は逢ふ人毎にそれを話したが、誰も彼に取り合はなかつた。彼の逢ふのは自分を侮辱した悪者の命令を奉じてゐる最も下劣な召使ひか、或は彼が反抗するのを嘲笑して、自分等の眞似をせよといふことを彼に勧める同じ罪惡を犯した仲間であつた。一人の立派な僧侶が、或る用件を帯びて此の寄宿舎を尋ねて來なかつたらば、彼は墮落して了つたであらう。彼はその僧侶に私かに相談をする機會を見出だした。けれどもその僧侶は貧乏で、自分自身が援けて貰ひたいやうな有様であつた。それでも此の壓迫された犠牲者の方が更に多く彼の助力を必要とした。そこで此の僧侶は物騒な敵を作るといふ危険を冒して、躊躇する處なく此の青年の脱走の便宜を謀つた。

『不行跡から脱れて貧乏の生活に還つてから、此の青年は運命に反抗して見たが徒勞であつた。或る時彼は運命に打ち勝つたと思つた。幸運の曙光が見えた時に、彼は自分の不幸も自分の保護者をも、同じやうに忘れて了つた。彼は間もなく此の忘恩の爲めに罰せられた。彼の凡ゆる希望は消え去つた。實際彼は若かつたのであるが、若さも何の役にもたゞず、彼のロマンチックな空想が萬事を臺なしにしてしまつた。彼には樂に暮して行くだけの才能もなければ技倆もなかつた。彼は凡人にもなれず悪人にもなれず、餘りに多くの抱負を抱いてゐる爲めに何物をも得る處がなかつた。彼が以前と同じ貧乏の境涯に沈淪し、食なく家無く、將さに餌を死なんとした時に、彼は再び以前の恩人を思ひ出した。

『青年は恩人を尋ねて彼に逢つた。そして親切に迎へられた。青年の姿を見ると、彼の僧侶は自

分の嘗つて行つた善行を思ひ出した。かういふ記憶は常に人の心を悦ばせるものである。此の僧侶は生れながら人情が厚く、人を憐む心の深い人であつた。彼は自分の苦しみを通して他人の苦痛を感じた。そして彼の心持は、順境であるからといつて驕らなかつた。手短かに言へば、智慧の教へと明かな徳とが生まれながらの親切な心を一層親切にしたのであつた。彼は青年を悦び迎へて、下宿を探してやつて彼に仕事の世話をしやつた。そればかりではなく、彼は青年を訓戒し、彼を慰め、忍耐して困難を忍ぶ難かしい術を教へた。偏見に促はれた人々よ、諸君はかういふ事柄を僧侶の身を以つて、而かもイタリイに於いて、行ふものがあるとは思ひも寄らなかつたであらう。

『此の立派な僧侶はサヴォアの貧しい僧職で、若氣の過ちで僧正の御機嫌を損じた人であつた。そこで自分の郷國ではたよるよすがもないので、はるばるアルプス連山を越えて糊口の道を求めに來たのであつた。彼には學問もあれば才智もあつた。そして彼の人を惹き付ける容貌の爲に、或る保護者を得たが、その人が或る大臣の家庭に於いて、その大臣の子供の家庭教師となるやうに世話をしてくれた。彼は寄食よりも貧乏を選んだ。その上、こんな高貴な人の家でどんな風に振舞はねばならぬかを知らなかつた。彼は此の大臣の家庭に長く留まつてはゐなかつた。彼は辭去するに當つても大臣に對する尊敬を失はなかつた。そして、彼は正しい生活を送つてゐた爲めに人々から愛されてゐたので、纏て僧正の許へよび戻されるやうになつて、山間の一小教區を與へられ、そこで餘生を送ることになつた。これが彼の本望の頂上であつた。

『彼の天性は此の若い亡命者に興味をひかれたので具さに彼を質問した。彼は悪運が既に此の青年の魂を枯らしてしまつてゐるのを認めた。そして嘲笑と耻辱が彼の勇氣を碎き、彼の自負は苦

い怨恨に變化して、彼をして人類の殘酷と不正義との裡に、人間性向の邪惡と凡ゆる徳行の空虚との以外には何物をも認めざらしめるに至つたのを知つたのである。此の青年は宗教は利得の假面に過ぎないことを見たのだ。そしてその神聖な勤行は偽善の遮蔽物であるのを知つたのだ。彼は無内容な煩瑣な議論に於いて、天國と地獄とが單なるうまい言葉の云ひまはしに對する懸賞として與へられてゐるのを發見した。彼は神といふ崇高な原始的な觀念が、人類の妄想の爲めに損はれたのを認めた。そして神を信ずる爲めには、神の與へた理性を棄てねばならぬことを知つて、彼は吾々の愚かな夢想とその夢想の對象とを等しく輕蔑した。事物を如實に知らず又その起原に關する何等の觀念をも持たないので、彼は頑迷な無智の中に沈淪して、彼自身より多くの事柄を知つてゐると考へてゐる人々を、全然輕蔑したのである。

『一切の宗教を等閑視した爲めに纏て彼は人類の義務を等閑視するやうになつた。此の放逸な若者の精神は既に此の方向に半ば以上進行してゐた。けれども彼は悪い性質の人間ではなかつた。たとへば不信仰と不幸とは漸次に彼の自然の性質を毀損して、彼を破滅の方へ引きずり込んで行つたのだ。それは彼を誘つて惡漢の行爲を行はせ、無神論者の行狀に陥らしめようとしてゐたのだ。けれども殆んど免れ難い惡行も全く手のつけられぬ迄になつてはゐなかつた。此の青年は無學ではなかつた。彼の教育は等閑に附せられてゐなかつた。彼は心臓の鼓動が高く打つ幸福な年頃であり、高鳴る血潮によつて心の燃えはじめ頃であつたが未だ感覺の狂熱に捉はれてはゐなかつた。彼の精神は未だ弾力を失つてゐなかつた。生來のはにかみと臆病な性質とは彼を抑制して、諸君がその生徒を手をつくして監督するあの期間を彼のために長引かせた。肉慾的墮落と何等魅力のない惡徳との忌むべき實例は、彼の想像を刺戟しなかつたのみか、却つてそれを死滅させ

た。長い間、嫌悪が徳行の代りをつとめて、彼の心の潔白を維持した。この潔白はもつともつと魅力ある誘惑にしか屈服しなかつたであらう。

「僧侶は此の危険とそれを脱する方法とを見た。彼はその困難の爲めに落膽しなかつた。彼は自分の仕事に興味を見出した。彼は此の仕事をしなげると決心をして、自分が悪徳から拾ひ出したこの犠牲者を善人に戻さうとした。彼は遠まわりにそれに著手した。動機が美しさが彼を勇氣付けて、彼の熱心に相應しい手段を彼に與へた。その結果はどうであるにしても、彼の骨折は徒勞には終らないことを彼は確信した。吾々の唯一の目的が善を行ふに在る場合には、吾々は必ず成功するものである。」

「彼は此の青年から彼の親切の報酬を決めない事に依つて、彼に説法をしない事に依つて、自分が彼に干渉を加へない事に依つて、常に彼と同じ標準まで降ることに依つて、そして自分の同輩として彼を取扱ふことに依つて、此の青年の信頼を得ようと試みた。眞面目な人間が若いやくざ者の友達となるといふこと、又、有徳の人が一層完全に勝利を収めん爲めに、淫蕩な言葉を忍んで用ふるといふことは測々として人を感動せしめる情景であつたと私は思ふ。此の馬鹿者が愚かな確信を抱いて、彼の處へ来て彼に向つて精神を披瀝した時に、此の僧侶はそれを謹聴して彼に安心させた。悪い事柄には賛成の意見を述べないで、彼は總ての話を面白がつてきた。拙劣な叱言を云つて彼の喋舌を止めたり、彼に警戒させるやうなことはしなかつた。青年が自分の談話の爲めに相手を面白がらせたと考へた爲めに、彼は總ての事柄を話す事に一層の興味を抱いた。斯くて青年は全く何事かを懺悔してゐるのだとは夢にも思はないで、大體の懺悔をしてつたのである。」

「僧侶は青年の感情と傾向を十分に研究した後で、青年が年齢から言へば無學ではないが、青年はその最も知らなければならぬ總ての事柄を忘却してゐるといふこと、及び彼が運命の寵を失つた爲めに、彼の精神に於ける善惡の凡ゆる眞の意識が死滅してゐるといふことを明白に認めたのであつた。墮落には魂からその生命を剝ぎとつてしまふやうな墮落の階段がある。面して食物を得るといふ點に全精神が注がれてゐる人には魂の聲は聞えない。彼を脅威してゐる道徳的死滅から此の不幸な青年を保護する爲めに、僧侶は青年の自愛心と自尊心とを復活させようとした。僧侶は青年の才幹を正しく使用すれば一層幸福な前途があることを彼に示した。また、他人の立派な行爲の物語を聞かせて青年の心に寛大な熱心を復活させ、愆ういふ善行をした人々に對する賞賛の心を喚起させて、自分自身でさういふ善行を行ひたいといふ希望を復活させた。彼の懶惰な放浪の生活から彼を引き留める爲めに、僧侶は青年に十分に選擇した良書を拔萃させた。斯くの如くして青年をして十分の自尊心を抱かせ、最早自分は何事にも役に立たない人間だとは思はせないやうにした。そして自分でも卑劣だと思ふやうな行爲を行はせないやうにしたのである。如何にして此の親切な僧侶が、教訓してゐるとは思はれないやうにしながら、青年の精神を墮落から救ひ出す爲めに、青年に解らないやうにそれを行つたかといふことは、次の些細な出來事を見れば解るであらう。此の僧侶は正直と深慮とを以つて頗る有名であつたから、多くの人々は町の富裕な牧師に頼まないで、此の僧侶に布施をして貰ふことを托するのであつた。或る時、或る人が貧乏人に分配するために若干の金錢を、此の僧侶に托した。處が件の青年は貧乏であるからといふので幾何かその金を貰ひたいと卑しくも頼んだ。「それはならぬ、吾々は兄弟である、そして君は私のものだ、また私は自分に委託された金錢に觸れてはならない」と僧侶は言つた。そ

して僧侶は自分の財布から要求された金額を出して青年に與へた。此の種の教訓が全くは墮落し切つてゐない青年の精神に、印象を残さないといふやうなことは滅多にない。

『さて私は三人稱で話をするのが厭になつた、又、そんなことをする必要もない。親愛なる友よ、此の不幸な放浪兒は私自身であるといふ事は諸君はよく御存じだらう。私は自分の青年時代の放逸が全く改まつたから、最早それを白狀しても差支ないと思ふし、又、私を救つてくれた人に對して、私は少くとも多少の耻は曝しても、その篤行に敬意を表さなければならぬと思ふのである。』

『私が最も感動したのは、私が吾が師の私的生活即ち偽善を交じへない徳行、弱さの無い人情、常に明晰且つ直截な言語、その言に一致した行爲を見た時であつた。彼は自分が援助した人々が晩禮式又は懺悔に行くか何うか、或は一定の時期に斷食をして肉食を斷つてゐるか何うかといふやうな事は、全く氣に留めてはゐなかつた。又、彼はこれと同じやうな他の何等かの條件、これがなければ信者から助けて貰へるといふ希望を抱けるやうになる以前に餓死して了ふかも知れない條件を、彼等に強ひなかつた。』

『私は右のやうな觀察によつて勇氣づけられたから、新しい改宗者の熱心さを彼に態と見せるやうなことは決して爲なかつた。又、私自身の考へ方を隠しもしなかつた。彼も亦その爲めに驚いた様子もなかつた。時々私はかう觸り言を言つた。彼は私が彼の歸依した宗教に無頓着であることを咎めない。がそれは私が育てられて來た宗教にも同じやうに無頓着であるといふことを、彼は知つてゐるからである。彼は私の宗教に對する輕蔑は一宗一派に限られてゐないことを知つてゐるのだと。だが私は時々彼がロオマ教會の教義とは反對な教義に賛成するのを聞き、且つ明か

にロオマ教會の儀式に大して重きを置いてゐないのを耳にした時、私はどういふ考へを抱かねばならなかつたであらう。若し私が彼の甚だ輕んじて居ると思はれる儀式を、彼が極めて忠實に守つてゐることを知つてゐなかつたとすれば、私は彼を假面を被つてゐるプロテスタント教徒だと考へたに相違ない。けれども私は彼が公私共に頗る忠實に僧侶の義務を行ふのを知つてゐたのでこの矛盾はどういふ譯であるかといふことを知らなかつた。嘗つて彼に不名譽を蒙らした過失、即ち彼が未だ一部分を征服したに過ぎない過失を除いては、彼の生涯は模範的であつた。彼の行爲は非難の餘地無く、彼の談話は正直で且つ分別があつた。私が彼と極めて親密に生活してゐる間に、私は一日と彼を尊敬するやうになつた。そして彼が以上のやうな非常な親切を以つて全く私を信服させたつた時に、此の不思議な生活を統一する根據をなしてゐる原理は、何物であるかを知るべき時の來るのを熱心な好奇心を以つて待ち望んだ。

『その機會は容易に來なかつた。彼は弟子に祕密を打ち明けるに先き立つて、私の心に蒔いた理性と親切の種子を芽ぐませようとした。私の性質の中で最も矯正することの困難な缺點は、一種の傲慢な人間嫌ひであつた。即ち、恰も富者や成功者の富と幸福とは私自身のそれを犠牲にして得たものであるかのやうに、又恰も彼等の所謂幸福は私自らの幸福を不正に取り去つたものであるかのやうに、私は富者や成功者に對しては或る怨恨を抱いてゐたことである。そして私の指導者が努力して復活させた自尊心は自尊心となり、此の爲めに人間は益々私の眼には惡

者に映じて來て、憎惡の心に嘲笑を加へたに過ぎなかつた。『彼は此の自尊心を直接に攻撃はしないで、それが精神の冷酷となる事を防止し、私の自尊心を失はせぬやうにしながら、他人を輕蔑させぬやうにした。淫華な事柄から絶えず私の注意を遠ざ

けて、その下に隠されてある眞の苦惱の方へ私の注意を向けさせ、彼は私に同胞の過失を悲しみ、彼等の苦痛を感知して彼等を羨まずに憐むことを教へたのである。彼れ自身の弱點を痛感することによつて人類の弱點に對する憐愍の情に動かされた彼は、有らゆる人々が自己の不徳と他人の不徳との犠牲となつてゐるのを見た。彼は貧しい人々が富める者に壓迫され、又富める者は彼等自らの偏見に壓迫されてゐるのを見た。彼は言つた「私を信じなさい、吾々の妄想は決して吾々の災禍を隠すものではない、却つてそれ自身無價値なるものに價値を與へることによつて、妄想さへなければ氣のつく筈のない凡ゆる種類の架空の苦痛を感じさせることによつて、益々災禍を増すものです。心の平和はその平和を妨げる一切の事柄を輕んずることに在るのです。最も人生に執着する者は、人生を最も少くしか樂しむことのできない者です。最も熱心に幸福を望む者は、常に最も不幸な者です」と。

「何といふ悲觀的な考へだらう！ と私は苦々しく叫んだ。「若し吾々が、一切を否定しなければならぬとすれば、吾々は何のために生まれて來たんだらう？ 若し吾々が幸福そのものさへ輕視しなければならぬとすれば、誰が幸福であり得ようか？」「私が幸福なのです」と或る日、此の僧侶が言つた。その調子は私に深い印象を與へた。「あなたが幸福ですつて？ 運命の神から疎んぜられた、非常に貧しい、追放され、迫害された、あなたが幸福ですつて！ 一體あなたは幸福になるやうなどんなものをお持ちです？」「それでは話して聞かせよう」と彼は答へた。

「そこで彼は、私の懺悔を既に聞いたから彼も私に懺悔しよう、と前置きして置いて、私を抱擁しながら言つた「私は何も彼も一切を君に打ち明けよう、君は私に分かるだらう。私が實際どんな人間かといふことはわからぬ迄も少くも私が私自身をどう見てゐるかがわかるだらう。君が私

の信仰の全部の懺悔を聞き終つて了へば、君が私の精神の状態が本當に解つてしまへば、何故私自身が幸福だと思つてゐるかといふことが解かるだらう。そして若し君が私と同じ様に考へるならば、如何にして幸福になるかといふことが君にもわかつてくるだらう。だが此の説明を今直ぐにするといふ譯にはいかない。人間の運命と生活の眞の價値といふ事に就いて、私の考へを全部話すには相當に時間が要る。吾々は邪魔をされないで談話を續けて行けるやうな時と場所とを選むことにしよう。」

「私は早くその話が聞きたいとせがんだ。その會合は時を移さずすぐその翌朝に決められた。それは夏のこと、吾々は黎明に起き出でた。彼は私を連れて町を離れ、ある高い丘へと登つた。そこからは、その麓を廻るポー河の流れがこの河水に浴した豐饒な沃野の間に見渡され、遙か彼方には巨大なアルプス連山が連り聳えてゐた。朝日の光は既に平原を掠めて、原野の上に樹や丘や家の長い影を投げ、それを無数の光の箭で彩つてゐる。實に眼も醒めるばかりの美觀であつた。謂はゞ自然が吾々の談話に主題を提供せんとして、吾々の眼にその凡ての威容を展開したのであつた。それだからこそ、平和の人もしばし黙々としてこの景色に眺め入つてから、始めて、次のやうに語つたのだ。」

サヴォア人司祭の信條告白

吾が子よ、私から學者めいた議論や深奥な理窟を聞くつもりでゐられてはこまる。私は大哲學者でもなければ、又大哲學者にならうなどと考へたこともないのだ。けれども私には或る程度の常識がある。そして常に眞理を愛してゐる。私は君と議論しようとは思はん。君を説得しよう

さへ思はない。唯だ私は、自分のこの單純な心の内で考へてゐることを、君にお話しすればそれでよいのだ。私が話をしてゐる間、君は君自身の心に談合してゐて呉れ給へ。私が君に望むところはそれだけだ。若し私が思ひ違ひをするやうなことがあるとしても、それは悪意からではない、だから、それだけでも私の過失は私にとつて罪となる筈はない。同様に君がまた同じやうな感違ひをしようとも、そのために別段不都合なことが起りはしないのだ。若し私の考へが正しければ、理性といふものはお互に共通なものだし、吾々は同じ興味をもつてその理性の聲に耳を傾けることが出来るのだから、何うして君が私と同じやうに考へないことがあらう？

私は貧乏な百姓の子供に生れた。土地を耕すことが私の分であつた。けれども私の兩親は僧侶になつてくらしの道を立てる方がよいと考へて、私に學問をさせる方法を講じてくれた。兩親にしても私にしても、學問をして、善いこと、有益なこと、若しくは正しいことを研究しようといふやうな考へは毛頭無かつたのは確かだ、私は唯だ僧職を授けられるために必要なことだけを學んだに過ぎない。私は學べと云はれることを學び、言へと云はれることを言ひ、ひたすら教師の意のままに専念して僧侶になつた。然し、私は間もなく、自分が人間でなくなることを約束したのは、自分にはとても出来ない事柄を約束したのだ、といふことを悟つてしまつた。

良心は慣習の所産である、と吾々は聞かされてゐるが、然し私は、良心は人間のあらゆる法則を無視して自然の命令に飽くまでも従ふものだといふことを自分の経験によつて學んだのである。あれやこれやを禁じても無益である。吾々が充分に秩序立つた自然といふものに許されて行つた事柄については、ましてや自然の命令に依つて行つた事柄については、吾々に迫る悔恨の情は常に微弱なものに過ぎないのだ。あゝ、若者よ、自然はまだ君の五感に何も訴へてはゐない。

清淨無垢な生活を保つてゐられるその幸福な状態に長く留つてゐ給へ。自然に先走る時は、自然に反抗する時よりも一層深く自然を怒らせるものだといふことを記憶してゐ給へ。何時になつたら罪を犯すことなしに自然に讓歩することが出来るかを學ぶためには、先づ自然に抵抗することから始めなければならぬのだ。

若い時分から私は結婚といふものを自然の最初の最も神聖な制度として尊重して來た。私は結婚する權利を剝奪されたが、結婚の神聖は潰すまいと決心した。蓋し私は教養を享け讀書をしたにも拘らず、常に質素な規則正しい生活を續けて來たので、自己の精神の内に原始的な焰の光りといふものをそのまま保存してゐたのである。俗世間の道徳律もこれらの光りを少しも曇らしはしなかつた、それに私の貧乏といふことが、惡徳について様々な詭辯を考へ出すやうな誘惑から私を遠ざからしめてゐたのである。

この決心こそ明らかに私の身の破滅を惹起したものであつた。他人の結婚に對して私が注意してゐたことから、私の不行跡が露顯するに至つた。破廉恥な行爲は贖はれなければならぬ、私は捕へられ、停職され、放逐された。私は、不謹慎といふよりはむしろ眞面目な良心の犠牲となつたのだ。そして私は、この不面目に伴つて起こされた非難の聲にあつて、人は處罰を免かれざる爲めには一層悪い罪を犯すことが屢々必要となるものだ、といふことを信ずるやうになつたのである。

斯くの如き經驗は譬へどんなに些細な經驗であらうとも、反省的な人の心を強く撼かさずには置かない。私は曾つて私が人間の正義や名譽やその他あらゆる義務に關して抱いてゐた以前の考へがことごとく覆へされて行くのを痛ましくも眺めながら、それまで自分が奉じてゐた色々な意

見を毎日一つづゝ何かしら失つて行つた。かうして猶もその跡に残されたものは最早全體として、それ自身獨言して存續し得るやうな一體をなすには不十分なものとなつてゐた。私は明朗たる姿を宿してゐた諸々の原則が私の頭の中で次第にその影をうすくして行くのを感じた。そして遂にもう如何に考へたらいいのかといふことさへわからなくなつて、丁度君と同じところまで来てしまつたのだ。唯だ異つてゐるのは、この私の懷疑は、君よりも遙か壯年時代に結ばれた晚い果實であつて、一層の苦痛を伴つて生じたのもであり、より一層打破りがたいものであるといふことであつた。

私は丁度デカルトが眞理の探究には缺くべからざるものだと見做したあの疑惑と不安との状態の中にゐたのである。それは到底そのまゝに放棄することの出来ない状態である。それは不安であり、苦痛である。放埒な性向と懶惰な精神の者でなければ斯くの如き状態に留まることは出来ない、私の精神はそれを樂しむ程に墮落してはゐなかつた。それに自己の運命よりもむしろ自己そのものに満足してゐること位、反省の習慣を造るに役立つものはないのだ。

そこで私は人間といふものの痛ましい運命について黙想した。彼等は羅針盤も舵も持たずに紛たる世評の海を漂ひながら、何處から來て何處へ向つて行くのか自らの進路さへろくに知らぬ無經驗な水先案内より外に何の路案内もなく、彼等の嵐のやうな煩惱の俘になつてゐるのである。私は眩いた、私は眞理を愛してゐる、私は眞理を探し求めてゐるが、見付けることが出来ないのだ。私に眞理を示せ、然らば私は彼の女を掴んで放さないであらう。何故に彼の女は、彼の女を憧憬せざるを得ないところの思ひ焦れたこの胸から顔を背けるのであらうかと。

私がこれ以上の苦痛を屢々經驗したことがあるにしても、此の不安と苦痛との時代に於ける程、

不斷に不愉快な生活を送つたことは未だ曾つてなかつたと云つてよい。當時私は絶えず疑問から疑問へと迷ひつゝ、その間の長い思索から得たものとは唯だ、自己の存在理由と自己の職務の規範とに對する不安、不明、矛盾のみなのであつた。

何うして人間が主義として眞面目に懷疑論を奉じてなごみられようか？ 私はそんな人間を理解することは出来ない。そんな哲學者は全く存在しないか、若くは最も不幸な人々に相違ない。吾々が嫌やが應でも理解すべき筈の事柄に對する疑惑は人間の精神にとつては餘りに激烈な状態である、人間の精神はかゝる状態に久しく堪えることは出来ない。それは自己の意志に反しても何等かの決定を求め、何物をも信じないよりはむしろ自ら欺くことを欲せしめるのである。

教會は凡ての事柄を決定して何等の疑惑をも許さない、さうした教會に育つた私は、一點が覆へされると爾餘の全部を覆へさずにはゐられなかつた、又多くの不合理な斷定を認め得ない私は、それと同時に不合理でないものまでも放棄してしまつたのである、これらのことこそ私の當惑を二倍にしたものであつた。凡てを信ぜよ、と私に言つた人は、私に何物を信ずることをも妨げたのである。そして私は何處に停止すべきかをも知らなかつたのである。

私は哲學者に相談を持ちかけた、私は彼等の著書を聞いて、彼等の様々な意見を調べた。私はそれらが何れもすべて傲慢で、斷定的で、獨斷的であることを發見した。これは所謂彼等の懷疑論と稱するものに於いても全く同様であつて、何物をも知らず、何物をも證明せず、且つ互ひに相手を嘲笑し合つてゐるのである。そして凡ての哲學に共通なこの最後の點だけが彼等の依つて以て立つところの唯一の存在理由のやうに私には思はれた。彼等は攻撃する時は堂々たるものであるが、防禦に當つては何等の力もないのだ。彼等の議論を押し進めれば、彼等は破壊以外の何

物をも持つてはゐない。彼等の手段を調べてみると、何れも我田引水なのである。彼等はたゞ論議の爲めといふ點に於いて一致してゐるのみである。彼等の説に耳を傾けることは結局私の不安から脱出する手段ではなかつた。

私は此のやうに種々雑多な意見を生ずる原因は、第一は人間の精神の不完全であり、第二は自慢心であると思ふ。吾々には此の巨大な機構かきくに對する尺度といふものが全々ない、吾々はこの機構の諸關係を考量することが出来ない。そこで我々はその基本的な法則も又最後の目的も知らないのだ。吾々には吾々自身が解らない、吾々は吾々自身の天性も吾々の活動原理も知らないのだ。人間とは單なる個體なのかそれとも結合體なのか、それさへ吾々は殆んど知らない。吾々はあらゆる方面に於いて不可解な神秘に圍繞されてゐるのだ。それらは感覺の領域外にあるのだ。これらの神秘を洞見するために吾々は理性を持つてゐるのだと信じてゐる、ところがその實吾々はたゞ想像力を持つてゐるに過ぎないのだ。此の想像の世界の中に、人は各々勝手に道を切り開いて、それを正しいものと信じてゐる。然しながら何人も自分の道が果して目的地に通じてゐるか何うかは斷言出来ないのだ。ところが吾々は凡てを洞察し、凡てを知らうと欲してゐるのである。なかんづく吾々に全く解らない一と事は、吾々が知り得るものが何であるかを知らないといふことである。吾々は、吾々の内の何人と雖も實在するものを見ることが出来ないなどと告白する位なら、むしろ出鱈目に自分の意見を決めてしまひ度いのだ、そして實在もしないものを信じて終ひ度いのだ。吾々にはその際涯もわからないやうな或る廣大な全一體、それはその創造主が吾々に投げ與へて吾々に熱狂的な論議を捲き起さしたためたものだが、この全一體の一小片によつて、その全一體そのものが何であるかを見極めようとしたり、それと吾々自身との關係を見極

めようとしたところで、吾々は徒勞を敢てするに過ぎないのである。

哲學者とは眞理を發見する立場に立つものであるとすれば、果して彼等の内の誰がこれに興味を起すだらうか？ 彼等は何れも自分の哲學體系が他人のそれよりもより確實な根據の上に立つてゐるものではないといふことをよく承知してゐるのである。それにも拘らず彼等はそれを主張する、だが、それは、それが自分の體系であるからといふに過ぎないのだ。偶々眞理と虚偽とを識別するに至つても、他人の發見した眞理を取つて自己の發見にかゝる虚偽を捨てる人物は唯の一人もない。自己の名譽を捨て、も進んで人類を欺くまいとするやうな哲學者が何處に居るか？ 自分を認めさせる以外に何等かの目的をその心の底に抱いてゐるやうな哲學者が何處にゐるか？ 群衆の上に擢んでさへすれば、そして論敵共の名譽を掻き消してさへしまへば、彼はそれ以上に何を欲するか？ 信仰者の中に居れば、彼は無神論者だ、無神論者の中に居れば、彼は信仰者となつてゐるのだ。

かうした思索から私が學び得た第一の結論は、直接私自身に關係する事柄に私の研究を限ること、總ての爾餘の事柄は全く知らないで満足すること、及び私が知らねばならない事柄以外は疑ふだけの面倒をさへしないといふことであつた。

更に私は、哲學者達は私をかうした無益な疑惑から救ひ出すどころか、却つて私を苦しめるところのかうした疑惑を増すばかりで、その一つさへも解決しなかつたといふことを悟つた。そこで私は別な指導者を取つたのである、私はかう呟いた、内心の光明にたよることにしよう、それは彼等ほど私を迷はせはしないだらう、よし迷はせたとしても、少くもそれは私自らの過失である。又彼等の虚妄に身を任せるよりは、自分自身の幻影に従つた方がより墮落せずすむであら

う、と。

そこで私は自分が生れて此の方順々に自分を導いて来た種々様々な意見を心の裡に思ひ直して見た、そして私は、それらは何れも直ちに信頼出来る程確實なものではないけれども、それぞれの程度に於いては尤もらしいものを持つてゐること、そして内心私はその程度に應じて或るひは賛意を與へ、或るひは賛意を拒否してゐるといふ事實を發見した。此の第一觀察に於いて、これらの種々の思想を公平に比較考慮した私は、最初の最も普遍的なものが同時に又最も簡單で且つ最も合理的であるといふこと、そしてこれに凡ての賛票を集め得ないでゐるのは、唯それが最後に提出されたものでなかつたといふだけの理由からに過ぎないことを知つたのである。古今のあらゆる哲學者が力や、機會や、運命や、必然性や、原子や、生ける世界や、生氣ある物質で、あらゆる種類の唯物論に基礎を置く奇怪な哲學體系を豫め盡く説き盡してしまつたことを思ひ合はして見たまへ、そしてそれらの凡ての哲學者の後からあの有名なクラーク(註一七)が世界に光明を投じ、遂に實在中の實在を、萬物の賦與者を示したことを思ひ合せてみ給へ。何たる世界的な賛美、何たる異口同音の喝采とを以て此の新學説が迎へられたことであらう！ これこそは實に偉大な、實に喜ばしい、實に崇高な、實に人の魂を高め、道徳に基礎を與へるに適した、そして同時に非常に驚異的な、非常に光明に充ちた、非常に簡單な體系であり、しかも他のあらゆる體系ほど、人間の精神にとつて不可解なものを含んでゐないやうに思はれる體系なのだ！ 私は獨り呟いた、あらゆる學説は何れも解決すべからざる問題を含んでゐる、蓋し限りある人間の精神はそれらを解決するには餘りに小さいのだ、故にそれらの難問はむしろ如何なる學説に對してもその反證とはならぬ。だがこれらの學説の直接的證據の間には如何なる差異があるといふのであら

うか？ 吾々は、唯だ一つの學説で總ての説明がつき、しかもそれが他の學説より六ヶ數くないとすれば、何故その學説を選んではならないのであらうか？

(註一七) 英國の有名な神學者、一七二九年死す。

そこで眞理に對する愛を唯一の哲學とし、益もない煩瑣な論證から私を救つて呉れるところの簡單な平易な規則を唯一の方法として奉じた私は、此の規則によつて私自身に關係する知識の再吟味に取りかゝつた。私は私の眞面目な良心にかけて、自分の賛意を拒否し得ない凡てのものを自明の理として承認し、これらの理に必然的な連關を持つと思はれるものは凡て眞なりとすることにし、爾餘の一切のものは未定のまゝに放任して、否定もしなければ肯定もせず、實際的に何等の効果を齎らさない限り、それらのものを解明する爲めに心を勞するやうなことをせぬことにした。

然しながら、私とはそもそも何者であらうか？ 如何なる權利によつて私は物事を判定するのであらうか？ 又私の判断を決定するものは何であらうか？ 若しかゝる判断が私の受けた印象から必然的に引き出されたものとするならば、私はかうした研究に於いて徒らに自分の精力を浪費することになる。それらは自ら或ひは全く形成されないか、若しくは、それらを導き出すために敢て私が關與しなくとも、自ら形成されるのだ。そこで私は、自分が使用せんとする道具を知り、その使用が何の程度まで信頼し得るかを見る爲めには、先づ自分といふものの上に觀察の眼を轉じなければならぬのである。

私は存在してゐる、そして私は感覺を持ち、それを通じて私は印象を受ける。これが私の注意を惹く第一の眞理である。そして私はそれを承認することを餘儀なくされてゐる。私は私の存在

について或る特別な感覺力を持つてゐるか、それとも五感の力に依つてのみ自分の存在を感知するののか？　これが私に提出された、そして今のところ解決することの出来ない第一の問題である。何となれば、私は或は直接に、或は記憶によつて絶えず感覺を受けてゐるのである、さうした私が、自我の感じがそれらの同じ感覺群以外の何者かであるか何うか、又それはそれらの感覺群と無關係であり得るものか何うか、何うして知ることが出来るよう？

私の感覺は、それらが私の存在を私に感知せしめる以上、私自身の中に生ずる。然しその原因となると、私自身にそれがあるとなしとに抱らず、感覺は私に感じて來るし、又私に無關係に生起し、消滅するのであるから、私には無縁のものである。そこで私は私の中にある感覺と、私の外にあるその原因若くは對象とは、同じものではないといふことを明白に認めるのである。

斯くて嘗に私が存在するばかりでなく、他の實在も亦存在する、即ち、私の感覺の對象も亦存在する。假しそれ等の對象が單に觀念に過ぎないとしても、猶それ等の觀念が私でないことは眞實である。

さて、私自身の外に在る總てのもの、私の感覺に訴へる總てのものを、私は物質と呼ぶ、そして結合して個體となつてゐると見られる物質のあらゆる分子を物體と呼ぶ。かうすると、觀念論者と唯物論者とのあらゆる論争は私には何の意味も持たないのである。この人々の物體に就いての外觀と實體との區別論の如きは空想に過ぎないのだ。

今や私は宇宙の存在を確信すること、猶ほ自らの存在を信ずると全く同じである。進んで私は私の感覺の對象を考察する、そして自分に對象を比較する能力のある事を發見した私は、私が從來知らなかつた能動的な力を賦與されてゐることに氣がついたのである。

認めることは感ずることである、比較することは判断することである。判断するのと感ずるのとは同じことではない。諸種の對象は感覺を通じて、それが自然界にあるがまゝの姿で、個々別に、私に現はれる。私はそれ等を比較によつて動かす、謂はゞ移動させる。そしてそれ等の間の相違點又は類似點を、一般的に云へばそれ等の凡ての關係を明らかにする爲めに、一方を他方の上に重ねてみる。私の考へでは、能動的又は理性的生命の種種の能力とは、在るといふ此の言葉に意味を認める能力のことである。純感覺的な生命の中に、比較し判断するところの此の智力を求めようとしても徒勞に終る、その本性の中にそれを發見出来る筈がないのだ。かゝる受動的生命は各々の對象を個々別々に感知するであらう、或は更に二個の對象から出來上つてゐる統一體を感知しさへするだらう。然しながら彼は一方を他方に積み重ねる能力が全くないから、それ等を決して比較することが出来ないだらう、それ等について全く判断し得ないであらう。

二個の對象を同時に見るのは、それらの關係を見るのでもなければ、差違を判断するのでもない。若干の對象が相互に前後してゐるのを認めるのは、それ等を數へることではない。私は、指の數を數へずにも、自分の手全體を同時に見る事が出来るやうに(註一八)、大きな棒と小さな棒とについても、それ等を比較したり、それ等の大小を判断したりしないでも、それ等の觀念を同時に持つことが出来るのである。より大きいとかより小さいとかいふこの比較觀念は、一、二等等の數量觀念とともに、私の精神が感覺の生じた場合に於いて始めて生み出すものではあるが、これが感覺でないことは確かである。

(註一八) ド・ラ・コンダマイヌ氏の物語によると、三つまでしか數へることを知らない人民がある。然し此の國の人も手があるのだから、彼等は五つまで數へることを知らないで幾度もその指を見た譯である。

吾々の聞くところに依れば、感覺的動物は感覺に於ける固有の差異に依つて、その感覺を夫々區別するといふ、これは説明を要する。感覺が異なる場合には、感覺的動物は、その差異に依つて感覺を區別する、感覺が似てゐる場合には、一方は他方より後れて知つたから、それによつて區別する。だが他の場合には、同時に經驗した二つの相等しい對象を、彼は何うして區別するであらう！ 彼がこの二個の對象を混同し、同一物と取違へることは必然的でなければならぬ、殊に、空間を表現する感覺には外延がないと主張する學派にあつてはさうである。

比較すべき二つの感覺が感知されてゐる時は、それ等の印象が形成されてゐる、そして各々の對象が認知され、又二つ一緒に認知されてゐる。だが、それだからといつて、兩者の關係が認められてゐるのではない。若し假にその關係の判斷が單に一つの感覺に過ぎないならば、そして對象から、私に私のところへ來るものであるならば、私の判斷は決して誤ることはないであらう、私が感じてゐるものを私が感じてゐるのに誤りようがないからだ。

それでは何故私はこの二本の棒の關係を間違へるか、殊にそれが併行してゐない場合に間違ひをやるのか？ 何故私は、譬へば、小さい棒が實は大きい棒の四分の一に過ぎないのに、三分の一だと言ふのか？ 何故に感覺であるところの繪がその對象であるところの手本に似ないのか？ これこそ私が判斷する場合に能動的だからなのである、此較の作用に誤りがあるからである、そして諸關係を判斷する私の理解力が對象のみを示す感覺の眞理の中へ自己の誤謬を混入するからである。

以上の事柄に猶次の如き反省を加へてみ給へ、これこそは、君がそれを考へる時必ず打たれずにはゐないと私は確信する、それは何かと云へば、若し吾々が五感の使用に嘗つて全く受動的

であつたとするならば、吾々の諸感覺の間には全々何の交感も起らなかつたであらう、といふことだ。即ち吾々が觸れてゐる物體と眺めてゐる對象物とが同一物であるといふことを知る譯に行かなかつたであらう。吾々以外の何物をも認めることが出来ないか、若くは吾々の感覺に感じ得る五種の物があるのみで、それ等の同一性を認識する何等の手段もなかつたであらう。

私の五感を統一し比較する私の精神の此の能力は、何とでも名付けることが出来る、それは注意力とも思考力とも反省力ともその他好きなやうに呼ぶがよい。だが何れにしてもそれが私の中に存在するのであつて、事物の中に存在するのではないといふことは眞實だ、成る程私は、對象物が私に印象を與へる場合にのみこの力を生ずるのではある、だがそれにも拘らず、それを生ずるものはこの私以外の何者でもないといふことは眞實なのだ。感ずる感じないは私の自由ではないが、感じてゐるものを多かれ少かれ吟味することは私の自由なのである。

そこで私は單に受動的な感覺的存在ではなくて、能動的な、理智的な存在なのである。假し哲學がこれについて何と言はうとも、私は思考の名譽を持つものであることを主張してはばからないであらう。私はたゞ、眞理は事物の中に存在するのであつて、それを判斷する私の精神の中に存在するものでないといふことだけを知つてゐるのだ、私が事物について行ふ判定に、自分の精神を加へることが少なければ少ない程、私はそれだけ確實に眞理に近づいて行くといふことだけを知つてゐるのだ。かくて、理性よりも感性にたよらんとする私の規則は理性そのものによつて確證されるのである。

さて私は、謂はゞ私自身を確かめたので、次ぎに私の外部のものを眺め始める。すると私は、この廣大な宇宙の中に投げ込まれ、まぎれ込んでゐる自分の姿を、恰も無數の實在の中に、それ

等實在が何であるかも知、又それ等實在の相互間の關係も、自分との關係も全々知らないで、たゞその中に溺れてゐるやうな自分の有様を、一種の戰慄を以つて擬視するのである。私はそれ等のものを研究し、比較する。すると、それ等のものを比較するために私の前に現はれて來る最初の對象は私自身なのである。

私が感覺を通して認める總てのものは物質である。そこで私は物質のあらゆる本質的特性を、その物質の被感受性から演繹する、さうした被感受性こそは、私にその物質の認識を可能ならしめるところのものであり、その物質とは不可分の關係を有するものなのだ。私は物質が時としては運動し、時としては静止してゐるのを見る(註一九)。そこで私は静止も運動も物質にとつては本質的なものではないと結論する、たゞ、運動とは一種の活動で、一の原因の結果であり、静止とはその原因を缺いてゐるといふに過ぎないのだ。故に何等物質に作用するものがない場合には、物質は運動しない、してみると、物質が静止と運動とに無關係であるのと同様に、物質の自然的状態は静止の状態なのである。

ル イ ミ エ

(註一九) この静止は單に相對的なものだと言へる、然し運動の多少といふことが認められる以上、吾々は明白にその兩極端の一方を考へることが出来る、これが静止である、而も吾々は極めて明白にそれを考へる得るために、相對的でしかあり得ない静止を絕對的静止と思はんとする傾向がある。ところで若し物質が静止状態にあり得るものとすれば、運動が物質の本質であるといふのは眞實ではない。

私は物體に二種の運動を認める、即ち傳達の運動と自發的若くは自意的運動である。第一の場合には、運動の原因が運動體の外部にあり、第二の場合にはその内部にある。私はだからといつて、譬へば時計の運動が自發的であるなどと結論しようとするのではない。何となれば、若し何

等の外部的原因が發條に作用しないならば、時計は機械が戻つたまゝになつて、機構の運轉を止めてしまふからだ。同じ理由に依つて、私は流動體にも、又それに流動性(註二〇)を與へる火そのものにも、自發性を認めない。

(註二〇) 化學者は熱素、即ち火の要素は、これを含有する複合物の中に散在してゐて、外部からの力がそれを取り出して、集中させ、運動させ、そして火に變ずるまでは、その中に運動せず沈滞してゐるものと見做してゐる。

君が若し動物の運動は自發的であるか何うかと訊くならば、私はかう答へるだらう、私には全く解らない、だが、類推はそれを肯定してゐる、と。然らば自發的運動なるものが存在することを知つて私を知つてゐるのかと、君は再び尋ねるだらう、私は君に答へよう、私はそれを感じるが故にそれを知つてゐるのである、と。私は自分の腕を動かさうと欲すれば、私は腕を動かすのである、此の運動には、自分の意志以外に何等の直接原因は存在しないのだ。私の内にある此の感じを破壊せんとして他人が如何に論難を加へてもそれは無益である、此の感じは如何なる證明よりも確かな證明なのだ。彼等は私が存在しないといふことを確信させようとするのと同じである。

假りに人間の行動やその他此の地球上に發生する如何なるものの中にも、自發性が全くないとするならば、あらゆる運動の第一原因を想像することは益々困難となるばかりであらう。私としては、物質の自然的状態は静止の状態である、物質はそれ自體に運動する力を持たない、そこで運動中の物體を見る時は、直ちにそれは生命を持つた物體であるか、さもなければ此の運動は傳達されたものであると判断する、それ程私は確心してゐるのである。私の精神は無機物が勝手に動いたり若くは或る活動を起すといふ考へは、何うしても承認する事が出来ないのである。

然しながら、視界に映ずる此の宇宙は物質、散漫な死滅せる物質である(註二)。それはその全體の中に何等の結合も、何等の組織も持たない、又或る生物體の部分に相當するやうな感覺をも持たない、蓋し、その一部である吾々そのものが此の全體の中に何物をも感じないことが確實だからである。此の同じ宇宙は運動してゐる、そしてその運動は秩序があり、統一があり、一定の法則に従つてゐるから、宇宙は人類及び動物の自發的運動の中に現はれるやうな自由は全く持つてゐない。そこで世界は自分で運動する或る巨大な動物ではない。故にその運動は何等かの外部的原因に由來してゐる、私はそれを認識することは出来ないが、然し内心の信念は此の原因を極めて明白に感知せしめる。そのために、私は、太陽の運行をもそれを推進する或る力を想像することなしには眺めることが出来ない、更に、地球が回轉するとすれば、私はこれを回轉せしめてゐる手を見る思ひがするのである。

(註二) 私は生命ある分子といふ觀念を造り出さうとしてあらゆる苦心をしたが、遂に目的を達することが出来なかつた。感覺を持たずして感知し得る物質といふ觀念は、私には理解の出来ない、自家撞著的なものと思はれる。此の觀念を採用するにしても、排棄するにしても、先づそれを理解しなければならぬであらう、然るに私は今日までさうした幸福を掴み得なかつたことを告白する。

若し私が、物質に關する一般的法則の根本的關係を全々認識してゐないのに、それ等の一般的法則を認めなければならぬとすれば、果して何れだけ私に得るところがあるだらうか？ これ等の法則は實在物即ち物體ではないのだから、何か私の知らない他の根據を持つてゐるのである。實驗と觀察とは吾々に運動の法則を教へた、これ等の法則は原因を示さないで結果を決定する、それ等は世界の組織を説明し、宇宙の進行を示すには甚だ不充分である。デカルトは骸子の援け

をかりて天體を縮少した、然しながら彼はそれ等の天體に最初の運轉を與へ得なかつたし、回轉運動の援けによる以外にはこの求心力を作用せしめることが出来なかつた。ニュートンは引力の法則を發見した、然しながら、引力だけでは此の宇宙を間もなく一塊の不動體に化してしまふであらう、そこで彼は、天體に曲線を描かしめる爲めに、此の法則の上に更に遠心力を附加しなければならなかつた。デカルトをして、如何なる物質的法則が彼の惑星を回轉せしめたかを吾々に語らしめよ。ニュートンをして、天體の軌道の切線の中に、遊星を飛び出さしめた手を、吾々に見さしめよ。

運動の第一原因は物質の中に存在しない、物質は運動を受けてそれを傳達するが、運動を起しはしない。私は、相互に作用し合ふ自然力の動と反動とを觀察すればする程、一の結果から他の結果へとどこまでも辿つて行つて、結局第一原因として何等かの意志にまで逆のぼらねばならぬことを發見する、何となれば、原因の無限の連續を假定することは、原因を全々假定しないことになるからである。一言で言へば、他の運動から誘起されたものでないところのあらゆる運動は、自發的な、自意的な行動から來るよりは外はないといふのである。無生物體には行爲はない、ただ運動があるだけである。而して意志がなければ眞の行爲はない。これが私の第一原理である。故に私は一個の意志が此の宇宙を運動せしめ、自然に生命を與へてゐるのだといふことを信ずる。これが私の第一教理、若くは信條の第一條である。

如何にして一個の意志が物質的具體的行動を起すか？ それは私には解らない、だがそれが行動を起してゐることは、私が私自身の内に體驗してゐるのである。私は動かうと欲する、そして私の體が動くのだ。だが静止状態にある無生物體が自ら動くとか、若しくは運動を起さしめるな

どといふことは、理解し得ないことだし、又そのやうな例もないのである。意志はその作用によつて私に認識される、その性質によつてではない。私は此の意志を運動の原因だと考へる。だが運動を起し得る物質を認めることは、明らかに原因のない結果を認めることであり、絶対に何も認めないことである。

如何にして私の意志が私の身體を動かすかといふことを會得することは、如何にして感覺が私の精神を冒すかといふことを會得する以上に、私にとつて不可能なことである。この二つの神祕の一方のものが他方のものよりも、稍や説明がつきさうに思はれたのは何故であるかといふことさへ私は知らない。私としては、私が受動的であらうとも又は能動的であらうとも、この二個の實體の結合方法は、絶対に不可解なものやうに思はれたのである。世人が、恰もかく性質の異つた作用は二個の主體に於けるよりも唯一の主體に於ける場合の方が遙かに容易に説明がつきでもするかのやうに、この二個の實體をこつちやにしてしまひ、その爲めに、此の不可解性そのものから出發することは甚だしく不可思議なことである。

以上私が説いた教理は曖昧である、それは實際だ、然し少くともそれは或る意味を暗示する、そして理性と實驗とに合はないものを有してはゐない。これと同じことが唯物論についても謂へるだらうか？ 若し運動が物質にとつて本質的なものであつたなら、それは物質から分離すべからざるものであつたらう、それは物質内に常に同じ程度に存在してゐたであらう、それは物質のあらゆる分子の中に同一に存在したであらう、それは移動されることもなかつたらうし、増減することもあり得なかつたであらう、そして吾々は静止状態にある物質を認めることさへ出来なかつたであらう、これが明白なことではないだらうか？

若し君が、運動は物質にとつて本質的なものではないが必然的なものだと言ふならば、それは大して意味がないだけに、それだけ反駁しにくいやうなさうした言葉によつて私を欺かうとするものである。蓋し物質の運動は、或ひは物質そのものから發するか、従つて物質に本質的なものであるか、若くは外部的原因から來るか、従つてその場合も物質の上に原動力が作用してゐるだけ、物質に必然的でないものであるか、此の二つの場合の何れかであるからである。即ち、吾々は再び最初の難關に戻つてゐるからである。

一般的な抽象的概念は人間の様々な大きな誤解の原因をなすものである。形而上學の氣取つた言葉では唯だ一つの眞理をも發見することは出来ない。一度彼等の大袈裟な言葉を剥ぎ取つて見給へ、その哲學は實に赤面するやうな不合理を以て填められてゐるのである。吾が友よ、彼等が君に向つて此の自然に遍く分布してゐる盲目的な力の話をする時、君の精神にうなづかれるやうな何等かの觀念を與へるか何うか、それを私に聞かして呉れ給へ、彼等は普遍的な力とか必然的な運動とかいふ漠然たる言葉を用ひて何ごとかを述べたつもりであるのだが、その實何ごとをも述べてはゐないのだ。運動なる觀念は一の場合から他の場所への推移といふ觀念に外ならぬ、即ち方向のない運動といふものはあり得ない、何となれば或る個體が同時にあらゆる方向に動くといふことは出来ないからである。然らば物質は必然的に如何なる方向に動くといふのか？ 個體の全物質が一律の運動をなすのか、それとも各原子がそれ自體の運動をなすのであるか？ 第一の考へによれば、全宇宙は分割すべからざる個形體を形成してゐなければならぬ。第二の考へによれば、二個の原子が結合し得るといふ可能性を全く持たないところの、分散的、不粘着性の流動體とならざるを得ないであらう。あらゆる物質に共通な此の運動は如何なる方向を執る

のであらうか？それは直線をなすのか圓をなすのか、又は上へ向ふのか下へ向ふのか、又は右へか左へか？若し各々の分子にそれぞれ特有の方向があるとすれば、それ等のあらゆる方向及び方向差を生ずる原因は何であらうか？若し物質の分子若くは原子が、各々それぞれ自身の軸の上を回轉するに過ぎないとすれば、如何なるものと雖も自己の位置を離れ得なくなるであらう、そして移動運動は全く行はれないであらう、然もなほ此の回轉運動は何等かの方向に従はざるを得ないであらう。物質に對して抽象的に運動を賦與することは、何ものをも意味しない言葉を發するといふことだ。又物質に或る限定した運動を賦與することは、それを限定する何等かの原因を假定することである。私が特別な力を假定すればする程、私は、益々多くの新しい原因を説明しなければならなくなる、而かもそれ等の原因を支配する共通の作因などはなほ更發見することが出来ないのだ。私は元素の偶然的結合の中に何等かの秩序を想像することが出来ない、それどころか、軌躑さへも想像出来ないのだ。又宇宙の混沌といふことは、宇宙の調和といふこと以上に、私には想像のつかないことである。私は宇宙の機構が或ひは人間の精神に理解し得ぬものであるかも知れぬといふことは承認する、然し或る人が一度これが説明に着手した場合には、彼は人々に理解し得る事を言はなければならぬのだ。

假りに物質の動きが一個の意志の存在を私に示すものとすれば、一定の法則に據つてゐる物質の動きは一個の理性を私に示すものである。これは私の信條の第二條である。行爲し、比較し、選擇するといふことは、思考する能動的な存在の作用である。故にこの存在は實在してゐるのだ。然らばお前はそれが實在するのを何處に見てゐるのか？君はかう私に問はんとするだらう。それは單に回轉する天體や、私達を照らすあの太陽の中にも見られるのではない、單に私自身の

内にも見られるのではない、それは實にあの草を食む羊の中にも、空を飛ぶ鳥の中にも、落下する石の中にも、風に吹き散る木の葉の中にも見られるのだ。

私は、宇宙の目的は知らないけれども、その理法については判断する、蓋しこの理法を判断するには、宇宙の諸部分を相互に比較し、それ等の結合や相互の關係を研究し、それ等の和合状態を指摘すれば、それで私には充分だからである。私は何故に宇宙が存在するかといふ理由は知らない、然し如何にしてそれが變化するかといふことは絶えず見てゐる。私は宇宙を構成する諸の實體が相互に相援け合ふところの密接な交感關係を見逃しはしない。始めて時計の中を開けて見る人は、その機械の用途は知らないけれども、そしてその文字板を全く見てはゐないけれども、猶その機構を嘆稱して置かないであらう、私は丁度この人のやうである。彼は言ふであらう、私にはこれ全體が何でかううまく行つてゐるのか解らない、だが、各部分が他の部分に適合してゐるのがわかる、私はこの精巧な仕事を見てこれが製作者を嘆稱する、そしてこれ等のすべての車輪は、私に認めることの出来ない或る共通の目的に向つてでなければ、かくも協力して動く筈がないといふことを、私は確信する、と。

特殊な目的や手段のあらゆる種類の秩序ある關係を比較し、然して後に内心の感じに耳を傾けてみようではないか、健全なる精神にしてその證據を拒否し得るものがあるであらうか？偏見に曇らざる眼にして、宇宙のこの明白な秩序が至上の理性を示現してゐるのを見ざるものがあるであらうか？諸實在のこの調和や、各部分が爾餘の部分維持するための嘆稱すべきこの協同を否認せんとするならば、それこそ詭辯の山を築く必要に迫られぬであらうか？配合や機會については人は私に何とでも言ふことが出来る、だが若し諸君が私の同意を得ることが出来ないな

らば、よし私を沈黙せしめたところで、それが諸君に何の役に立つであらう！ 私が欲すると否とに拘らず絶えず諸君を否認してしまふところの私の無意識的な感じを、諸君は如何にして私から奪ひ取ることが出来るか？ 若しも有機體が一定の形態を取る以前に於いて、千態萬様をなして出鱈目に配合されてゐるものとしたならば、若しも、口の無い胃袋や、頭のない足や、腕のない手や、その他生存の能力を持たずに亡び行くやうなあらゆる種類の不完全な器關が、先づ最初に形成されてゐるとするならば、これ等の不完全な試みが一つとして吾々の眼に映らないのは何故であるか？ 何故に自然は最初には従はなかつた諸法則を、遂に自然自體に對して規定したのであるか？ 可能な事柄が発生するとか、發生の困難さは萌芽の量に依つて償はれるとかいふことには、私は驚くには當らない、私はこれを認める。然しながら若し誰か、出鱈目にばら播いた印刷文字が全く完全なエネイド（*ヴェルジールの有名な叙事詩*）をなしたと語つたならば、私はその虚妄を確かめるために一步踏み出すことも肯じないであらう。人は或ひは、お前は萌芽の量を失念してゐるのだ、と言ふかも知れぬ。然しながら、實際ありさうな組合せを得るまで、私がその萌芽を假定するとしたならば、如何に多くの萌芽が必要となつて來ることであらうか？ かゝる萌芽を唯の一つも見ない私としては、かゝる所産は萬に一つも偶然の所産ではないと斷言してはゝからぬ。加ふるに、組合せと機會とでは、組合はされた要素と同一性質の所産以外には何もかも生じないであらうし、組織と生命とは一握の原子からは決して生じないであらう、更に化學者は合成物を組合せたとして、坩堝の中で、それ等の合成物に思想と感情とを與へはしないであらう（註二二）。

（註二二） 人間の無法が益まで發展し得るといふことを、その證據をみたことのない人に信ぜられるであらうか？ アマ

クス・ルシタナスは、シユリアス・カミラスが鍊金術で第二のプロメシウスや一時の小人を造つたと云ひ、その小人が硝子瓶の中に這入つてゐるのを自ら見たと主張した。パラセルスはその著『物性論』の中で、これ等の小人を造る方法を教へてゐる、そして一寸法師や、牧羊や、牛人半山羊の神や、水の精は化學に依つて造つたのだと主張してゐる。有機物が火の熱に堪え、分子が最も熱い爐の中で生命を維持し得ると主張しない以上は、これ等の事實の可能性を樹立するために、他に何事か爲すべきことが残つてゐようとは何うしても考へられない。（譯者曰く、パラセルスはスウイズの鍊金術師）

ノイウエンチット（オランダの學者、一七一八年死す）を讀んだ時、私は驚愕した、殆んど慨嘆した。何うして此の人が、創造者の智慧を示してゐるこの自然の神秘から一冊の書物を作らうなどと欲するに至つたのであらうか？ 彼の書物は、彼がその題目を盡しもしないうちに、世界そのものと同じ嵩になつてしまふことだらう、そしていよいよ細目に入らうとするや否や、萬物の調和や萬物の一致といふ最大の神秘が逸出するのである。生命ある有機體の單なる發生でさへ人間精神にとつての深淵である。色々な種の間に、種の相互的混同を防ぐために自然が設けた打ち越えがたい障壁は、自然の意圖の明白な證據である。自然は秩序を立てて満足してはゐない、その秩序を何ものにも亂されぬために、十分なる手段を講じてゐるのである。

宇宙の中には、見やうによつては萬物に共通な中心であると思はれない存在は一つもない、即ちその存在の周圍に、他の凡てのものが、丁度相對的には相互に手段であり目的であるといふ關係をなして、秩序を保つてゐるのである。精神はこれ等の無數の關係の中に融合し没入してゐるが、これ等の關係はその一つと雖もその群の中に混り込んだり、没入したりしてはゐないのだ。このすべての調和を偶然に運動する物質の盲目的な機構から演繹するとは何たる荒唐無稽であらう！ 此の偉大なる全體の、凡ての部分に於ける諸關係の内に、示顯されてゐる統一的意思圖を否

定する人々は、彼等の譯のわからぬ抽象や排置や一般的原则やその他表象的表現等の愚を、覆はんとして覆ひ得ないでゐるのである。彼等が譬へ何をしようとも、秩序を司る一個の靈の存在が認められる程、それほど確實に秩序を保つた存在について、何等かの學說を認めるなどといふことは私には不解能なのだ。受動的な精神的物質から生命と感覺とを持つた存在が生ずることが出来たとか、盲目的な運命から理性的存在が生じたのだとか、全く思考しないものから思考する存在が生じたのだとか、さうしたことを信ずる信じないは、私の關知したことではない。

それ故に私は此の世界は賢明な力強い意志によつて支配されてゐると信ずる、私はそれを見てゐる、寧ろそれを感じてゐる、そしてこれは私にとつては知らねばならないことなのだ。然し此の同じ世界は永遠なものなのか、それとも創造されたものなのか？ 事物には單一の根源があるのか？ それは二つ乃至それ以上あるのか？ 又それ等の性質は如何なるものなのか？ 私は何も知らない、また知らないでも構はないのだ。それ等の事柄が私に關係を持つに連れて、私はそれ等を知ること努めよう。それまでは、私はこれ等の問題を放棄する、それは、私の自尊心を傷けるばかりでなく、私の行爲に何の益もなく、私の理性にとつては高尚すぎる無益な問題なのだ。

私は私の意見を宣傳するものではないといふことを常に記憶してゐて呉れ給へ、私は説明してゐるのである。物質が不滅であらうとも、若くは創造されたものであらうとも、受動的實體が存在しようとも若くは存在しなからうとも、全體が一であり、單一の靈的實體を示顯してゐるといふことは、以前として確實である。何となれば、私は、この同じ方式に蔽め得られない如何なるものをも見ないからである、同一の目的に向つて、即ち此の樹立された秩序内に於ける一切のもの

のの保存といふものに向つて、協力しないやうな如何なるものをも見ないからである。意慾して、實行するところの此の存在、自らの力に依つて能動的な此の存在、此の存在こそは結局、譬へそれが何ものであらうとも、宇宙を動かし、萬物を支配する存在であつて、私はこれを神と呼ぶ。私は神といふ名稱に、理性と力と意志との觀念を一纏めにしたもの、及びその必然的從屬物たる善の觀念を加へるのである。然しながら、私は、自分でさうした觀念を歸屬した神なる存在に就いては、それ以上に知るところがないのだ。神は私の感覺からも又理解力からも等しく身を交はしてゐる、私は神のことを考へれば考へるほど益々困惑するのである。彼が存在すること、彼が獨立して存在してゐることを、私は非常にはつきり知つてゐる、また私の存在が彼の存在に依存してゐることも、私が認め得る一切の事物が私の場合と絶對に同じであることも知つてゐる。私は神の仕事の中にどこにでも神の姿を認める。私は自分自身の中に神を感ずる、私の周囲の到るところに神を見る、だが、私が一とたび神そのものを熟視せんと欲するや否や、神は何處にゐるか、神とは何者であるか、その實體は何であるか、と探し求めんとするや否や、神は私から遁避してしまふ、そして亂れた私の精神には最う何も認められないのである。

自分の無力を痛感したので、私はもう決して神の性質についてとやかくの推論をすまい、私は神と私自身との關係について感情の上からさうした問題に迫られることはないのだ。斯くの如き推論は如何なる場合にも無謀である、賢者はそれを行ふ場合には戰慄を禁じ得ないだらう、彼はさうした推論に深入りすべきでないことを確信してゐるのだ。蓋し神性に對する最大の侮辱は、神を考へないといふことではなくして、神に對して邪まな考へを抱くことだからである。かうした屬性を持つた神の存在を發見し、その援けによつて私自身の存在を確認する私は、茲

に始めて自分の問題に還る。そして神の支配するこの萬象の秩序の中において、私が如何なる地位を占めてゐるのであるか、又私が調査し得るものは何であるか、を研究する。すると私は勿論先づ第一に自分の種に屬してゐる自分といふものを發見する。蓋し私を圍繞する諸物體は、唯その物理的な力によつてのみ、私の意志に反して私に作用することが出来るのであるが、私は、私の意志と、この意志を實行するために私の操縦することの出来る諸器關とによつて、それ等の力を意のままに或ひは利用し、或ひは避けて、それ等の諸物體の凡てのものの上に働きかけるところの力を、どの物體よりも遙かに多く所有してゐるからである。更に私は、私の理性の力によつて、萬物を吟味し得る唯一の存在だからである。此の地球上に於いて人間意外の如何なる動物が他の事物を観察し、その運動、その結果を測定し、豫想し、且つ謂はゞ、共通的存在の感情を個的存在のそれに結びつけることができるか？ 若し私が、萬物を自己に關連せしめ得る唯一の存在であるとしたならば、萬物は自分のために造られてゐると考へるのに、何の不合理があらうか？

そこで人間は彼が生息してゐるこの地球の主人公であるといふことは眞實である。蓋し單に人類があらゆる禽獸を征服するといふばかりでなく、又その工夫に依つて地球の諸要素を自由にするといふばかりでなく、此の地球上に於いては實に人類のみがそれ等のものを自由にする力を持つてゐるからである。更に彼は彼が接近することの出来ない天體さへも、觀照の援けによつてこれを我が物とするからである。此の地球上に於いて、火を使用することが出来、太陽を眺めて賛美することの出来る動物が他に存在するならば私に見せて貰ひたい。何と！ 私にあらゆる實在とその實在の關係を観察し認識することが出来るかと言ふのか？ 私は秩序とは何か、美とは何か、徳とは何か、それを感じる事が出来るのだ、私は宇宙を観察し、此の宇宙を支配してゐる手

方へ自らを高めることが出来るのだ、私は善を愛し、それを行ふことが出来るのだ、しかも私は此の自分を動物に譬へるのだ！ 下劣なる魂よ、汝を動物に似させてゐるものはその忌まはしき哲學である、と云はうか、否むしろ、汝は自ら墮落せんと欲して墮落し得ないものである、とでも言ふべきか、汝の精神が汝の原理に對立し、立派な汝の心が汝の教義を拒否してゐるのだ。そして、汝の能力の濫用さへも、汝に反對することに於いてその優越性を現はすのである。

私自身は、如何なる學説を支持するでもない、如何なる黨派の求めにも應じなければ、一宗派の首長にならうといふ野心も抱かず、神が据えて呉れた位置に甘んじてゐるところの單純な正直な人間だ、さうした私は、神を置いては吾が人類以上によいものはないと思つてゐる、また假りに私が萬物の順序の中に自分の位置を選むとしても、人間たること以上に何を選むことが出来るか？

かうした考へは私を感動させはするが、それ程私を得意にさせるものではない。何となれば、此の状態は私の選擇に由來してゐるのではないからだ、またそれはそれ迄存在しなかつたやうな或る存在のお陰で將來された譯でもなかつたからだ。私は、この名譽ある位置を占めたことを自ら祝福することなしに、又此の地位に私を据えてくれたところの手を祝福することなしに、かくも衆に擢んでた自分といふものを眺めることが出来ようか？ かくて自我への最初の復歸に於いて、自分の種の創造主に對する感謝と祝福との感情が私の心に生れ出るのである。そして此の感情から、至善至高の神性に對する私の最初の敬意が生れてゐるのである。私は神の萬能なる力を禮拜し、その恩澤に感泣する。私はこの禮拜を人から教はる必要はない、それは自然そのものが私に口述してゐるのだ。吾々を保護するものを尊び、吾々の幸福を願ふものを愛するのは、自愛

心の自然の發露ではなからうか？

然しながら、私が續いて自分の種のうちに於ける私の個人的位置といふものを知るために、様な階級や此の階級をなしてゐる人々を直視する時、私は一體何うなるであらうか？ 何たる光景ぞ！ 私の認めて來た秩序なるものがいま何處にあるか？ 自然の光景は私にたゞ調和と均衡のみを示してゐた、然るに人類の光景はたゞ混沌と無秩序とを示すのみである！ 統一が萬有の要素間を支配してゐるのに、人類は混沌の内にあるのだ！ 禽獸は幸福であるのに、萬物の靈長のみが獨り不幸なのだ！ あゝ智慧よ！ 汝の法則は何處に存するのか？ あゝ神よ、汝が此の世界を統べるとはかくの如きものか？ 慈悲慈善の實在よ、汝の力は如何になりしか？ 私は地上に惡を見るのである。

善良なる吾が友よ、かくの如き悲しむべき思索と外見上の矛盾とから、それまで私の研究も發見し得なかつたところの靈といふ崇高な觀念が、私の精神の内に形成されたといふことが、君に信じられるだらうか？ 人間の本质について冥想した私は、そこに明白な二つの根源を發見する思ひがしたのである、その一つは人間をして永遠なる眞理の深求へ、正義と道徳とに對する愛へ、即ち默想するだに賢者の悦びであるやうな理性の世界へのほらしめるものであり、他の一つは人間をそれ自身の中に引き降し、感覺の世界へ隷屬せしめ、感覺の手先である情慾の奴隷たらしめ、かくて前者の感情が人間に鼓吹したところのすべてのものに、それ等の情慾を對立せしめるものである。自分がこの相對立する二つの衝動に引きずられ、打ち挫かれてゐるのを感じた時、私は呟いた、否、人間は單一ではない、私は意志し、且つ意志しない、私は奴隷であると同時に自由人であることを感ずるのだ、私は善を見、それを愛する、しかも惡をなすのだ、私は理性の

聲に耳を傾ける時は、能動的であり、情慾に引きずられる時は受動的なのだ、そして私が敗れる場合、私は抵抗すればすることが出來たのだといふことを感ずるのが私にとつては最大の苦痛なのである。と。

若者よ、信賴して聞いてくれ給へ、私は如何なる場合にも誠實なのだ。若しも良心が慣習の所産であるとすれば、私は確かに間違つてゐる、そして道徳の證明といふやうな事柄は全くないだらう。然しながら若し、何よりも自己を本位としようとするのが人間の自然な性向であり、然もそれにも抱らず最初の正義の感情が人心に固有なものであるとするならば、人間を單一な存在となす人をして、これ等の矛盾を取除かしめよ、然る時は私も一個の實體のみを認めるであらう。

こゝで君の注意を乞ひたいのは、この實體といふ用語によつて私は、或る原始的な性質を持つた實在を一般的に理解してゐるのであり、特別な乃至第二義的なあらゆる意義を除外して考へてゐるといふことである。そこで若し吾々に知られてゐるあらゆる原始的性質が、同一の存在の中に結合され得るものとすれば、吾々は唯だ一つの實體を認めるの外はありまい。然しながら若しそれ等の間に互ひに相容れないやうなものがあるとするれば、さうした排他性に相應する種々な實體があるわけである。これについては君にも考へがあるだらう、だが私としては、ロツクが何と言はうとも、物質は思考し得ないといふことを確かめるために、物質が廣がりを持つてゐて分割出來るものなどといふことを知る必要はないのだ。こゝに一人の哲學者があつて、樹木は感じ、岩石は考へる(註二三)と言つても、彼はその狡猾な論證を以て私を惑はすには足りないのである。私は單に彼を目して、人間の靈魂を認めるよりも、好んで石礫に感情を與へんとする不正直な説

辯家なりとするのみである。

(註二三) 近代の哲學は石が考へるといふどころではなく、反對に人間は考へないといふことを發見したやうに私には思はれる。それは早自然の中に感覺的實在以外に何物をも認めない、そしてそれが人間と石との間に發見した唯一の差異は、人間は感覺を経験する感覺的實在で、石は感覺を経験しない感覺的實在であるといふ點である。若し凡ゆる物質が感ずるといふことが眞實ならば、感覺的單位乃至個體的自我といふものを、私は何處に見出せるだらうか？ それは物質の各分子の中にあるだらうか、それとも分子の集合體たる物體の中に在るだらうか？ 私はこの單位を、液體にも固體にも、合成物にも原子にも、同様に置くべきであらうか？ 自然の中には個體しかない！ と彼等は言ふ。然しそれ等の個體とは何であるか？ 石は一の個體か、それとも個體の集合體なのか？ その集合體は唯一の感覺的實在なのか、それともそれは砂粒と同じだけの感覺的實在を包含してゐるのか？ 若し總ての原子が感覺的實在であるならば、二個の自我が一體に融合しながら、しかも一方が他方の中にあつて自己を感じ得るやうな内部的交渉を私は如何にして認識し得るだらうか？ 自然の神祕は吾々には解らないが、引力は自然の一法則であるかも知れぬ。然し少くも君々の認めるところでは、質量に比例して作用する引力には、廣さと分割可能性とに對して兩立せぬものは全くない。感覺についても諸君にこれと同じものを認め得るか？ 感覺的部分は擴がり有してゐる、然しながら感覺的實在は一にして不可分である。彼は二分することが出来ない、彼は全體か、然らざれば無である。私は吾が唯物論者が何ういふやうにそれを解するか知らないが、唯物論者をして思想を否定せしめるに至つたと同じ難關が、彼等をして感情をも亦否定せしめるに至るだらうと思ふのである。既に彼等が第一歩を踏み出した以上は、第二歩を踏まないだらうと云ふ理由は、私の知るに苦むところだ。このために彼等は如何に餘計な手数を要することであらうか？ また彼等が思考しないことが確實である以上、如何にして彼等は、彼等が感ずるといふことを敢て肯定するのであらうか？

こゝに一人の聾者が未だ嘗て音響を耳にしたことがないといふ理由で、音響の存在を否定したと假定せよ。私は彼の眼前に一の絃樂器を置き、彼に隠してある別な樂器を用ひてこれに諸和音を發せしめる、すると聾者は絃の震動するのを見る、私は彼に言ふ、絃を動かすのは音響である。彼は答へる、いいやそんなことはない、絃の震動の原因は絃そのものの内にあるのだ、かくの如

き震動は凡ての物體に共通な性質なのだ。そこで私は更に言ふ、それでは他の物體でこの震動を示して貰ひたい、或は少くもさうした關係の原因を示して貰ひたい。聾者は答へる、それは出来ない、だが、私には如何にして此の絃が震動するのか、それが解らないといふのに、何故私はそれを説明するために自分に何等の概念もない所謂諸君の音響なるものを用ひねばならないといふのであらうか？ それは一の不透明な事實を更に一層不透明な原因に依つて説明しようとするものだ。諸君はまづ諸君の音響を私に感知せしめよ、さもなければ、私は世に音響といふものは存在しないと主張するのみである。

人間の精神が持つ思想とその性質とを考察すればする程、私は唯物論者の議論と此の聾者の議論との間に益々多くの類似點を發見するのである。實際彼等は、聞き違へる筈のない明確な調子を以つて呼びかけてゐる内心の聲に對して全くの聾である。機械は考へない、そこには反省を生み得る運動も形式もない。汝の内にある何物か、それを閉ぢ籠めてゐる束縛を斷たうと試みるのだ、空間は汝の尺度ではない、全宇宙を以つてしても汝を容るゝに足りない、汝の感情、汝の欲望、汝の愛想、汝の誇りそのものも、汝が身の幽閉を感じてゐるこの狭小な肉體以外に、別個な起源を有してゐるのである。

物質的實在は如何なるものと雖もそれ自ら能動的ではない、然るに私は能動的である。この點を私と論ずるのは無益である、私はそれを感じるので、私にこのことを語るところの此の感情は、それを反駁する理性よりも遙かに強力なのだ。私の肉體は他の物體から作用を受け、又他の物體に作用を及ぼす、この相互作用については疑ひはない。然しながら、私の意志は私の官覺機能から獨立してゐる。私は或は同意し或ひは反對する。私は或ひは屈服し或ひは征服する。そして私

は、私自身の中に、私がなさんと欲したことをなした時と、單に情慾に屈服したに過ぎない時とを、完全に識別する。私は常に意志する能力を持つてゐるが、實行する力は必らずしも持たない。私が誘惑に負ける場合は、私は外部的對象の刺戟によつて動いてゐるのである。私がこの弱點を自ら責める場合は、私は自己の意志にのみ耳をかしてゐるのである。私は悪を行ふ時は奴隸であり、悔恨する時は自由人である。この自由の感情は、自分が墮落する時の外は、そして私が肉體の法則に對抗して高揚せんとする靈の聲を結局封じて終ふ時の外は、決して私から消え去らない。私は自分自身の意志を知覺することによつてのみ、意志といふものを認識してゐるのである。悟性といふものも私にはこの程度以上に認識されてゐる譯ではない。諸君が私の意志を決定する原因は何であるかと問へば、私は、私の判断を決定する原因は何であるかと反問する。蓋しこれ等の二原因が一つの原因に過ぎないことは明らかであるからだ。若し諸君が、人間は判断をする點に於いて能動的なのだといふこと、及び人間の悟性とは比較し判断する能力の謂ひに外ならぬといふことをはつきり理解するならば、諸君は、人間の自尊心といふものがこれに類似した能力乃至それから派生した能力に外ならぬといふことを知るに至るだらう。人間は眞理を判定した時には善を選んでゐるのだ、若しその判定が誤つてゐるならば、彼は悪を選んでゐるのである。そこで彼の意志を決定する原因とは何であらうか？ 彼の判断が即ちそれだ。然らばその判断を決定する原因は何であるか？ それは彼の智能である、判断する能力である。決定的原因は彼自身の中に存在するのだ。それなしには私はもう何ものをも理解しないのである。

勿論私は私自身の幸福を望まないやうに自由なのではない、私の不幸を望むやうに自由なのではない。反對に私の自由は、何等外部的なものに強制されることなく、私に好都合なもの乃至は

さうと思はれるものしかないといふことの内にこそ、存してゐるのである。私が私意外の他のものになり得ないからと言つて、私が私の主人でないといふ結論が生ずるであらうか？

行爲の唯一の原動力は自由人の意志の内に存在する、吾々はこれ以上に溯ることは出来ない。無意味なのは自由といふ言葉ではなくて、必然といふ言葉なのだ。能動的な原動力から出發しない或る行爲なり結果なりを假定することは、それこそほんたうに原因のない結果を假定することであり、憎ましき循環論に落ちこむことである。それは或ひは第一衝動が全くないか、或ひは第一衝動のどこにも何等の先行原因がないか、その何れかだ。従つて自由がなければ眞の意志といふものは全くないのである。故に人間はその行動に於いて自由である、而して、かゝるものとして、或る非物質的實體から生氣を與へられたるものである。これが私の信條の第三條だ。以上の三箇條からこれ以上私が數へ擧げなくとも、君は容易に他の凡ての箇條を演繹することが出来る。

若し人間が能動的であり、自由であるとすれば、彼は自ら行動する。彼が自由に行ふところの凡ての行爲は全々神の定めたる制度に這入るものではない、それは神に歸せらるべきものではないのだ。神は、人間がその與へられたる自由を濫用してなすところの悪を、少しも欲してはゐない。然しながら神は人間がそれをなすのをとゞめはしない、それは或ひは人間のやうな弱いものがなした悪は神の眼には何でもないものであるからかも知れないし、或ひは、神が自らの自由を傷けたり、より大きな悪をなして自らの本性を損ふことなしには、人間を止めることが出来ないからかも知れぬ。神が人間を自由ならしめたのは善を選び悪を捨てしめんが爲めである。神は、人間が神に賦與された能力を善用することに於いてかゝる選擇をなすべき位置に、人間を置いたのである。然しながら神は又人間に許した自由が如何に濫用されても一般的秩序を亂し得ないやうに人

間の力に充分な制限を附してゐるのである。人間が行ふこの悪は、何等世界の體制を變へもしなければ、人類そのものが、よしんば自ら存続を拒否しようとしても猶それが存続するのを防げることもなく、それを行ふ人の上に再び落つるのである。神が人類の悪を行ふのを防がないとて不平を言ふのは、神が人類に優れた質性を與へたとか、神は人類の行動に、その行動を崇高ならしめんとする道徳性を賦與したとか、神は人類に徳行の權利を賦與したとかいふことで不平を言ふのと同じである。最高の悦樂は自己満足の中に存在する、吾々が自由を與へられてこの地球上に置かれたのは、此の自己満足を得んがためなのである、吾々が情慾によつて誘惑され、良心によつて牽制されるのもこのためなのだ。神そのものと雖も吾々のためにこれ以上何事を爲し得たであらうか？ 神は吾々の本性に矛盾を與ふることが出来たであらうか、そして悪をなす力のないものに善をなしたといふ賞を與へることが出来たらうか？ 何！ 人間が悪人となるのを防止する爲めに、神は人間を本能にのみ局限して、人間を動物にすべきであつたといふのか？ 否、吾が魂の神よ、私は、私がおん卿と同じやうに自由であり、善良であり、幸福であり得るやうにと、おん卿が人間をおん卿の姿に象とつて造つたことを決して責めるものではない。

吾々を不幸にし、悪人にするものは吾々の能力の濫用である。吾々の悲哀、心配、苦痛といふものは凡てこれ吾々が作つたものである。精神的不幸が吾々の作り出したものであるのは勿論であるが、肉體的不幸も、さうした不幸に對して我々を敏感にしてしまつたところの吾々の不身持といふことがなかつたならば、不幸でも何でもなかつたのである。自然が吾々に吾々の欲望を感じせしめるのは、吾々を保存する爲めではなからうか？ 肉體の苦痛は、その構造に狂ひが起きてゐる合圖であり、それに備へよといふ警報ではなからうか？ 死……悪人達は自分達や吾々の生

命を毒殺するではないか？ 何人か永遠に生きんと欲する者があらうか！ 死は諸君が自ら得た災禍の救ひである。自然は諸君が永久に苦しむことを欲しないのだ。原始的な質朴さの裡に生活してゐる人間は如何に僅かな苦痛をしか味はつてゐないことであらう？ 彼は始んど情慾なしに、従つて病氣なしに暮してゐる、そして死といふものを豫見もしなければ、感じもしない。彼が死を感じる時は、苦痛の爲めに彼がそれを欲してゐるのである。従つて死はも早彼にとつては災ひではない。若し吾々が、在るがままの吾々といふものに満足してゐたならば、吾々は吾々の運命を決して嘆く必要はなかつたのだ。だが、空想的な幸福を追求するので、幾多の現實の不幸を見出すのである。少しの苦痛を忍ぶことの出来ない人は、大いに苦しむことを豫想しなければならぬ。人が放蕩の爲めに健康を害すると、世人は薬をもつて彼を癒さうとする、彼が感じてゐる苦痛の上へもつて行つて、世人は彼が怖れてゐるものを押しつけるのだ。死に對する用心が死を恐ろしくし、死の接近を早める、吾々はそれを逃れようとすればするほど、益々それに氣が付く。かくて吾々は、自然を怒らしながら自ら犯したところの災害について、却つて自然に苦情を言ひながら、その全生涯の間を死の恐怖に暮してしまふのである。

人間よ、惡の創造者をもう探さぬがよい、その創造者こそ汝自身なのだ。汝が行ふところの惡、又は汝が苦しむところの惡以外に世には惡といふものは存在しない、そしてそれは何れも汝自身に由來してゐるのである。一般的惡は無秩序の中にのみ存在し得る。然るに世界の體制の中には一個の矛盾することなき秩序が見られるのである。特種な惡は苦しむ人の感情の中にしか存在しない。然るに此の感情を人は自然から受取つたのではない、彼は自らそれを自分に與へたのだ。過去の思出もなく未來の見透しも持たないやうな思案のない人に對しては、苦痛もほとんど威力

がない。吾々の不幸な進歩を止めよ、吾々の誤謬と悪徳とを除けよ、人間の細工を棄てよ、然らば萬事がうまく行くのである。

萬事が好都合なところに於いては、如何なるものも不正義ではない。正義が善と不可分なのだ。然るに善はある無限な力の必然的結果であり、感覺を持つた全體的實在に特有な自愛心の必然的結果である。全能の神は自己の生命を、謂はゞ諸の實在の生命に託して擴げるのである。創造と保存とは神の永劫の事業である。神は存在しないものの上に働きかけはしない、神とは死者の神ではないのだ、彼は自ら害することなしには、破壊者となつたり、悪心を抱いたりすることは出来ないのだ。全能の神は善なる事のみを欲することが出来る(註二四)。そこで至上の力を持つが故に至上の善である神は、同時にまた至上の正義でなければならぬ、然らざれば神は自家撞著に陥入るであらう、蓋し秩序に對する愛にして、それを造る方の愛が善と呼ばれ、それを維持する方の愛が正義と呼ばれてゐるからである。

(註二四) 古人が至上の神を *optimus maximus* と呼んだのは非常に正しく、然し *maximus optimus* と言つた方が一層正確であつたらう、蓋し神の善はその力から生じ、神は偉大なるが故に善なのである。

神はその被造物に何等負ふところがないと世人は言ふ。私は、神は人間を實在たらしめる時に約束した凡てのことを、人間に負ふてゐると思ふ。ところで人間に善の觀念を與へ、それを爲さんとする要求を感じしめることは、人間に善を約束することではないか。私が自分といふものに食ひ入れば食ひ入るほど、深く考へれば考へるほど、私は自分の魂の中に、正しくあれ、然らば汝は幸福ならんといふ文字を讀む思ひがするのである。ところが、現在の事態を考慮してみると、全くさうではない。悪人が榮えて、善人が相變らず迫害されてゐる。此の期待が裏切られる時、

吾々の心が如何に憤激するかを見よ！ 良心はその創造主に反抗して立ちあがり、不平を唱へる、汝われを欺けり！ と彼は泣いて叫ぶのだ。

吾れ汝を欺けりと言ふか、思慮なき者よ！ 誰か汝にこれを告げし？ 汝の靈は亡びたるか？ 汝は存在を失ひたるか？ おゝブルータスよ！ おゝ吾が子よ！ 汝生を終らんとして汝の崇高なる生命に一點の汚點を留むる勿れ。汝の希望と汝の光榮とを汝の屍と共にフリッブ原頭に棄て去ること勿れ。汝將さに徳行の酬いを受けんとする時に當りて何故に徳は虚しと言ふや？ 汝將さに死なんとするか、否、汝は生くべし、かくて吾が汝になせし凡ての誓約は履行されん。

性急な人類の不平を聞くものは、神は人間がその價値を持つ以前に報酬を與へねばならぬとか、神は人間の徳行に對して前以て酬いざるを得ないとか、言ひ度くなるであらう。おゝ！ 吾々をして先づ善ならしめよ、然らば吾々は幸福になるであらう。勝利をかち得る前に賞を要求する勿れ、仕事に先立つて賃銀を要求する勿れ。ブリュタルク曰く、吾が神聖なる競技の勝利者が榮冠を冠せられるのは、決して競技場に於いてではない、それは彼等が競技を終つてから後に行はれるのである、と。

若し靈魂が非物質的なものであるならば、それは肉體から生き残り得るであらう。そして若し靈魂が肉體から生き残るとすれば、神の正しさが立證されてゐるのである。靈魂の非物質性については、此の世に於ける悪人の勝利と善人の迫害といふこと以外に、他の證據が見出せないとしても、これだけでも私にそれを疑はしめることは出来ない。普遍的調和の中に於けるかくも忌まはしい一個の不調和音は謂はゞ私にその解決を促してゐるものといへよう、私は自分に向つて言ふ、吾々にとつては總てが生と共に終るのではない、萬事は死に至つてその秩序に歸るのである

と。私は猶實際には、人間は彼が所有してゐた凡ての感覺的のものが消滅してしまつた時に、何處にゐるのであるか、といふ厄介な質問に出會ふであらう。然してこの問題は、私が二種の實體を認めてしまへば、も早私にとつては何の難關でもない。感官に依つてのみ事物を認識してゐる私の肉體的生涯を通じて、これ等の感官に觸れないものが私に解らないといふことは餘りにも明白なことではないか。肉體と靈魂との結合が破れた場合には、私は一方が解消し他方が保存され得ると思ふのである。何故に一方の破滅が他方の破滅を惹き起さなければならぬであらうか？ 反對に全々異つた性質を具有してゐるからこそ、それ等はその結合中も一種の不安定状態にあつたのだ、そこでこの結合が終りを告げた場合には、それ等は何れもそれ自身の自然的状态に立ちかへる、即ち生命のある能動的實體は、死せる受動的實體を動かすために費してゐた凡ゆる力を回復するのである。嗚呼！ 私は私の惡徳によつて餘りにも感じてゐる、人間はこの世にある間は半分しか生きてゐないのだ、そして靈の生活は肉體の死と共に始めて開始されるのだ。

だがこの生活とは如何なるものか？ そしてまた靈とはその性質上不滅なものであるか？ 私の限りある理解力は限りなき如何なるものをも理解することが出来ない、所謂無限といふものを私は捕へることが出来ない。自分の理解することの出来ない事柄について、私は何を否定し何を肯定し得よう？ 如何なる推理をなし得よう？ 靈魂は秩序を維持するために充分肉體から生き残るといふことを私は信ずる、然しながらこれが靈魂の永久の存続を證するか何うかを誰が知らう？ しかもなほ私は、肉體が消耗しその諸部分の分裂によつて亡び行く有様を知つてゐる。だが思考的實在についてはかゝる破滅を認めることが出来ないのだ。かくて靈魂が如何にして死滅し得るかを全く想像し得ない私は、それは死滅しないのであると看做すのである。この推定が私

を慰めるものであり、且つ何等不合理なものを含まぬものである以上、何故私はこの推定を信頼することを恐れなければならないのであらうか？ 私は私の靈魂を感知する。私は感情と思惟とに依つてそれを認めてゐる。私はその本質が何であるかを知らないで、それが存在してゐることを知つてゐる。私は自分の持たない觀念について推理することは出来ない、私のよく知つてゐることは、自我の同一性は記憶によつてのみ伸展するといふことであり、實際に同一物であるためには、私が自分のそれまでの存在を記憶しなければならぬといふことである。ところで、私はまだ自分が感じてゐたこと、従つて自分が行つて来たことを記憶することなしには、死後に至つて、生前の自分が如何なるものであつたかを思ひ起すことが出来ないであらう。私はこの記憶が他日善人にとつての福祉となり、悪人にとつての責苦となることを信じて疑はない。現世に於いては幾多の烈しい情慾が内部の感情を吸収し、良心の苛責を騙してゐる。徳を行ふ際に引き起される屈従と不體裁とが徳行のあらゆる魅力を感銘するのを妨げるのである。然しながら、肉體と感覺とが吾々に與へるところの幻影から解脱した曉には、吾々は、至上の實在とそれに淵源する永遠の眞理とを冥想して歡喜する。この時こそ秩序の美が吾々の靈魂のあらゆる能力を打つてあらう、この時こそ吾々は、自分がなしたる行爲となすべかりし行爲とを比較することに専心してゐるであらう。良心の聲がその力と主權とを回復するのもこの時であり、自己満足から生れ出づる純粹な喜悅と、それまでの墮落に對する苦い悔恨とが、潤るることのない感情の力によつて、各人が自ら準備し來つた自己の運命を識別するのもこの時である。おゝ、吾が善き友よ、他に苦樂の源泉があるかどうかを問ふ勿れ、私はそれを知らないのだ。現世に於ける私を慰め、來世に希望をつながしめる爲めに、私が想像するものとしてはこれで充分なのである。私は善人が

酬いられるだらうとは決して言はない、何故ならば眞に善良な人が、自分の本性に従つて存在すること以上に他に何等かの幸福を期待するなどといふことがあり得るだらうか？ 然しながら、彼等は幸福であらうと私は言ふ。彼等をして感覺的存在たらしめた彼等の創造主、正義の唯一の創造主は、蓋し彼等を苦しめるためには造らなかつたからである、またこの地上に於いてその自由を濫用しなかつた彼等は、自己の過去によつて豫定の目的地を踏み外さなかつたからである。とは言へ彼等は現世に於いて苦しんだのだ。そこで來世に於いては償はれるであらう。この感情は人間の價値に根ざしてゐるといふよりは、むしろ聖なる神と不可分の關係にあるらしい善の意想に根を据えてゐるのである。私はたゞ、秩序の法則は遵奉されてをり、神はそれ自らに於いて不易であると推定するに過ぎないのだ。(註二五)

(註二五) 吾等がために非ずして、吾等がために非ずして、主よ、

おん卿の名のために、おん卿みづからの譽れのために、

おん神よ！ 吾等を離らせ給へ！

(聖詩、一一五)

悪人の苛責が永久に續くかどうかをも私に問ふこと勿れ、また創造主の仁慈は彼等に永久に苦しむことを命じ得るかどうかをも問ふ勿れ、私はそれをやはり知らないのだ、また無用な問題を解かうとするやうな無益な好奇心を持たないのだ。悪人達が何うならうと私に何の關するところがあるらう？ 彼等の運命については私は殆んど興味を起ささない。とは言へ、彼等が永劫の苛責を宣告されると信ずるのは私には苦痛である。若し至上の正義が復讐をするものとすれば、此の世にあるうちからそれを行ふ。おん、世の人よ！ 諸君と諸君の過失こそ神の代理者となつてゐるのだ。神は、諸君の犯した罪を罰するに、諸君の造り出した不幸を以つてするのである。羨望、

貪慾、野心等に蝕ばまれた諸君の飽くなき心の裡に於いてこそ、諸君の虚榮の中に宿る復讐慾が諸君の大罪を罰するのだ。何んで來世に地獄を求め行く必要があらう？ 現世に於いて地獄は既に悪人達の心の中に存してゐるのだ。

吾々のあだな要求の盡くるところ、吾々の愚かな慾望の止むところ、吾々の慾情、吾々の罪惡も亦止まざるを得ない。純粹な精神にとつて果して如何なる邪惡が受入れられるであらう？ 何ものをも要求してゐない彼等が何うして惡心を持ち得よう？ 若し、吾々の卑しい感官から解脱した曉に於いて、彼等の唯一の幸福が實在の觀照の内に存してゐるとするならば、彼等はたゞ善のみを意志し得るのであらう。そしてまた何人と雖も惡人たることを止めた者が何うして不幸であり得ようか？ これについては何等の結論を得ようと努力しなかつたけれど、結局これが私の信ぜんとするに至つた結論である。おん、善仁なる神よ、おん卿の命令が譬へ如何なるものであらうとも私はそれを崇拜する。若しおん卿が惡人に永劫の所罰を加へるとすれば、私はおん卿の正義の前に私の弱い理性を否定する、だが若しこれ等不幸なる人々の苛責が纏ては消滅すべきものであるとすれば、私はおん卿を讚美する。惡人は私の兄弟ではないか？ 私は幾度誘惑されて彼の如くならうとしたことだらう！ 彼をその悲惨から脱せしめよ、然らば彼は同時にそれに伴ふ惡心を棄てるのだ。彼をして私と同様に幸福ならしめよ、彼の幸福は私の嫉妬を刺戟するどころか、私自身の幸福を増すに過ぎないであらう。

かくて、神の事業の中に神を觀照し、又それによつて、私の知らねばならぬ神の屬性を研究した私は、この廣大無邊な存在について私が抱いたところの觀念、最初は不完全であり有限的なものであつたその觀念を、私は次第に押し廣げ、次第に豊富にするに至つたのである。だが若しこ

の觀念がより尊貴な、より偉大なるものになつてゐたとすれば、それと同時にこの觀念は人間の理性にそれだけ不釣合ひになつてゐたのである。私が精神に於いて永劫の光明に近づくにつれて、その光輝は次第に私の眼を醒まし、私を眩惑せしめ、遂に私をして、この光明を想像するためにも感じし得るものでもない。この世界を統べる至上の靈的實體はも早この世界そのものではない。私は、認めがたきその本質を認めようとして私の精神を徒らに押しあげ、徒らに疲らしてゐるのである。生物體を統べてゐるところの生命ある能動的實在に、生命と活動力とを與へてゐるものは、即ちこれであるとき考へる時、そして私の靈魂は精神的なものであり、神は一個の精神であると言ふのを聞く時、私はこの聖體に對する過少評價に憤激する。恰も神と私の靈魂とが同じ性質のものであるかの如くではないか！ 恰も神が、絶對唯一の存在、即ち、眞に能動的な、それ自ら感知し、思考し、意志するところの唯一の存在、そして、吾々がそれから思想、感情、活動力、意志、自由、及び存在そのものを得てゐるところの、その唯一の存在、神が恰もさうした存在にあらざるものの如くではないか！ 神が吾々を自由ならしめんと欲するが故にのみ、吾々は自由なのである、そして説明の出来ないその本體は、吾々の靈魂が吾々の肉體に對するが如き關係に於いて、吾々の靈魂に對してゐるのである。神は物質、肉體、精神、世界を創造したのであるかどうか、私はそれについては何も知らない。創世の觀念は私を當惑させる、それは私の能力を越えてゐるのだ。私はこの問題については自分に考へ得られるだけのことを信じてゐる。だが、私は、神が此の宇宙及び存在する凡てのものを形成したことは知つてゐる、神が總てを造り、總てに秩序を與へたことは知つてゐる。神は勿論永遠である、だが私の精神は永遠といふ觀念を

把握し得るであらうか？ 何故私は觀念のない言葉で自らを欺かなければならぬのか？ 私に解つてゐることは、神は萬物より以前に存在してゐるといふことであり、萬物が存続する限り存在するであらうといふことであり、そして、萬物がその存在を終るべきものであるとすれば、神はその後に於いてさへなほ存在するであらうといふことである。私の理解し得ない一個の實在が他の諸實在に生存を與へるといふのであるから、それは誠に曖昧模糊として難解ならざるを得ない。然しながら、實在と虚無とが相互に轉換し合ふといふことは、解り切つた矛盾であり、明白な虚妄である。

神は聰明である、だが神は如何にして聰明なのであるか？ 人間は推理を行ふ時に聰明である、然るに至上の明智は推理するを要しない。神にとつては前提もなければ結論もない、命題さへもないのだ。至上の明智は純粹に直感的である、それは存在する凡てのものと存在すべき凡てのものを同じやうに見るのである。神にとつてはあらゆる眞理がたゞ一つの觀念に過ぎない、同様に、あらゆる場所がたゞ一つの點であり、あらゆる時がたゞ一つの瞬間である。人間の力は手段を通じて働く、神の力は自ら働く。神は意志するが故に能ふ、神の意志は神の力となるのだ。神は善である、如何なるものと雖もこれ程明白なものはない。ところで人間に於ける愛は同類に對する愛である、然るに神の愛は秩序に對する愛である。蓋し神が存在するものを維持し、各部分を全體に結びつけるのは秩序によつてだからである。神は正義である、これは私の確信してゐるところだ、それは神の善の結果に過ぎない。人類の不正は人類の所産であつて神の所産ではない。哲學者達の眼に神を否定するものと映じてゐる精神的無秩序は、私の眼には神の存在を明示するばかりである。つぎに人間の正義は人の所有するものを各々その人に歸すことである。然るに神の

正義は神が與へたるものについて各々の存在にその報告を求めることである。私はこれ等の屬性については何等の絶對的觀念を持つてゐないのであるが、若し私がさうした屬性を順次に發見するに至つたとすれば、それは避くべからざる結論によつたものであり、私の理性の善用によつたものである。然しながら私はそれ等を理解することなしに肯定してゐるのである、従つて根本に於いては、それは何もかも肯定することではないのである。神とはかゝるものである、私はそれを感じる、私はそれを經驗してゐる、などと私が言つても無益なのだ。私はさう言ふことによつて神が如何にしてかゝるものであり得るのかを少しでもよく理解する譯ではないのである。

結局、私が神の永劫の本體を凝視しようと努力すればするほど、私にはそれが益々解らなくなるのである。然し神は存在する、私にはそれ充分なのだ。神が解らなくなればなるほど、私は神を崇拜する。私は跪伏して言ふのである、實在中の實在よ、おん卿在るが故に我れ存す。絶えずおん卿の上に吾が思ひを潜むるは、吾が存在の源に目覺ることなり。吾が理性の最上の用途はおん卿の前に拜跪することなり、我れおん卿の偉大さに壓倒せられるを覺ゆ、そは吾が魂の歡喜なり、そは吾が弱さの魅力なり、と。

かくの如く、感覺的對象に對する認識と、私の本性の光明に従つて私にそれ等對象の原因を判斷せしめるところの内的感情に對する認識とによつて、私が識らずしてすますことの出来ない若干の主要な眞理を演繹し終つた以上、今や私に残された問題は、私を此の位置に据えた者の意思に従つて、私は自分の行動のために如何なる格律をこゝから導き出さねばならないか、地上に於ける私の目的を果すために、私は如何なる規則を適用しなければならぬか、それを探求するこ

とである。この際も依然として自分の方法に従つて行く私は、さうした規則を高遠な哲學の原理からは描き出さないで、それを私自身の心の奥底に發見する、それは消え去ることのない文字を以つて自然がそこに書きつけてゐるのである。私は自分が爲さうと思ふことについては、ただこの自分のみ相談すべきなのである、私が正しいと感ずるものは凡て正しいのだ、私が悪いと感ずるものは凡て悪いのだ、即ち、審判者の中の審判者は良心なのだ、吾々が煩瑣な議論に訴へるのは、吾々が良心と争つてゐる場合に限るではないか。あらゆる配慮のうちで第一の配慮は自己そのものに對する配慮といふことである、然しながら、他人を犠牲にして吾々の幸福を求めるのは、吾々が悪事をなすことであると、内心の聲は幾度吾々に叫ぶことであらう！吾々は自然の力に従つてゐるつもりである、然るに吾々は自然に抵抗してゐるのだ。吾々は、自然が吾々の五感に向つて言ふことには聽従しながら、自然が吾々の衷心に向つて命ずることを忽せにしてゐるのである。即ち能動的實在が屈服し、受動的實在が命令してゐるのだ。良心は魂の聲であり、慾情は肉體の聲である、この二つの聲が屢々口論し合ふのが驚くべきことであらうか？またさうした場合に何れの聲に従はねばならないか？理性は餘りにも屢々吾々を欺く、吾々は理性を拒否すべき權利をありあまるほど得てゐるに過ぎないのだ、ところが良心は決して欺かない、良心こそ眞に人間の指導者である、良心の靈魂に於ける、猶本能の肉體に於けるが如き關係にあるのだ(註二六)。良心に従ふものは自然に従ふものであつて、踏み迷ひはせぬかといふ心配がない。此の點は非常に重大である、と私の恩人は、その時私が彼の語を遮らうとするのを見て語を繼いで言つた、これを明らかにするために、も少し私がこの問題に止まるのを我慢して呉れ給へ。

(註二六) 自分に説明のつくものしか認めない近代哲學は、何等經驗的知識を持たぬ動物を成る目的に導くらしいこの本能と稱する不可解な能力を、認めまいとしてゐる。吾が賢明なる哲學者の一人の説によれば、本能とは反省の私的習慣、しかも反省することによつて習得した習慣に過ぎないさうである。ところが、この進歩を説明する彼等の流儀に従へば、子供は大人よりも一層反省すると結論せざるを得なくなる。これは面倒でも調べてみるだけの値打のある不思議な逆説だ。だがこゝではそんな論議に這入らずに、私は疑問を提出する、私の犬が食ひもしない土籠に戦ひを挑むその熱心や、時としては數時間もぶつとほして土籠を待伏せしてゐるその忍耐や、更に土籠が現はれるや否やそれを捕へて、先づ地上に投げ出し、それからそれを殺して放棄してしまふその巧妙さなどに、如何なる名稱を附すべきであるか、この場合何人もこの犬にかうした癖を習はしてゐないし、其處に土籠があるといふことを教へてゐないのだ。更に私は質問しよう、そしてこれは一層重要なことである、何故だらう、私が始めてその同じ犬を威かした時、彼は地上に仰向けに身を投げ出し、足をちぢこめて、私の心を利けるに最も適したやうな哀願的な様子をするのだ、それにも構はず、私がさうしてゐる彼を打つたとしても、彼はやはりその姿勢を保つてゐるのだ。何！ まだ生れたばかりで、ほんの小犬に過ぎない私の犬が、既に道徳的觀念を習得してゐたといふのか？ 彼が慈悲や寛大などといふ意味を知つてゐたのか？ 如何なる習得的習能によつて、彼はかくも私のなすまゝに身を任せて、私の怒りを和らげようとしてゐたといふのか？ 世間の犬はすべてこれと同じ場合には、殆んどこれと同じことをするのだ、そこで私はいま誰でも自分で確めることの出来ることを言つてゐるに過ぎないのだ。本能を極めて嘲笑的に否定する哲學者達には、彼等が吾々に習得せしめてゐるところの感覺と知識と、この二つの單なる作用といふことによつて、この事實を何うか立派に説明して貰ひ度い、物の解る凡ての人に満足行くやうにこれを説明して貰ひ度いのだ、その時は私はもう何も文句を言はないだらう、そしてもう二度と本能といふことを口にしないだらう。

吾々の行爲の唯一の道徳性は、それに關して吾々が自ら行ふところの判断の内に存してゐる。若し善は善であるといふことが眞實ならば、それは吾々の事業に於けると同様、吾々の心の底に於いても善でなければならぬ。そこで正義の第一の報酬は、それを實行してゐると感ずることである。若しも道徳的善が吾々の本性に適つてゐるものとすれば、人間は、彼が善である程度に

應じてのみ、心身が健康であり得るのである。若しそれが吾々の本性に適つてゐないならば、人間は本質的に悪人となる筈であるから、彼は自ら本性を改悪することなしに、悪人たることを止め得ないであらう、従つて彼に於いては善とは自然に反する罪惡たるに過ぎない。狼がその餌を食ふやうに造られてゐる如く、人間がその同胞を害するやうに造られてゐる時には、人道的な人間は憐みぶかい狼と同じく墮落した動物となるであらう、そしてたゞ徳行のみが吾々の悔恨を誘起するであらう。

吾々自身の内部に立ちかへらうではないか、おゝ、吾が若き友よ！ 凡ての個人的興味は先づ置いて、吾々の性向が吾々を何處に導いて行くかを調べてみようではないか。最も吾々の心をうつものは如何なる光景であらうか、他人の苦痛であらうか、それとも幸福であらうか？ 吾々にとつて最も快く行へるもの、そしてそれを行つて後に最も満足な印象の残るものは何か、親切な行ひか、それとも意地の悪い行ひか？ 演劇を見るとき諸君は如何なる人物に心を惹かれるか？ 大罪をみて諸君は喜びを感ずるか？ その罪人が罰せられるのをみて諸君は涙を流すか？ 自己の利益に關係がなければ、吾々にとつては何事も可もなく不可もない、と世人は言ふ。ところが全くその反對に、友情と人情との温かさは不幸のまつた中にある吾々を慰めるのである。また若し吾々が喜びを願つべき友を持たなかつたならば、吾々は歡喜の絶頂に於いてさへも、餘りにも孤獨であり、餘りにも悲惨であるだらう。若し人間の心の内に何等の道徳心がないとするならば、それでは何處から、英雄的行爲に對するあの熱烈な讚美が偉人に對するあの恍惚たる愛情が人間の心に起つて來るのであるか？ 徳行に對するこの熱意は吾々の利己心と何の關係があるといふのか？ 何故に私は勝ち誇れるシーザーたらんよりは、むしろ自分の臟腑を掻き切つたカー

ト一（昔行によつて品性を陶冶したこと有名な古代羅馬の司法官、紀元前三七一—二四二年死す）たらんと欲するのであるか？ 吾々の心からこの美に對する愛情を取り去つて見給へ、然らば君はこの人生の唯一の魅力を奪ふのである。下劣な慾情を以て、かうした微妙な感情をその狭隘な魂の中に窒息させてしまつた人、自分のうちのみ自己を集中するがために、遂に自分自身しか愛さぬやうな極端にまで來てゐる人は、も早感激といふものを持たない。彼の心は凍りはてて、も早歡喜に躍動することがない、何等かの懐かしい優情にその眼を潤ませることも絶對にない、彼はも早何ものにも悦ばないのだ。この不幸な人はも早感じないのだ、或ひはも早生活しないのだ。彼は既に死んでゐるのである。

然し、この地上に悪人がどれだけあるやうとも、自己の利益以外には、如何なる正義にも如何なる善にも凡て無感覺になつてゐるやうな屍の如き魂の持主は、稀有である。人が不正を悦ぶのは、それによつて利益を得てゐる間だけである。これ以外のすべての場合には、無辜の民が保護されることを人は願ふのである。街の中や路上に於いて何等かの暴力的不正行爲を見んか、吾々の心の底から突如としてある忿怒と憤激の情が湧きあがる、そして吾々をその壓迫者の擁護に驅り立てる。ところが一層強いある義務がその吾々を牽きとめる、法律は罪なき者を保護する權利を吾々から奪つてゐるのである。これに反して、若し何等かの慈悲又は寛容の行爲が吾々の眼に映じた場合には、それは何たる讚美の情、何たる愛敬の情を吾々に鼓吹することであらう！かうしたことなら私もしたかつた、と誰か吐かないものがあらう？ 二千年前の人間が正しかつたとか正しくなかつたとかいふことは、確かに吾々にとつてさして重大なことではない、けれども吾々は恰もそれ等がすべて現代に起つたことでもあるかのやうに、全く同じ興味を以つて古代史に感動

するのである。カチリナ（古代ローマの陰謀家、紀元前一〇九—六一）の罪が私にとつて何であるか？ 私は彼の犠牲になるのを恐れるだらうか？ それでは何故私は、彼が現代人ででもあるかのやうに、同じ恐怖を彼に對して抱くのであらうか？ 吾々が悪人を憎惡するのは、單に彼等が吾々を害するからではなくて、實に彼等が悪人であるといふ理由からなのだ。吾々は實に自分が幸福であることを願ふばかりではなく、他人の幸福をも望んでゐるのである。そしてその幸福が吾々の幸福を少しも犠牲にしない場合には、それは吾々の幸福を増大してゐるのである。要するに人はその欲すると否とに拘らず、不幸なる者を憐むのである。彼等の苦惱をみる時は、人は自らそれに苦しむのである。極悪の敗徳者と雖もこの傾向を全然失ふことは出来ないであらう、これは屢々彼等を自家撞着に陥らしめてゐるものだ。旅人の衣服を剥ぐ追ひ剥きへも猶裸の貧乏人には衣服を着せてやる、また最も残忍な殺人者も氣息の絶えんとする人を屢々援けるのである。

世人は悔悟の聲といふことを謂ふ、即ちその聲は隠れたる罪を私に罰して、往々これを曝露せしむるといふのである。あゝ！ 誰かこの執拗な聲を聞かなかつたものがあらう？ 人は經驗によつて語るのだ、吾々はかくの如き大きな苦惱を與へるこの暴虐な感情を押へつけても終ひたないのだ。自然に従へば、然らば吾々は如何なる優情を以て自然が君臨してゐるかを識るであらう、一度自然に従つてからは、自己を保證するところに如何なる悦びが存するものであるかを識るであらう。悪人は自分を恐れ、自分から逃避する、彼は自己そのものの外に逸脱することによつて氣をまぎらすのである、彼はその不安な眼を以て自己の周圍を物色し、氣晴しの對象を求め、辛辣な皮肉なしには、侮辱的な嘲弄なしには、彼は常に慘めであつたまれないのだ、嘲笑が彼の唯一の快樂なのである。これに反して、晴朗な正義の士は内面的である。彼の笑ひは悪心からで

はなくて、喜悅からである。この喜悅の源を彼は自己そのものの内に持つてゐるのだ。彼は獨りゐても友人達の中にあつても同じやうに愉快なのだ。彼は自己の満足といふものを周囲の人々から得て来るのではない、反對に彼はさうした人々にそれを傳へるのである。

眼を全世界の國民の上に投じて、その歴史をひとわり調べてみ給へ。數多の怪奇な、非人道的な宗教の中に、又驚くべき多種多様な風習と氣風との中に、諸君は到るところ同じ正義と誠實との觀念を發見するであらう、到るところ同じ道徳の原理を、到るところ同じ善惡の意相を發見するであらう。古代の偶像教は、今日なら背徳者として處罰さるべき忌まはしき神々を造り出した。最高の幸福を表はす畫面に、犯すべき犯罪や充たすべき情慾のみを提供するやうな神々を造り出した。だが惡徳は、神聖な權威にその身を武裝して、神々の住居から降つて來ても無益であつた。道徳本能は人間の心からこれを驅逐したではないか。ジュピテの遊蕩を祝賀しながら、人はクセノクラート(希臘の哲學者、紀元前四〇三—三一四)の禁慾を尊敬してゐたのだ。純潔なりユクレ(ヘセタス・タルカンに凌辱されたので自殺したといふ古代羅馬の婦人)が淫亂なヴキナスを崇拜してゐたのだ。かの勇敢な羅馬人が恐怖の神に身を捧げたのだ、彼はその父を不具者にした神に祈願したのだ、そしてその父の手に抱かれて不平も言はずに死んで行つたのだ。最も輕蔑すべき神々が最も偉大なる人々によつて俸仕されてゐたのである。神々の聲よりも遙かに力づよい自然の神聖な聲が、この地上に於いて尊敬を贏ち得たのである、そして罪惡と罪人とは、これをとともに天上界に閉ぢ籠めてゐたやうであつた。

故に吾々の魂の底には正義と道徳とに關する天賦の一原理が存在してゐるのである。吾々自身に固有な格律が何うあらうとも、吾々はこれによつて自他の行爲を善若くは惡なりと判定する、

私が良心なる名を冠するものは即ちこの原理である。

然しこの言葉に對しては四方八方から所謂賢人達の抗議の叫び聲があげられるのを私は聞いてゐる。子供じみた誤謬だ、教育の偏見だ！ と彼等は異口同音に叫ぶ。人間の精神には經驗によつて導入された事柄の外には何物もない、従つて吾々は習得觀念に依るに非ざれば何事をも判斷し得ない、といふのだ。彼等は更に一步を進めてゐる、即ちかうしたあらゆる國民に普遍的な、明白な一致ををさへ、彼等は敢へて否定する、そして人類の判斷に於けるこの顯著な符合に反對して、たゞ彼等のみ知られてゐるやうな曖昧な例證を歴史の暗闇の中に探し出さうとする、恰も自然の全傾向が唯だ一國民の墮落によつて破壊されたかのやうに、又、何か變種がありさへすれば、忽ちにして種かも早存在を失つてしまつたかのやうに。だが、懷疑家モンテエニユには、正義の觀念に反對する何等かの風習を世界の片隅に探し出さうとするあの苦心が、何の役に立つといふのか？(註二七) 最も有名な著述家達を信ずることを拒みながら、最も信ずることの出來ない旅行者達を信頼して、それが彼に何の役に立つといふのか？ 吾々の知らない地方的原因によつて發生したある不確實な奇怪な習慣が、地球上のあらゆる國民の一致に立脚した、他のすべての點では異つてゐながら、唯この一點に於いては一致してゐるところのこの一般的結論を、破るだらうか？ おもモンテエニユよ、眞實と正直とを自慢にしてゐる君だ、若し哲學者でも誠實であり得るなら、どうかさうあつてくれ。そしてこの地球上に、自己の誓ひを守り、慈悲深く、親切で、寛大であることが罪とされるやうな國、善人が輕蔑され、反逆者が尊敬されるやうな國が存在してゐるか何うか、私に話して貰ひ度い。

(註二七) 第一卷二十二章を通過せよ、そこにはこんな文句がある、良心の法則は、自然に生ずると言はれてゐるが、實

は習慣から生れるのである、人は何れも自己の周囲に於いて受入れられ承認された意見なり風習なりを内心畏敬してゐるので、良心の苛責を伴はずにはそれを脱することも出来ないし、それかと云つて人の實績がなければそれを實施することも出来ないのである。』

人は何れも自己の利益のために公共の利益に協力するのであると、彼等は言ふ。だが、それでは、正義の士が自己の不利をも顧みず公益につくのは何に起因するのであるか？ 自己の利益のために誰が死に赴くか？ 勿論如何なる人と雖も自己の幸福の爲めにのみ働く、だが、若し精神的幸福といふものがあつて、これを考量しなければならぬとすれば、彼等は利己心そのものによつてはたゞ悪人の行爲のみを説明してゐるに過ぎないであらう。思ふに、彼等はむしろそれ以上は少しも説明しようと思はないのであらう。道徳的行爲の説明に當惑する哲學こそ餘りにも恐るべき哲學であらう。かゝる哲學では、諸君は道徳的行爲を下劣な意圖とよくない動機とに造りかへてしまふより外には、自分の肩をおろすことも出来ないであらう、そこでは、諸君はソクライトを罵り、レギユリユス（古代ローマ執政官、最も純潔な人物の典型と言はれてゐる）を誇らざるを得ないであらう。若しかゝる教義が吾々の間に一寸でも根を張るならば、自然の聲は理性の聲と共に、これに反對して幾度でも蹶起するであらう、そしてそれらの最後の一つに對しても、それが誠實であるなどといふ遁口上を決して許しては置かないであらう。

私はこゝで、君にも私にも理解の出来ない形而上學的論議、根本的には何の結論をも導き得ない論議に這入るつもりはない。私は既に君にことはつて置いた通り、君と哲學論を交はさうとするのではなくて、君が自ら自分の心を考へてみるお手傳ひをしようといふのである。よしんば世の凡ての哲學者達が、私が間違つてゐるといふことを論證しようとも、若し君が私に道理がある

と感ずるならば、私はもうそれだけで充分満足するのである。

そのためには、たゞ君が吾々の習得觀念を吾々の自然的感情から區別するやうに導きさへすれば、それでいゝのだ。何故ならば吾々は認識するよりも前に必ず感ずるからである。そして、吾々は吾々の幸福を欲し、吾々の不幸を迴避することを學ぶのではなくて、さうした自然の意志を身につけてゐるのであるが、丁度それと同じやうに、善に對する愛と惡に對する憎惡とは、吾々にとつては、我々自身に對する愛と共に自然なものなのである。良心の行爲は判断から來てゐるのではなくて、感情から來てゐるのだ。假に吾々の凡ての觀念が外部から來るものとしても、それ等を評價する感情は吾々の内に存在してゐるのだ、そして、吾々が、吾々の間にあるものの適不適や、吾々が受入るべき、又は迴避すべき事柄を認識するのも一にこの感情によるのである。

吾々にとつては存在することは感ずることである。吾々の感受性は言ふまでもなく吾々の智性に先行してゐる、従つて吾々は觀念以前に感情を持つてゐたのだ（註二八）。よし吾々の存在の原因が如何なるものであらうとも、それは吾々に、吾々の本性に適した感情を賦與することに於いて、吾々の保存を準備してゐたのだ。少くもこれ等の感情が生來固有のものであることを、人は否定し得ないであらう。個人に關する限り、それ等の感情は、自己に對する愛、苦痛に對する怖れ、死の恐怖、幸福への願望である。だが若しも、これは誰も疑はぬところだが、人間が本質的に社會的なもの、少くも社會的になる筈のものであるならば、別な感情、即ちその種に關係のある天賦の感情によつてのみ、さうであり得るのである。何故ならば、人間は肉體的要求のみ追ふてゐるならば、集合する代りに必らず分散してしまふ筈だからである。さて、かくの如く自己その

ものと、自分の同胞とに對する二重の關係によつて形成された精神的體系から、良心の衝動が生れてゐる。善を知ること、善を愛することではない。人間は善についての天賦の知識を持たないのだ。だが彼の理性が、それを彼に知らしめるや否や、彼の良心は彼をしてそれを愛せしめるのである。天賦のものはこの感情なのだ。

(註二八) 或る點に於いて觀念は感情であり感情は觀念である。この兩語は、吾々を占めてゐる全知覺に當面する、その知覺の對象にも、その對象に影響されてゐる吾々そのものにも同様である。この影響に適する名稱を決するものは、その順序だけである。吾々が最初對象に專念してゐて、吾々自身のこととは反省によつて始めて考へるやうな場合には、それは觀念である。反對に、受取つた印象が吾々の最初の注意を刺戟し、この注意の原因をなす對象の方を反省によつて始めて考へる時には、それは感情である。

そこで、吾が友よ、私は、理性そのものから獨立した良心の直接的な原理を、吾々の本性の當然の結果といふことで説明することが不可能だとは考へない。そしてかりに不可能だとしても、なほその必要があるのではなからうか、といふのは、全人類によつて承認されたこの原理を否認する人々もかゝる原理が存在しないといふことを證明したのではなくて、唯さう主張してゐるだけなのだ。そこで吾々がそれは存在すると主張する時は、吾々は彼等と全く同じ根據の上に立つてゐるのである。そしてなほそれ以上吾々は内心の立證者を、即ち自己のために證言する良心の聲を持つてゐるのだ。若しも判断の最初の光明が吾々の眼を眩まし、最初の間對象を吾々の眼に混亂せしめるならば、吾々の弱い眼が強くなつて再び開くのを待たうではないか、さうすれば吾々は間もなく理性の光明によつてこれ等の對象を、既に吾々に對して自然が最初になして呉れたと同じやうに、再び眺めることが出来るだらう。或ひはむしろもつと單純に、もつと謙讓にしてゐようではないか、吾々自身の内に發見される最初の感情に自制してゐようではないか、研究と

いふことが吾々を迷路に導かない限り、吾々を連れ戻して行くところは、何と云つても常にそれ等の感情なのである。

良心！ 良心！ 神聖な本能よ、不滅な天の聲よ、無智にして限られたる、しかも總明にして自由なる一實在の確固たる指導者よ、善惡について誤つことなき審判者よ、人間をして神に似せしめたる者よ、そは人間の優れたる本性を造り、人間の行爲に道德性を賦與したる汝である。汝なかりせば、私は自己の内に、禽獸の上に擢んでる何ものをも發見し得ないのだ、そこにはたゞ統一のない悟性と原則のない理性のために誤謬から誤謬へと私をさ迷はしめる悲しむべき特權があるのみなのだ。

幸なるかな、吾々はいまや恐るべきあの哲學のわなから完全に脱出してゐるのだ。吾々は學者にならずとも人間になり得るのである。道德の研究のために吾々の生涯を浪費することを免かれた吾々は、いまやそれ程骨を折らずに、この宏大無邊な人類思想の迷宮の中に一層確實な案内者を持つたのである。けれどもこの案内者が存在するといふだけでは充分ではない、彼を認めて、彼に従ふことを知らねばならないのだ。若し彼が凡ての人の心に話しかけてゐるとすれば、ではそれを聴き容れる人のかくも少いのは何故であらうか？ あゝ！ それこそは、案内者が自然の言葉を以て吾々に語るからであり、吾々は色々なことにかまけてそれを忘れてしまふからである。俗世間と喧囂とは良心を驚かしてしまふのだ。良心がその中から生れるのだと言はれてゐる慣習は、良心の最も慘酷な敵である。良心はそれ等を逃避するか或ひは沈黙する。それ等の喧しい聲が良心の聲を壓し、それを聞きとれなくしてしまふのだ。狂信は敢て良心の聲色を使ひ、良心の名前で罪惡を迫る。遂に良心は虐待に耐えかねて失望してしまふ。良心はも早吾々に話しかけな

いし、答へもしない。良心がかくの如く長い間輕蔑されて來た場合には、良心を呼び戻すことは、それを追放するのが困難であつたのと同じに困難である。

私は自分の研究の間に、自分の内に感ずるこの冷たさには幾度厭になつたことであらう！ 悲痛と倦怠とが私の最期の冥想に毒を注ぎ込んで、さうした冥想を私にとつて幾度耐えがたきものとしたことであらう！ 私のすさみはてた心は眞理愛に對して、たゞ無氣力な生ぬるい熱情しか與へ得なかつたのである。私は自分に向つて言つた、何故私はありもしないものを求めて苦しまねばならないのか？ 精神的幸福とは一場の夢に過ぎない、官能の快樂以外何の幸福もありはしないのだ、と。あゝ！ 人が一度精神的快樂の嗜好を失ふ時、それを取り戻すのが如何に困難なことであらう！ 若しその生涯の間に自ら満足することの出来るやうな、そして生き甲斐を感じ得るやうな思ひ出を全く持たないほど不幸な人間があつたとしたならば、その人は自らを識ることが永久に出来ないであらう、そして、自己の本性に合ふ何等の善をも感知し得ない彼は、否應なしに悪人として残るの外はなく、従つて永久に不幸であるだらう。然しながら君は、善をなさうとする欲望に會つて心をとらはれたことのないほど墮落した人が、唯一人でもこの地球上にあると思ふか？ この欲望は、如何なる場合にもそれに抗することが出来ないほど自然なものであり、快いものなのである。そして一たびそれが與へて呉れた快樂の思ひ出は、それを絶えず吾々の記憶の中に甦らすに充分である。不幸にしてそれは最初は満足させにくいものである。人はその心のこの傾向に従ふことを拒む口實は幾程でもあるものだ、誤つた用心がこの心を人間的自我の境界内に極限する、それ等の境界を突破するには眞に多くの努力を要するのである。善行の悦びは、善行の報酬である、そしてこの報酬は、それを受けるだけの値打を持つた後に於いて

のみ得られるのである。如何なるものと雖も徳行ほど甘美なものはない、だが、かゝるものとしての徳行を見出すためには、それを試みなければならぬのだ。神話にあるプロテ（ギリシヤ神話、意のまゝに姿を變へる海神）のやうに、徳は吾々が彼の女を抱擁しようとする時、最初の内は幾多の怖ろしい姿となる、そして彼の女を放すまいとする人々にのみ、始めてその眞實の姿を見せるのである。

公益を主張する自然感情と、自我のみを主張する理性とによつて絶えず打挫かれてゐた私は、若しも新しい光明に心を照らされなかつたならば、また若しも私の意見を決定して呉れた眞理が、それ以上に私の行爲をも決定して、私と自我とを一致せしめて呉れなかつたならば、善をなしたり悪をなしたりするこの交錯状態、常に自分自身に矛盾するこの永久の交錯状態の中に、私は一生涯をたゞよひ通したことであらう。人は徒らに理性だけで徳を打建てようとしてゐるが、それで如何に鞏固な土臺を徳に與へ得るであらうか？ 徳は秩序の愛であると人々は言ふ。だが、それではこの愛は私の中にある幸福に對する愛の上へ持ち込むことが出来るか、又さうすべき筈のものか？ 何れをとるのか、それに充分な、明白な理由を聞かせて貰ひたい。彼等の所謂原理なるものの底を割つてみれば結局は單なる言葉の遊戲に過ぎない。蓋し私も亦或る別な解釋をこつて、悪徳は秩序に對する愛であると言へるからである。感情と智性のあるところには何處にでも何等かの精神的秩序があるのだ。それが異つてゐる點は、善人は凡てのものに對する都合によつて自らを秩序立てるが、悪人は自分に對する都合によつて凡てのものを秩序立てるといふことである。後者は自ら凡てのものを中心となるが、前者は、後者の半徑を測つてその周圍に止まつてゐるのである。そこで彼は、神がなすところの共通の中心に對する都合と、その被造物がなすところ

ころの凡ての同心圓に對する都合とによつて秩序立てられてゐる。若し神が存在しないならば、悪人のみが尤もな考へをしてゐるのであつて、善人は所詮馬鹿に過ぎないのである。

あゝ、吾が子よ、人は、空虚な人類の思想をあさりつくし、情慾の苦みを味はひつくしてから、遂に智慧の道が、此の世の勞苦の報酬が、それまで絶望してゐた幸福の源泉が手近に在るのを見付けるとき、どんな重荷ををろされたやうな思ひがすることであらう、君がそれを感じる日を見つめてやまないのだ！ 人間の不正義に依つて私の心から殆んど消し去られてゐた自然法の一切の義務が、永遠の正義の名に於いて、私の心に再び刻みつけられるのだ、そしてこの正義が私にそれ等の義務を課し、私がそれを遂行するのを見守つてゐるのである。私が自分のうちに感ずるものも早神の道具とその働きのみである。私のうちに於いて偉大なる神は善を意志して善を行ひ、その意志に私の意志を協力せしめ、且つ私の自由を善用して、私の善を行ふのであらう。私は彼が設けた秩序に従ふ、何日かは私自らこの秩序を楽しみ、このうちに私の幸福を見出すことは確實なのだ、何故なれば、凡てのものが善であるやうな或る體制の中に自分が秩序を得てゐることを感ずる以上に甘美な幸福が何かあり得るだらうか？ 苦痛の餌食となつても私は、それは過ぎ去るものであり、私のものならぬ肉體から生ずるものであると考へて、その苦痛をぢつと堪え忍ぶのである。私は私かに善行をして、それが見守られてゐることを知つてゐる。そして私はこの世に於ける自分の行爲によつて來世の保證を得るのである。非道なことに苦しむ時は、私はかう自分に向つて言ふ、凡てを統へ給ふ正しき神は、私のために充分この酬ひをされるであらう、私の肉體上の欠乏と生活の貧困はそれだけ死の觀念を堪え易いものにするのだ、それはすべてのものを放棄すべき時に、斷ちきるべき絆がそれだけ少くなることであらうと。

何故私の魂は、私の官感に従つてゐるのであらうか、何故自分を虐使し苦しめるこの肉體に縛られてゐるのであらうか？ 私は少しも知らない、私は神の決定に參與してゐるであらうか？

だが私は輕卒なことをせず謙遜な臆測を試みることは出来る。私は獨りかういふのである、若しも人間の精神が自由のままであり、純潔のままであつたならば、彼は秩序の確立されてゐるのを認めてゐる筈だし、又それを紊することに毫末の利益を持たない筈であるが、彼はさうした秩序を愛し、これに服従することに如何なる價值を持つことであらうか？ 彼は幸福であるに違ひない、それは確かだ。だがその幸福には最高度の崇高性が缺けてゐる、即ち徳行の榮譽、自己のよき立證者が缺けてゐるに違ひない。で、勿論徳を行ふ人間の方が彼等以上であらう。魂が理解するに苦しむ程強力な羈絆によつて死すべき運命をもつた肉體に結びつけられてゐる場合は、この肉體の維持といふ考へに刺戟されて魂が何もかも肉體のことにかまけてしまふ。そして、一般的秩序に反する利益を肉體のために與へる、しかもなほ魂にこの一般的秩序を認めることも、愛することも出来るのだ。魂の自由の善用が同時に價值となり報酬となるのは、この場合である。魂が現世の情慾と闘ひ、その最初の意志に踏みとどまることによつて、不滅の幸福を準備するのは、この場合である。

此の世に生きてゐる限り吾々は低劣な状態に置かれてゐる。だがこの状態に於いてさへ、吾々の性質が最初は何事によらず善に傾いてゐるとするならば、そして吾々の惡徳は凡てこれ自ら得たものであるとするならば、吾々は何故それ等の惡徳に抑へられてゐるなどと嘆ずるのであるか？ 何故吾々は、吾々が自分で造り出した不幸や、吾々が自ら自分自身を害するために武装してやつた害敵のことを、萬物の創造主に向つて非難するのであるか？ あゝ、人を損ふこと勿れ、然ら

ば彼は何の苦もなく永久に善人であるだらう、何の悔恨もなく永久に幸福であるだらう。止むを得ず罪を犯したと稱する罪人も悪人と同じ虚言者である。彼等は何うして気がつかないのであらう！ 彼等が自分で嘆じてゐる弱さなるものも彼等自身の所業なのだ、彼等の最初の墮落も彼等の意志から起つたのではないか、誘惑に乗らうとする心があつたために、彼等は遂にわれにもあらず誘惑に屈し、誘惑を抵抗しがたいものにしてしまつたのだ！ 勿論彼等にはも早悪人たらざらんとし、弱者たらざらんとするも能はざることである、だが、さうなるかならぬかは彼等の自由であつたのだ。あゝ若しも、吾々の習慣が未だ固定せず、吾々の精神が漸く眼を開きはじめて時に、その精神をして、未知のものを批判するために是非とも知らねばならぬ事柄に専心せしめることが出来たならば、若しも吾々が、他人の眼を驚かすためにではなくて、自己の本性に従つて善良であり賢明であり、且つ自己の務めをはたし得て幸福となるために物を理解することを眞面目に欲してゐたならば、吾々はこの現世に於いてさへその始めから如何に容易に自分と自分の情慾とを制御し得てゐたことであらう！ さうした研究は吾々には多く怠屈なもの、苦痛なものとして現はれる、といふのは、吾々がそれに思ひを致す時は、既に不徳を犯して墮落し、情慾のとりことなつてゐる時に外ならないからである。吾々はことの善悪を識別する前に判断と評價を決めてゐるのだ。そして何事によらずその誤てる尺度に當てはめるので、如何なるものにもその正當な價値を附してはゐないのだ。

ある時代には心がまだ自由ではあるが、燃え易くて、不安で、未知の幸福に思ひこがれてゐるので、移り氣な好奇心をもつて幸福を探し求め、そこで官感に欺かれて、遂には自分の幻影の上に着し、ありもしないところに幸福を探し得たつもりでゐる時代がある。かうした幻影時代が

私の場合には餘りにも長く續いたつてであつた。あゝ！ 私がそれに氣がついた時にはすでに遅すぎた、そこでそれを打ち壊すことが私には全く出来なかつた。この幻影はこれを生んだこの限りある肉體が續く限り滅びぬであらう。けれども少くもそれは私を誘惑することに成功しなかつたのだ。私は迷はされなかつたのだ。私はそれがあるがまゝに認めてゐる。私はそれに従ひながら、それを輕蔑してゐるのだ。そこに幸福の目的物を見るどころか、私はそこに幸福の障礙物を見てゐるのだ。私は、この肉體の桎梏を脱して、何等の矛盾のない、不可分の自我にかへる瞬間を憧れてゐる。だがそれまでも、私に此の世にあるうちから既に幸福なのである。何故ならば、私はすべての罪惡をこの自我の方に零として勘定するからである、此の世の生活を私の實在にとつては殆んど無關係なものと看做すからである、そしてこの生活から私の引き出すことの出来る眞實の幸福は、自我に依存したものだからである。

私は、この幸福と力と自由の状態に出来るだけ自分を高めるために、崇高な瞑想の修業を行つてゐる。私は宇宙の秩序を冥想する、だがそれは、無益な學說によつてそれを説明するためではなくて、絶えずそれを讚美するためであり、そこに示顯してゐる賢明な創造主を崇拜するためである。私は彼と對談し、私の全能を彼の神聖な本體の中に滲透せしめる。私は神の慈悲に感動し、その恵みを祝福する、だが私は神に祈り求めることはしない。私は神に何を求む可きであらうか、私のために萬物の行程を變へて貰はうといふのか、私のために特に奇蹟を行つて貰はうといふのか？ 神の慧智によつて打建てられ、その體理によつて維持されてゐる凡ての秩序を何よりも愛さなければならぬ私が、私のために秩序を攪亂せよと望むべきであらうか？ 否、かゝる無暴な祈願は叶へらるゝよりもむしろ罰せらるべきであらう。私はそれどころか善をなす力を

さへ求めはしない、神が私に與へてゐるものを何故その神に求めるのであるか？ 神は私に、善を愛するためには良心を、善を知るためには理性を、善を選ぶためには自由を與へなかつたのであるか？ 若し私が悪をなすとすれば、私には決して辯解の餘地はないのである、私は自ら欲したために悪をなしたのではないか。私の意志を變へよと神に求めるのは、神の方が私に求めてゐることを、神に求めることである。それは自分の仕事を神にして貰つて、その賃銀を自分で取りたいといふのと同じである。自分の状態に満足しないことは、存在しない何物かを欲することであり、無秩序と罪惡とを欲することである。正義と眞理との源泉たる慈悲慈愛の神よ！ おん卿に信頼する私の心のうちにある至上の祈願は、おん卿の意志ぞ行はれよ、といふことである。私はおん卿の意志に私の意志を結びつけることによつて、おん卿のなすところをなす、私はおん卿の善に承服する。かくて私はその報酬として最高の幸福を前以つて與へられてゐると信ずるのである。

自分自身に對するこの正しい不信任の中で、私が神に求める唯一のもの、といふよりはむしろ神の正義に期待する唯一のものは、若し私が過ちを犯すならば、そしてこの過ちが私にとつて危険なものであるならば、その私の過ちを正して貰ひたいといふことである。正直に言へば、私は自分が過誤に陥らないとは信じない、最も眞實だと思つてゐる自分の色々な意見も、それだけ却つて間違つてゐるかも知れない。何故なれば、自己の所信に執着しないやうな人があるだらうか？ 又萬事について意見の一致する人がどれだけあるだらうか？ 私を欺く幻影は私の自我にその根源を持つてゐる筈はない、自我は私をそこから救ひ得る唯一のものなのだ。私は眞理に到達するために出来る得るかぎりのことを行つた。然しながらその源泉は餘りにも高所にあるのだ、力が

盡きて私かもうそれ以上進めなくなつたとしても、私に何等かの罪があり得るだらうか？ 眞理の方こそ近づいて來べきものであるのだ。

吾が善良な牧師はかく熱心に語つたのであつた。彼は感激してゐた、私も矢張感激してゐた。私は聖オルフエ（ギリシヤ神話の樂人）が始めて讚美歌を歌ひ、人々に神々の禮拜を教へるのを聞く思ひがした。とは云ふものの、私には彼に對する多くの反對論が起つてゐた、だが、私はそれを一つも述べはしなかつた、何故ならば、さうした反對論は非常に面倒なものでありながら、それ程に確乎たるものではなかつたからであり、それを述べても彼に説得されるに定つてゐたからである。彼がその良心に従つて話して行くにつれて、私の良心は次第に彼の言つたことを肯定して行くやうに思はれた。私は彼に言つた――

あなたが私に教へて下さつた色々な感情は、あなたが信ずると言はれるものよりも、あなたが知らないと告白なさるもののために、私には一層新しいものに思はれます。それは私には、キリスト教徒が無神論又は無宗教と混同しようとしてゐる――實は正反對な教義であるのに強いて混同しようとしてゐるあの有神論又は自然宗教によく似てゐるやうに思はれます。けれども私の現在の信仰状態では、あなたの意見を容れるためには、降つて行くどころではなく、登つて行ねばなりません。で私はあなたと同じやうに賢明でない以上は、あなたの現在居られる點に正確に止まることは、六ヶ敷しいと思はれるのです。少くもあなたと同じやうに眞面目にするために、私は獨りでよく考へてみたいと思ひます。あなたがお話になつたところに依ると、私を導いて呉れるものは内心の感情でなければなりません。またあなたは、良心を長い間沈黙させてをいた場合は、それを呼び戻すことは容易な問題ではないと御自分で言はれました。私はあなたのお話を心

に銘じてをきまず、私はそれをよく考へてみねばなりません。若し私がよく考へてみた後に、あなたと同じ信念に達するならば、あなたは私の最後の師です。そして私は死ぬまであなたの弟子です。けれどもどうぞ續けてお話し下さい、あなたはまだ私が知らねばならないことを半分しか話して下さらないのです。黙示だの、聖書だの、教義だの、私が子供時代から理解することも信ずることも出来ないで、しかも認めることも否定することも出来ないでたゞあて度もなくあさつてゐたさうしたものについて話して聞かして下さい。

よろしい、吾が子よ、と彼は私を抱擁しながら言つた、私は自分の考へてゐることを悉皆話してしまひませう。私も決して自分の心を君に半分打開けただけで置きたくはない。それにしても君が自分の希望を明かして呉れたことは、君に對しては全く腹臍なく話してよいといふ保證を私に與へるに必要なことでしたよ。これまで私は君に役に立つだらうと思ふ事柄の外は少しも君に話さなかつた、またそれは私が充分確心してゐる事柄ばかりであつた。これから調べようといふ問題は甚だしく異つた事柄である。そこにはたゞ困難と神秘と暗黒ばかりがあるやうに私は見てゐる、私はそこへ躊躇と疑惑とを持ち込んで行くだけである。私は心を決めるだに戰慄を禁じ得ない、そこで私は君に自分の意見といふよりは疑問を語るのである。若し君の感情がもつと堅牢なものであつたなら、私は自分の感情を君に述べることが躊躇するだらう、だが、君の現在の状態では、私のやうに考へることも得るところがあるであらう(註二九)。なほ私の論議にはたゞ推理の權威だけを認めて呉れ給へ、私は自分が間違つてゐるか何うかは知らないのだ。論議をする場合、時に斷定的な調子を取ることはどうも止むを得ないことであるが、この場合は、私の斷定は何れも疑問をなす推理に過ぎないといふことを知つてゐて貰ひたい。眞理は君自ら探して呉れ

給へ、私の方はたゞ誠實であるといふことだけを約束する。

(註二九) これが現代この善良な牧師が公衆に向つて説き得るものではないかと私は思ふ。

私の話の中に君は唯自然宗教だけを見出したといふが、何か他の宗教が必要だとするのは可成變なことではなからうか? そんな必要を私はどこに感ずるだらうか? 神が私の心に吹き入れた感情に従つて神に仕へてゐる限り私に何等かの罪があり得るだらうか? 道徳の純粹性がなければ如何に私の能力を善用しても私は何等かの實證的教義を引き出すといふことは出来ない。さうした實證的教義から如何なる道徳的純粹性を、即ち人間に役に立ち創造者を辱かしめないやうな如何なる教義を引き出すことが私に出来ようか? 神の名譽のために、社會の幸福のために、且つ私自身の利益のために、自然法の務め以上に更に何もかを加へ得るとすれば、それを私に示して貰ひたい。また私の宗教から發生したものでない何等かの新しい宗教から、何等かの徳を君が造り得るとすれば、それを示して貰ひたい。神性についての最も偉大な觀念はたゞ推理によつてのみ吾々に生ずるのである。自然の光景を見よ、内心の聲に耳を傾けよ。神はすべてのことを吾々の眼に、吾々の良心に、吾々の判斷力に訴へて語つてゐるのではないか? それ以上に人類は何を語り得るであらうか? 人間の啓示は、神に人間的な感情を附加へることにおいて、神を汚してゐるに過ぎない。偉大な實在の觀念を明らかにするところか、私の見るところでは、特殊な教義はそれ等を混亂させてゐる。それ等を高貴なものとするところか、反對に卑賤なものにしてゐるのだ。神を周るところの洞見すべからざる神秘に、彼等は不合理極る矛盾を加へてゐるのだ。彼等は人間を傲慢・狹量・殘酷にしてゐるのだ、彼等は地上に平和を建設する代りに、劍と火とを齎してゐるのだ。私はさうした凡ての事柄が何の役に立つのかと自問してみるが、これに答へ

る術はない、私はそこに人間の罪と人類の悲慘より外に何ものをも發見出来ないのである。

默示は神の意に叶ふ奉仕の仕方人間に教へるためになければならぬものである、と世人は言ふ。その證據として彼等は人間が設けた奇怪な儀式の多様性を指摘するが、彼等は、この多様性そのものが默示の空想的性質に起因してゐるといふことには氣がつかないのだ。世界各國において神にものを言はせることが行はれ出して以來、どの國民も皆神に自分の流儀に従つて、自分の好きなことを言はしてゐるのである。若し彼等が神が人間の心に語る事柄にのみ耳を傾けてゐたならば、地上には唯一つの宗教しかなかつたであらう。

一定の禮拜はなるほど必要であつた、私もそれを欲してゐる。然しながら、さうしたものを造りあげるために神の全機能を必要としたほど、この點が重要であつたらうか？ 宗教の儀式と宗教とを混同してはならない。神の求むる禮拜は心の禮拜なのである。それはその心が眞面目であるかぎり、常に一樣のものである。神が法衣の形式や、僧侶の述べる言葉の順序や、祭壇の前で行ふ身振りや、その他あらゆる拜跪の類にそれほど大きな關心を持つものとは想像するのは、實に狂氣じみた妄想である。あゝ！ 吾が友よ、眞直ぐに立つてみ給へ、さうしても君は依然として地上に即してゐるではないか。神は精神を籠めて且つ眞摯に禮拜されることを欲する。これはあらゆる宗教、あらゆる國、あらゆる人間に一樣な義務だ。禮拜の形式に關しては、よし秩序のために一定律が必要であるとしても、それは全く戒律の問題であつて、何等の默示を必要としない。私はかう何もかも反省してみたら始めたのではなかつた。教育の偏見や、人間をして絶えずその分限を乗り越えさせようとしてゐる危険な自負心のために曳きずられて、自分の微弱な意思を偉大な神の意思にまで高め得なかつた私は、反對に神を自分にまで引き下げようと努力してゐる。

たのであつた。神は私の性質と神の性質との間に無限の距離を置いてゐるのに、私はそれを近づけて見てゐたのだ。私はもつと直接的な交渉を、もつと特別な教示を望んだ、そして同胞の中でも特に自分だけが特典にあづかりたいために、神を人間に似せてしまふだけでは満足しないで、超自然的な光明を欲したのだ。私は特種な禮拜様式を求めた、私は、神が誰にも語らなかつたことを、又は、私にだけ解つて他人には解らないやうなことを、私に語つて貰ひたいと思つたのだ。

私は自分が到達するに至つたこの點を凡ての信仰家が一層徹底した禮拜様式に到達するための共通の出發點として眺めたので、自然宗教の教義の中に結局あらゆる宗教の要素を發見したのであつた。私はこの地上に權勢を振つて、互ひに他の誤謬と虚偽を非難しあつてゐる種々雑多な宗派について考へてみた。私は問ふた、何れが正しいのか？ 何れも私にかう答へた、それは私の宗派である。彼等は皆かういふのであつた、唯私と私の一派だけが正しい考へを持つてゐるのだ、他はみんな間違つてゐるのだ。それでは何うして諸君の宗派が正しいといふことを知つてゐるのか？ 神がさう告げたからである(註三〇)。では神がさう告げたと誰が諸君に話したのか？ 私の牧師である、彼はよくそれを知つてゐるのである。私の牧師がさう信ぜよと私に話したので、私はさう信じてゐるのだ。彼は別なことを言ふ人は皆間違つてゐるのと私に確言してゐる、そこで私は彼等の言ふことには耳を傾けないのである。

(註三〇) 或る善良な賢明な僧侶は言つた、すべての人々は言ふ、私達が信奉する宗教は(そして凡ての人がみな此の常套語を用ひてゐる)人間のそれでもなく、如何なる被造物のそれでもなく、實に神の宗教である、と。叫べども、何のお追従もお禮讃もなしに正直に言へば、そんなものは一つもない。それ等は、譬へ人が何と言はうとも、人間の手の、人間の手段によつて信奉されてゐるのである。その第一の證據は、宗教が世に入れられた有様だ、そしてなほ今日でも毎日個人によつて受入れられる有様だ、民族と國と土地とが宗教を與へるのだ。吾々は自分が生れて育てられた土地の宗教

に所屬するのである。吾々は、自分が人間であることを知る以前において、既に割禮を行はれ、洗禮を受け、ユダヤ教徒であり、マホメット教徒であり、キリスト教徒であるのだ。即ち宗教は吾々の選擇に依るものではない、その證據は、その後と雖もその生活風習が如何にも宗教とかけはなれてゐるといふことだ、ほんの一寸した人間的な動機のために、人は直ぐその宗教の教へに背くといふ事だ。』シャルロン『歐智論』第二章第五章二五七頁、一六〇一年ボルドオ版。

このコンドンの有徳な神學者の眞摯な信條はサポアの司祭のそれとさしたる相違を持たなかつたことは非常に明白である。

シャルロン以前にモンテニエニユが同一思想を展開させて、同じ意味に於いてかう言つてゐる、『吾々がキリスト教徒であるといふのは、吾々がペリゴル人であるとか、ドイツ人であるとかいふのと同じ理由に於いてである。』第二章第十二章。

何と！眞理は一つではないか？ と私は考へた、私に眞理であることが他人に虚偽であり得るのであるか？ 正しい路を踏む者の方法とさ迷ひ歩く者の方法とが同一であるとするれば、如何なる功績を或ひは如何なる非難を、一方が他方よりも餘分に負ふのであらうか？ 彼等の選擇は偶然の結果である、それを彼等の責に歸するのは不當ではないか。それは、かくかくの國に生れたからといふので或ひは報酬を與へ、或ひは罰を加へると同じである。神がかくの如く吾々を裁くのであると敢へて言ふのは、神の正義を冒瀆することである。

すべての宗教が善良なものであり、神に嘉せらるべきものであるか、若くは、それ等のうちに神が人間のために定めた宗教が一つあるか、そしてこの場合には、若し神がそれを無視する人々を罰するものとすれば、神はそれが唯一つの眞實の宗教として區別せられ、認められるやうに、一定の明確な記號を附して置いたであらう、そしてそれ等の記號はあらゆる時とあらゆる場所に共通なものであつて、偉人にも小人にも、學者にも無學者にも、ヨーロッパ人にも、インド人に

も、アフリカ人にも、野蠻人にも同様に感知し得られるものである。萬一地球上に唯一つの宗教しなくては、その宗教外のものには永遠に苦しむの外はないとしたならば、そして、世界の何處かにこの證に氣がつかない正直な人間が唯一人でもあつたとしたならば、この宗教の神はそれこそ暴君中の最も不正な最も残酷な暴君と云ふべきであらう。

それ故に吾々は眞面目に眞理を探求して行くことにしよう、出生地の法則や、両親や牧師の權威には一顧も與へずに、彼等が幼年時代から吾々に教へてくれたものを凡て良心の法廷へ呼び出すことにしよう、汝の理性を棄てよ、と彼等が如何に叫ぼうとも無益だ、私を欺く人もそれと同じことを言ふのではないか。私が理性を棄てるためには、私に理由がなければならぬのだ。

私が宇宙を検證し、自分の能力を善用することによつて、自分獨りで學び得る神學は、既に君に説明した話の中に全くつきてゐる。進んでそれ以上を知るためには、非常手段に訴へなければならぬ、だがさうした手段は人類の權威とはなり得まい。何故なれば、如何なる人間も私と別種のものではあり得ないので、或る人が自然に知る凡てのことは私も亦知ることが出来るし、私が間違ふやうなことは、他の人も亦同様に間違ひ得るからである。私が人の言ふことを信ずるのには、彼かそれを言ふからではなくて、彼かそれを實證するからである。それ故に人々の證明といふことは結局に於いては私の理性そのものの證明に外ならない、従つてそれは、神が眞理を知らすために私に與へた自然の手段に一物を加へるものでもない。

眞理の使徒よ、そこで、私が判断を差控へてゐる事柄について諸君は何か私に語るべきものがあるか？ 神の啓示に聞け。それは別問題だ。神が語つた！ とは確かに大きなことを言つたものだ。然らば誰に語つたのか？ 神は人間に語つたのである。それでは何故私には全く聞えな

つたのか？ 神はその言葉を君に傳へるよう、他の人々に命じたのだ。なるほど！ 神が語つたことを私に告げようとするのはその人々なのだ。だが私はむしろ神自身から聞きたかつたのだ、それは神にとつても別に餘計な手敷ではなかつたらうし、私には間違ひをする懼れが全くなかつたであらう。神はその使徒の使命を明らかにして諸君に間違ひのなきやう保證したのだ。何うしてそんなことが出来るのか？ 奇蹟によつてである。然らばその奇蹟は何處にあるか？ 聖書の中に。然らばその聖書は誰が作つたのか？ 人間だ。然らばその奇蹟を見たものは誰か？ それを證據とする人々だ。何と！ 依然として人間の證據ではないか！ 依然として人々が私に告げるものは、他の人々から告げられたものではないか！ 神と私との間には唯人間があるばかりなのだ！ とは言へ、ともかく見て行くことにしよう、吟味し、比較し、確かめて行くとしよう。あゝ！ 若し神がこの仕事を全部私に免除されてをつたとしたならば、私は現在よりもいかにばかりよくない心を以て仕へてゐたことであらう？

吾が友よ、私が今や如何に恐るべき論議に携つてゐるかをよく考へて呉れたまへ、遠い太古の時代に溯るために、全世界のあらゆる國々に行はれた豫言や啓示や歴史やその他あらゆる信仰の紀念物を吟味し、秤量し對照するために、そしてそれ等のものの時代や場所や創始者や機縁を定めるために、私が如何に多くの博識を必要としてゐるかを考へて呉れたまへ！ 眞正な文書と贋物の文書を識別するために、反駁の論と應答の論とを比較し、譯文を原典に對照するために、證人達の公平さや常識や知識について判定するために、省略の有無や附加の有無や變修改作偽造等の有無を知るために、論争者が論敵のあげた反證に對して沈黙してゐる場合はこれに如何なる權威を認むべきかを判定するために、即ち、さうした證據が果して彼等に知られてゐたのか何うか、

また彼等は進んで應答するほどそれ等の論證を重大視してゐたのか何うか、吾々の書物が彼等の手に届くほど書物といふものが行き亘つてゐたのか何うか、更に吾々が彼等の書物を吾々の間に流布せしめ、彼等がなしたところの強力な反對論をそのままのかたちで受入れるほど誠實であつたのか何うか、さうした凡ての事柄を判定するために、私が批判力の何んな正確さを必要としてゐるかを、考へて呉れたまへ。

さうした凡ての文書が批判の餘地のないものとして承認された曉には、更に進んでその著者達の使命の論證に移らなければならない。奇蹟なしに達成され得ない豫言は如何なるものであるかを判定するためには、偶然的の諸法則、即ち蓋然性の法則をよく知ることが必要となる。或る言葉に含まれてゐる豫言と單に言葉の修辭に過ぎないものとを識別するためには、その言語特有の精神を知らなければならぬ。狡猾な者がどの點まで單純な者の眼を欺き、見識のある人々をさへ驚かすことが出来るかを指摘するために、如何なる事實が自然にかなひ、他の如何なる事實が自然にかなつてゐないかを知らなければならぬ。單に信用を得るためばかりでなく、それを疑ふ人を懲らし得るためには、奇蹟ともいふべきものは如何なる種類のものでなければならぬか、またそれは如何なる現實性を持たねばならぬかを探求することが必要となる、即ち、眞の奇蹟と偽の奇蹟についての證據を比較し、それを識別する確實な原則を發見することだ。最後に、何故に神は自分の言葉を知らしめるために、恰も人間の輕信を嘲弄でもしたかのやうに、又、故さらしにそれを知らしめる眞實の手段を避けでもしたかのやうに、手段そのものがかくも多くの證據を必要とするやうな手段を選んだのであるか、それを説かなければならぬ。

今かりに、神が人間を彼の尊い意志の媒體とするほど進んで身を引き下げるとしてみよう。

この場合、神が全人類にかゝるものとして知らしてもゐないその代理者の聲に従ふべきことを要求するとすれば、神に道理があるであらうか、神は正しいであらうか？ 如何はしい僅かな人々の前で行はれ、他の凡ての人々は全く噂だけで知つてゐるに過ぎない二三の私人的な署名のみを、神の唯一の信任状として牧師に與へることが正當なことだらうか？ 若し世界のあらゆる國々で、無教育の者や單純な人々が見たと稱してゐる凡ての奇蹟を眞實にとるならば、あらゆる宗派は正しいのである。そして日常の出來事よりも奇蹟の方が多くなるだらう、また何處にまれ狂信者の迫害される處に隨所に奇蹟が行はれなかつたらば、それこそ最大の奇蹟である。自然の不變な秩序こそ、それを統治する賢明な手の存在を最もよく示すものである、若しこれに多くの例外が起つたとしたら、私はも早さう考へる譯には行かなくなるだらう。私自身としては、神を非常に信じてゐるので、あまりにも神に想應しからぬかくも數多の奇蹟を信ずることは出來ない。

或る人が來て吾々に次の如き言葉を告げるとせよ、曰く、人類よ、吾れ汝等に至上の意志を告ぐ、吾が言葉を吾を遣はせし者の言葉と思へ、吾は太陽にその軌道を變ずることを命じ、星辰に新たなる配置を命じ、山岳に平野となることを命じ、波浪に高山となることを命じ、地球に面目を一新せよと命ず、と。かうした奇蹟を見るならば、誰か即座に自然の主を認めないものがあらう？ 自然は決して詐欺師には従はない、詐欺師の奇蹟は街の辻とか、邊鄙な場所とか、部屋の中とかで行はれる、即ちさうしたところで、彼等は、既に何事でも信じようと思つてゐる少數の顧客を相手にして易々とやつてのけるのである。奇蹟を本當に信じさせる爲めには、幾人の目撃者が必要であるかなどと敢へて言ひ出すものは誰か？ 若しも諸君の教義を實證するために行はれた奇蹟そのものが更に實證される必要があるとしたら、そんな奇蹟が何の役に立つか？ むし

る行はれざるに如かなかつたのだ。

最後に、誰も知つてゐる教義の中に最も重大な檢證がまだ残つてゐる。といふのは、神は此の世に奇蹟を行ふと告げる人々が、時には悪魔もそれを眞似るもいふことを主張してゐる以上、最もよく實證された奇蹟を知つたところで、吾々は以前より一步でも前進したことになるはしないからである。ファラオン（古代エジプト王の稱號）の魔術師達か、モーゼが神の命に依つて行つたと同じ奇蹟を、しかもモーゼその人の前でわざわざ行はうとさへした以上は、彼等がモーゼの陰で、モーゼと同じ名義で同じ權威を何うして主張してゐなかつたと云へようか？ そこでかくの如く教義の眞實を證明するために奇蹟を以てした後、悪魔の仕事を神の事業と取り違へさせまいためには、更にその奇蹟の眞實を教義によつて説明しなければならぬのだ（註三一）。この板狹みを君は何う考へるか？

（註三一）これは聖書の多くの章句に明白に述べてある、殊に申命記第十三章には歴然と述べられてゐる、曰く、若しも奇妙な神々を説いて歩く豫言者が奇蹟を行つてその豫言を實證し、彼の豫言した事柄が實現するとすれば、この豫言者を尊敬するどころか、彼を殺してしまはなければならぬ、と。然らば異教徒達が、彼等にとつて見る知らぬ神をとき、豫言と奇蹟によつてその使命を果たす使徒達を殺した時に、吾々が苦情を申込むとしても、直ちに彼等に反駁されてしまふ、反駁されないほど確乎たる理由はないと私は思ふ。然らばかゝる場合には何うしたらいいか？ 道は一途あるのみだ、即ち理性に立ちかへつて、奇蹟を放棄することである。始めから奇蹟にたよらなかつたならなほよかつたのである。それは少くも非常に頑固な理窟によらなければ晦ますことの出來ない最も明白な常識である。キリスト教の妙蹟だ！ だが、イエス・キリストは、若し彼の教義を理解し、彼を信ずることを學ぶためにそれほど多くの才智を要するとするならば、單純な人々に天國を約束したのは、彼の間違ひであつたらう、彼の説教の最も美はしいものを、心の貧しい人々を讀美することから始めたのは間違ひであつたらう。私が何うしても服従しなければならぬといふことを諸君が實證すれば、萬事は大變好都合だ、だが私にそれを納得させようとするならば、諸君は私の力量の範圍に這入らな

ければならない。諸君の理性を心の貪しき人の能力に適合させて呉れたまへ、さもなれば、私はもう諸君を諸君の主の眞の弟子だとは認めない、従つて諸君が私に説いてゐるのは主の教義ではないのである。

かくして彼等はこの論議を論理に使用し手もつけられぬ循環論を曝露してゐる。それは、一つの不確かな事柄を實證するために、他の同じ缺點を持つた事柄を以てし、次ぎにはこの第二の事柄を初めの事柄で實證せんとするに過ぎない或る一種の推理法の結果なのだ。これは懷疑派又はピロン學派の常套語である、そしてその最も恐るべきは、とペイ
ルは言ふ、彼等が獨斷論に對して申ゆる凡ての論法である、と。(ガルニエ版編輯者註)

此の教理が神から來たものであれば、それは神の聖性を備へてゐる筈である。それは單に、理性が吾々の精神に印すところの混亂した觀念を照らし出さねばならぬばかりでなく、また一種の禮拜様式、一種の道徳、その他、吾々の屬性——これがあればこそ吾々のみが神の本質を理解するといふ、さうした吾々の屬性に叶ふやうな行爲の規範をも、吾々に與へねばならぬ。そこで若しこの教義が無稽な不合理なことばかりを吾々に吹き込むならば、若しもこの教義が、怒り易い、嫉妬深い、復讐的な、不公平な、人間を憎む神の姿しか吾々に描いて見せないとなれば、若し、常に破壊し攻撃する用意のある戦争と闘争との神しか描き出さないとするならば、若し、常に苦惱や苦痛を唱へて、無辜の民をさへ罰せんと呼稱するが如き神をしか描き出さないとするならば、私は決してこの恐ろしい神の方へ心を惹きつけられはしないだらう、私はかゝる宗教を奉ずるために自然宗教を放棄することのないやうよく自分を守るだらう。その何れを選ぶのが必要であるかは、君にもよく分つてゐるだらうではないか。私はその信奉者達に向つて言ふだらう、諸君の神は吾々の神ではない。先づ一國民のみを選び出して爾餘の全人類を追放することから始める神は、人類共同の父ではない、自分の被造物の大部分に永劫の苦痛を運めるが如き神は、私の理性

が示すところの慈悲仁愛の神ではない、と。

教理については、理性は私に、教理は清朗明白で、且つその明瞭さによつて人の心を打つものでなければならぬ、と教へるのである、若し自然宗教に何か缺けてゐるものがあるとなれば、それは此の宗教が吾々に教へる大眞理の中に曖昧な點を残してゐるといふことである。これらの眞理を信仰せしめるために人間の精神に感じ得る方法でこれを教へ、これを人間の能力の範圍に置き、これを人間に理解しやすからしめることこそ啓示の問題である。信仰は理解によつて確實にされ鞏固にされる。最も優れた宗教は必ずしも明瞭なものである。私に宗教を説く場合、これに神秘と矛盾とを負はすものは、そのこと自身に依つてその宗教に對する不信を私に教へるものである。私の崇拜する神は暗黒の神ではない、神が私に理解力を授けてくれたのは、その使用を私に禁ずるためではない、私に理性を棄てよといふ事は理性の創造主を侮辱せよといふことである。眞理の使徒は私の理性を決して抑壓しはしない、彼は理性の光を發輝せしめるのである。吾々はあらゆる人間の權威を無視してゐた、然るに、この權威なくしては、何うして人が理性に反する教義を説いて他人を説得し得るのか、私はそれを知ることが出来ないであらう。今暫くこの兩者を戦はしめてみようではないか、そして彼等が、この兩派にそれぞれ特有な辛辣な言辭を以て如何に應酬するかを聞かうではないか。

神通者

理性は汝に言ふ、全體は部分より大なりと。然れども吾れは神の名に於いて汝に告ぐ、部分こそ全體より大なるものなりと。

推理者

然らば、神は自ら矛盾すると敢て吾れに告げんとする汝はそも何者ぞ？ 理性を通して吾に永遠の眞理を教ゆる神と、神の名に於いて吾々に不合理を宣言する汝と、余はその孰れを選んで信ずべきか？

神通者

吾れを信ぜよ、吾が教へは最も實證的なるを以つてなり、しかして吾れは疑ひを容る餘地なきまで神が吾れを派遣したるものなることを汝に證明せん。

推理者

何？ 神に反證する汝を派遣せるものは神そのものなることを、汝は證明すると言ふのか？

照らば、汝は如何なる證據を以て、神は、神が與へし悟性を通してよりも、汝の口を通して、より確實に語るものなることを、吾れに信ぜしめんとするか？

神通者

神が汝に授けし悟性とや！ 自惚れたる小人かな！ 汝恰も、罪に汚れし理性にさ迷ふ第一の不敬者に以たらずや！

推理者

神の人よ、汝こそ神の使徒たるを實證するとして尊大なる振舞ひをなす第一のべてん師たらざるを得ざるべし。

神通者

何！ 哲學もまたかゝる罵詈の言を吐きしぞ！

推理者

時に然り、聖賢その例をなせる時なり！

神通者

おゝ！ されど吾れはかく言ふ權利あり、吾れは神の名に於いて語るなり。

推理者

汝はその特權を亂用するに先きだちて先づ汝の信任状を示すべし。

神通者

吾が信任状は確實なり、天地吾がために示さん、乞ふ、従いて吾が論議に聽け。

推理者

汝の論議とや！ 汝は論議を考へるものに非ず。吾に吾が理性誤てりと説くは、吾が理性が汝に對してこそ言ひつべかりしことを、投げ返すものに非ずや？ 理性を否定せんとするものは、理性の授けをからずして説得せざるべからず、何となれば、假りに汝理性を用ひて余を完全に説服せりとせよ、然るとき余は如何にして、汝の語りし事を余に承認せしむるものが、所謂罪に汚れたる余の理性に非ざるや否やを知るべきか！ 加ふるに、理性はかの公理を破るべき筈なるに、汝はこの公理よりも白明なる如何なる證據、如何なる論證を用ひ得るものぞ？ 部分は全體より大なりといふを信じ得るものとすれば、正しき三段論法は一つの虚偽なりといふも亦同じく信じ得らるべし。

神通者

何たる相違ぞ！ 吾が證據には答を須ひず、そは超自然に屬するものなり。

推理者

超自然なりと！ この語は何を意味するや？ 余はこの語を解せざるなり。

神通者

自然の秩序に於ける改變なり、豫言なり、奇蹟なり、あらゆる種類の不思議なり。

推理者

不思議！ 奇蹟！ 余は未だかくの如きものを見たることなし。

神通者

汝に代つて他の人それを見たり、證據は幾多あり……あちゆる國民の立證あり……

推理者

國民の立證、それは超自然のものなりや？

神通者

否、されど一致ある時は、争ふべからざるものたり。

推理者

理性の原理以上に争ふべからざるものは絶無なり、従つて人々の立證に基く不合理に權威を與ふることは能はず、更に示せ、超自然の證據に接せん。人類の證明は超自然の證據に非ればなり。

神通者

あゝ、頭迷なる心よ、恩寵汝に向つて口を開かざるべし。

推理者

それは余の罪にあらず、何となれば、汝の説によつて見るも、人は恩寵を求めるに先きだち、既にこれを授かりをる筈なればなり。然らば、先づ恩寵に代つて語り始めよ。

神通者

あゝ、吾れは始めたるに、汝聴かざるなり。されど汝は豫言を如何に評するや？

推理者

余は先づ言はん、余は奇蹟を見ざると等しく豫言者を聞きたることなしと。更に言はん、如何なる豫言者も余に對しては權威を持つ能はざるべし、と。

神通者

惡魔の追従者よ！ 然らば何故に豫言は汝の上に權威を持たざるや？

推理者

何となれば、豫言が權威を持ち得んがためには、共立し得ざる三事項を必要とするが故なり、即ち、余が會つて豫言を現實に聞きをること、豫言の實現に立會ふこと、この實現がその豫言に偶然符號し得たるに非ずといふ事實が余に證明せらるべきこと、これなり、蓋し譬へそれが幾何學の公理以上に、正確、明白、明瞭なりとするも、偶然に行はれたる豫言がその實現を不可能ならしむるほど明瞭ならざる限り、この實現は實際に生じたる時と雖も、嚴密には、豫言をなせし人に何等の證明を與へざるを以つてなり。

そこで諸君の所謂超自然の證據、奇蹟、豫言等の歸着するところを見るがよい。これ等のすべてのもを他人の信仰のまゝに信ぜんか、然らば、私の理性に語りつゝある神の權威を人間の權威に屈服させることになるのだ。若しも私の心が認めてゐる永遠の眞理が何等かの打撃にゆるぎ得るものとすれば、私にはも早何等の安定もあり得ないであらう、そして諸君が神の名に於いて語ることが確かになるところか、私にはも早神の存在することさへ確かではなくなることであらう。

吾が子よ、かくの如く多くの困難があるのだ、だがまだこれだけではない。相互に排斥し排撃し合ふかくも多くの様な宗教の中に、若し眞實なものがあるとすれば、唯一つだけが眞實なのだ。それを知るためには一宗教を研究するだけでは不十分だ、すべてを検證しなければならぬ。またそれが如何なる材料のうちにあろうとも、吾々は理解せずして責める権利はない(註三二)。

反對論はその論據に對照しなければならぬ。各自が他に如何に反對し、又如何に應答してゐるか知らねばならぬ。或る感情が吾々にとつて明白に思はれれば思はれるほど、吾々は益々、かくも多くの人がそれをそれとして認めなかつたのは如何なる根據に立つてゐたからのことであるか、その理由を發見しなければならぬ。他派の理論に通曉するために、味方の博士達の言を聞くだけで充分であると考へたら、それこそ實に單純すぎざるを得まい。誠實を誇り得る神學者が何處にゐるか？ 論敵の議論を反駁するに、それを毀損することから始めない者がどこにあるか？ 誰でも自派の内部では輝いてゐるものだ、だがかくの如く仲間の間で自分の論據を鼻にかけてゐるやうな人が、他派の間へ這入つては、その同じ證據を以て實に大馬鹿者を演ずるかも知れないのだ。君は讀書によつて通曉しようといふのか、それが如何に多くの博覽強記を要することであらう？ 如何に圖書館を漁り歩かねばならぬことであらう！ 如何に多くの讀書を要することであらう！ その選擇に誰が私の指導をして呉れるであらう？ 何處の國でも反對派の最も優れた書物を見出すのは困難だ、ましてあらゆる宗派の最良書に至つては益々困難だ、漸やくそれが見つかると同時に、それ等は間もなく反駁されてゐることだらう。書物のない方はいつでも不正だ。大膽に斷定された惡論は輕卒に提出された正論をたやすく抹殺する。加ふるに、往々にして書物ほど人を誤るものはないし、作者の感情を不忠實に現はすものもないのである。君はボシユエ

(フランスの有名な神學者、一六二七—一七〇四年)の書物によつてカトリックの信仰を判斷しようとしてゐたので、私達の生活に這入つてから、自分が非常な見當違ひをしてゐたことを發見したので。君は、新教徒に對して答へる場合の教理が民衆に教へられる時の教理と全く異つたものであり、ボシユエの書物が説教の場合の教訓と殆んど似もつかぬものであることを知つたのだ(註三三)。一宗教を正しく判斷するには、それをその宗派の人の著作で研究してはならない、彼等の中に這入つてそれを學ばなければならぬ、これは非常に違ふのだ。各宗派は各々その傳統と意見と習慣と偏見とを持つてゐる、それ等が合してその宗派の信仰精神をなしてゐるのだ、そこでこの宗派を判斷するためにはそれ等のものを一緒に結びつけて見なければならぬのである。

(註三二) プリユタルクによると、ストア學派の人々は相對立する論議の場合兩派の意見を聞くことは無益であるといふことを、その他の奇怪な逆説と共に主張したといふことである。何となれば、と彼等は言つた、最初の者は自己の論點を證明するか或ひは證明しないかだ。若し證明したとすれば終結だ、その論敵が罪せらるべきだ。若しそれを證明しなかつたとすれば、彼は不正だ、そこで却下さるべきだ、といふのである。私は排他的の天啓を認容するすべての人々の方法はこのストア派の哲學者のそれに類似してゐると思ふ。各自が何れも自分獨りに理窟があると主張してゐる以上その全部から選擇するためには、それ等の全部の言ふところを聞かねばならぬ、さもなき人は不正である。

(註三三) ボシユエの書物とは「カトリック教會の教義説明書」を指す。

如何に多くの偉大なる國民が自分では書物も作らず、ひとの書物も讀まずにゐることであらう！ 然らば何うして彼等は吾々の意見を判斷し得よう！ 又吾々も何うして彼等の意見を判斷し得よう！ 吾々は彼等をあなどり、彼等は吾々を蔑にしてゐるのだ。若し吾々が國の旅行者達が彼等を見て愚弄するなら、彼等はその仕返しをするのに吾々の國を旅行しさへすればよいのだ。何處に、明識ある人々、心の誠實な人々、正直な人々、眞理を友とする人々、眞理を傳へんがために

先づこれを發見しようとのみ努めるやうな人々が、全く存在しない國があるだらうか？ しかも各國民は自分の宗教の内にのみ眞理を見てゐて、他國民の宗教はすべて不合理と見るのだ。故にさうした異國の宗教は吾々に思はれてゐるほど異例なものではないのだ、でなければ、吾々が自己の宗教の内に持つてゐる理由だとて、何の證明にもなりはしないのだ。

吾々はヨーロッパに三大宗教を持つてゐる。その一は唯一の天啓を認容し、その二は二つの、その三は三つの天啓を持つてゐる。孰れも他を排斥し、嘲罵し、これを盲目、頑迷、冷酷、虚偽なりと言つて責めてゐる。公平な人物にして、先づ彼等の證據を仔細に調査し、彼等の理由をよく傾聽することなしに、敢て彼等を判断せんとするものがあるだらうか？ 彼等のうちで唯だ一つの天啓しか容れないものが最も古いものである、そしてこれが最も堅實なもののやうに思はれる。三つの天啓を容れてゐるものは最も近代のものである、そしてこれが最も斷定的なものに思はれる。二つの天啓を容れて、第三のものを排斥してゐるものが或ひは最も優れたものであるかも知れない、然しこれが第三のものに對してあらゆる偏見を抱いてゐることは確實だ、その無定見は眼に餘るものがある。

それ等の三つの天啓の内、聖書は、これに従ふ民衆の知らない言語で書かれてある。即ちユダヤ教徒はも早へブライ語を解しないし、キリスト教徒はへブライ語もギリシヤ語も解しない。トルコ人とベルシヤ人はアラビヤ語を解しないし、現代のアラビヤ人そのものも早マホメットの言葉を用ひない。人を教へるにいつまでも彼等の知らない言葉で話しかけるのは可成愚かな方法ではなからうか？ これ等の書物は翻譯すると彼等は言ふだらう。何といふ答へだ！ それ等が忠實に翻譯されると誰が私に保證し得るだらうか？ 又、正確な翻譯が可能であることさへ誰が

保證し得るだらうか？ それに神ともあらうものが人間に語らうといふのに、何故註解者などを必要としなければならぬのであらうか？

私には、凡ての人が知らなければならぬものが書物の中にとち込められてゐるとは斷じて思へない、又これ等の書物やその書物の話して呉れる人々の言ふことを理解し得ない人々が自分から欲したでもない無智の故に罰せられるとは斷じて考へられない。書物又書物！ 何といふ狂氣の沙汰ぞ！ ヨーロッパは書物でいつぱいになつてゐるので、ヨーロッパ人は書物が地球の四分の三には全々知られてゐないといふことを考へても見ないで、それはなくてはならぬものだと思つてゐる。書物は凡て人間に依つて書かれたものではないか？ 然らば何故人間は自己の義務を知るためにそれを必要とするのか？ これ等の書物が作られなかつた以前に於いては、人間は如何なる手段によつて自己の義務を學んだのか？ してみると、人間は自分獨りで自分の義務を學ぶか、若くは、それを學ぶことを免ぜられてゐるかである。

吾がカトリックは教會の權威を聲を大にして叫んでゐる。だが彼等も亦さうした權威を打建てたのに、他の宗派が彼等の教理を直接打建てたのに用すると同じ大がよりの證據類が必要であるとしたら、そんなことが何の役に立つか？ 教會は決定權を持つと教會が決定する。何と立派に立證された權威ではないか！ 一步を踏み出してみよ、諸君も再び吾々の討論の中に這入つてしまふだらう。

君は多くのキリスト教徒が、彼等に反對するユダヤ教徒の主張を仔細に調査する勞をとつたことを知つてゐるか？ 若し誰かユダヤ教徒について幾分でも見たものがあるとすれば、それはキリスト教徒の文書の中に見たのである。敵宗の論者を知る何といふ立派な方法だ！ だが一體

何う出来るものか？ 若し何人かあつて、ユダイスムを公然と擁護するところの書物を吾々の間に敢て出版したとすれば、吾々はその著者と出版者と書店とを罰してゐたことだらう(註三四)。この政策は、いつまでも有利な地位を持つためには好都合な確實な政策なのだ。敢て口を開かうとせぬ人を反駁するのはいとやさしいことだ。

(註三四) かゝる事實は無数に知られてゐるが、こゝに何等註釋を要せぬものが一つある。七六世紀にカトリックの神學者達はユダヤ人の書籍をあれこれの區別なく全部火に投じた、この時有名な學者ルークリン(ドイツの人道主義者、一四五五—一五二二年)は、單に、キリスト教に反對しない書物や宗教に無關係な問題を取扱つた書物は保存しても差支へあるまいといふ注告を受けただけで、氣を失はばかりの恐怖に囚はれたのであつた。

吾々の間にユダヤ人と語る機會を持つたものがあつても、大して進んではゐない。不幸な彼等は、吾々のなすがまゝになるの外はないと思ひ込んでゐるのだ！ 彼等に加へられた暴虐が彼等を臆病にしてゐるのだ、キリスト教の慈愛は不正と殘虐とを何とも思はないといふことを彼等は知つてゐるのだ。冒贖者呼ばはりされる危険を冒して彼等が敢て何を言ひ出すであらうか？ 貪慾が吾々を熱狂させてゐる、そして彼等は不正ならんとするには餘りに富んでゐる。最もよく物を心得てゐるもの、最も事情に明るいものは常に用心深い。君は彼等の或る者を改宗させることは出来るだらう、金を與へて自分の宗派を罵らせるのである。君はある卑劣な古着屋に喋らせることは出来るだらう、彼等はいくらでも君におべつかを使ふだらう。君は彼等の無智と怯懦に凱歌をあげることが出来るのだ、ところが彼等の大先生達は君の愚劣を黙つて笑ふことだらう。だが君は、彼等が安全地帯と確信してゐるところでも、同様に不安い取引きが出来ると信ずるか？ ソルボンヌではメシヤの豫言がイエス・キリストを指してゐることは太陽のごとく明白だ。ここ

ろろがアムステルダムユダヤ教師達の間では、それがキリストに何の關係もないことが同様に明白なのだ。私はユダヤ教徒達が何の危険もなしに自由に論議し得るやうな自由な國家及び各種の學校を持たない限り、彼等の教理を充分に傾聴したことがあるなどは決して思はない。たゞさうなつた場合に於いてのみ吾々は始めて、彼等が言はんとするこのものを知り得るのである。コンスタンチノープルでは、トルコ人は自分の理論を述べるが、吾々は敢て吾々の理論を吐かうとはしない。そこでは吾々が畏縮する番だ。吾々がユダヤ人に向つて彼等の信しないイエス・キリストを尊敬せよと要求するやうに、トルコ人が吾々に向つてマホメットを同じやうに尊敬せよと要求するとしても、それでトルコ人が不正なのだらうか？ 吾々に理があるのだらうか？ 如何なる公平な原理に照してこの問題を吾々は解決するのであるか？

人類の三分の二はユダヤ教徒でもマホメット教徒でもキリスト教徒でもない。チーゼヤイエス・キリストやマホットの噂さへまだ曾つて耳にしたことのない者が何百萬人あることだらう！ これを否定する者がある、彼等は、吾々の宣教師は到る處に赴くと主張する。こんなことを口で言ふのはいとやすい。だが、彼等は、現在まで一人のヨーロッパ人も這入つたことのない、未知の世界、アフリカの眞中へ行つてゐるか？ 法王の噂どころか、ラマ大主教についてさへ何も知らないやうな、勿論異國人に接したことなど決してない漂泊民族を騎馬で追ひつゝ、彼等はタルタリ内海(トルケスタン地方)へ赴くか？ 彼等は、他の世界の人間が自分達の岸へ上陸したことを全國民がまだに知らずにゐるやうな廣漠たるアメリカ大陸に入り込んで行くか？ 彼等は、彼等の行つた術策のために永久に追放された日本へ、彼等の先輩が秘かにその帝國を占領するために僞善者的な熱心を以つてやつて來た狡猾な陰謀者としてのみ子孫代々に知られてゐるかの日本へ赴く

か？ 彼等はアジアの王侯達のハンエム（同々教徒の婦人部室）に這入つて、何千といふ哀れな奴隷女に福音を説いてゐるか？ 世界のこの方面にゐる婦人達は一體如何なる宣教師からも信仰を説いて貰へないほどの何をしたか？ 彼女等は贅居生活をしてゐるといふ事のためにすべて地獄に落ちるのであらうか？

假りに全地球上に眞實に福音が説かれるやうになるとしても、その場合人々は如何なる利益を受けるであらうか？ 或る國に始めて宣教師が到着したとして、その前夜に彼の説教を聞き得なかつた何人か々死んでゐることは争へない。さて然らばその人を吾々は何うすべきか、それを私に言つて呉れたまへ。世界中に遂にイエス・キリストを説き聞かされたことのない人が唯の一人でもあつたとしたら、この異議はその唯一人の人のために、全人類の四分の一の人のための異議と同じく力強い筈である。

宣教師達が遠い國々の民に福音を説き聞かせてゐた場合に於いても、彼等の述べたことを果してその國民達は彼等の言葉通りに正しく認め得たであらうか、又それこそ最も正確な證據が要求されなかつたであらうか！ 諸君が私に向つて、二千年も昔に、遠い世界の隅に、私の知りもしない何處かの小さな町の中に、一人の神が生れて死んで行つたといふ話を聞いて聞かせる、そしてこの不思議な話を信じない人は凡て地獄に落されると言ひ聞かすのだ。私の知りもしない唯一人の人の言葉を信用して即座にこれ等のことを信ずるとしたら、それこそ不思議なことではないか！ 神はさうした事件を是非私に知らせたいといふのに、何故そんなに私から遠いところにその事件を起したのであらうか？ 地球の向ふ側に向つたことを知らないのが罪なのか？ 他の半球にへブライ民族とエルサレムといふ町があるなどといふことを、私は知ることが出来ようか？ それ

ならいつそ月の世界に起つてゐることを知らねばならぬと言つて貰ひたい。君はそのことを私に教へに来たのだと言ふが、それなら何故君はそれを私の父に教へに来なかつたのか？ 若しくは何故あの善良な老人を何も知らなかつたからと言つて地獄に落すといふのか？ 君の怠慢の故に、あれほど善良な、あれほど親切な、あれほど眞理のみを求めてゐた人が永遠に罰せられなければならぬのか？ 眞面目に考へて呉れたまへ、そして私の身になつて呉れたまへ。私は、唯だ一人の君の證言によつて、君の語つたところの信ずべからざる話をすべて信じなければならぬのか、何うか、またこれほどの不正を君の教へて呉れる正義の神と調和させねばならぬのか何うか、それを考へて呉れたまへ。何うか私を、その前代未聞の奇蹟の行はれた國を見に行かして呉れたまへ、何故エルサレムの住民達が神を悪漢のやうに處刑したのかを聞きに行かして呉れたまへ。彼等は彼を神とは知らなかつたと君は言ふ。それでは私は何うしたらいいのか、私は彼のことについては君の言ふことより外には何も聞いたことがないのだ！ 君はそのあとへ附加して言ふ、彼等は罰せられ、離散せしめられ、壓迫され、奴隷にされた、彼等の一人と雖ももう再びこの同じ町に近づきはしないのだ、と。成程彼等は充分そんな眼にあつてよからう。だが今日の住民は彼等の先祖が行つた神の處刑について何う思つてゐるのか？ 彼等も彼を否定する、彼等は矢張り神を神として認めない。それ故にこれ等先住者達の子孫は放任して置いて構はないのである。何と！ 神が死んで行つたその町に於いてさへ、前の住民も後の住民も彼を少しも認めないといふに、君は、私に、二千年後二千里もかけ離れたところに生れたこの私に、彼を認めさせようとするのである！ この書を君は聖書と呼ぶが、私には全々解らない、これを信ずるには、先づその前に私は、この書が何日如何なる人によつて作られたか、如何に保存されて來たか、如何に